サマースクール

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サマースクール

【Ｎコード】
Ｎ１５７６Ｌ

【作者名】
上葵

【あらすじ】
家族はみんな祖父の家に帰省しているため、しばらく自宅に一人暮らしという状況。
夏休み前半を夏期講習でつぶされた僕は、家族について行くことが許されず、一人寂しく登山を実行していた。
手には友人・橘から受け取った憂鬱なプレゼント。
突き返す前に遠くに行ってしまった彼に代わり、それをポイ捨てしようと頑張る僕の先に現れたのは、泣きっ面に蜂という言葉にピッタリの無邪気な少女の笑みだった。

1初夏、邂逅、スクラップ（前書き）

心機一転頑張っていきたいとおもいます。
今回しか前書きを書かないと思うので、何か良いことを言いたいとは思うんですが…、何も浮かばない。
まあ、いつものことですよね……。
とにもかくにも、どうぞ宜しくお願いします。

1初夏、邂逅、スクラップ

鳥が空を飛ぶ。その姿をイメージをする時、曇り空を思い描く人はあまりいない。殆どの人が抜けるような青空を想像するだろう。

空はなぜ青いのか、という質問に屈折率を引き合いにだすのは間違っている、ロマンチックな返答を期待する人はそう言うが、それ以外の回答があるなら教えてほしいし、なにより前提が間違っていると、僕は思う。

空は青だけでなく、いろんな色に満ち溢れている。

黄金色から始まった空は様々な色をへて、夜の色へと染められていく。一日だけで多くの彩りを見ることができるのだ。質問自体が別次元に存在する2つを比べることなんて出来るわけがない。

そんな多彩な世界で僕が今望むのは輝く太陽の光を遮断してくれる白い雲の存在だった。

うだるような暑さとはよく言ったものだが、今日はまさしくそんな気温だった。炎天下の三文字が僕を照り焼きにせんとつつみこんでいる。

朦朧としだした意識を繋ぎとめるよう、ぬるくなったスポーツドリンクに口につけた。爽快感はなく、口内に独特の風味を残すだけだ。滝のような汗がシャツをピタリとくっつけ、えも言われぬ気持ち悪さを演出していた。

重たくなった足を引きずって一歩一歩を確実に前に進ませる。鬱陶しくもジージー鳴き声を上げるセミだけが、僕の世界の他者だった。辺りに人の気配はない、好都合だ。

僕は今、最悪な気分のまま、近所の小学校を見守るように存在する山道を登っていた。母校をチラリと横目に見ながら、息を切らせて歩き続ける。

山、というよりは丘という表記の方が正しいのだろう。在校時、この丘には生徒は近づいてはいけないという校則が存在していた。

自然と触れさせる恰好のスポットだというのに、教師がそう取り決めたのには理由がある。

丘陵の山林を抜けた場所に、巨大な不法投棄場があるのだ。県外からも持ち寄られ、見る見るうちに膨れ上がった非合法のゴミ捨て場は今や立派に市が抱える大きな問題に成長していた。

中学生の時、ボランティアと称してよく山林のゴミ拾いをさせられたもんだが、それでもそこがなくなることはなかった。中学校ごときが扱える問題ではなかったってのもあるし、業者を呼んで処理してもらってもすぐに元の状態に戻ってしまうからである。

地元民としては頭を悩ませるべき問題なのだろうけど、今はその存在が有り難った。

物を内緒で捨てに行くからである。

ちらりと視線を僕の歩みにあわせ振り子のように揺れる紙袋に落とす。

手にもったパンパンの紙袋。僕が軽い遊山するはめになったのは全てこいつのせいなのだ。

ようやく不法投棄場についた。視界に広がるゴミの山、憎むべき存在のはずなのに、感謝の念が巻き起こるのは本来ならばあってはならぬことだろう。

小さいものから大きいものまで、色々な物に溢れている。

粗大ゴミの不法投棄は費用がかからなくて家計には助かることだろう。この辺まではうまいこと車であがれるし、これだけ物が溢れていれば自分のは紛れてわからなくなる。セコい人たちだ。

まあ僕は人の事言えないのだけど。

とりあえずここまで来たら一安心だ。真夏はちょっとの運動で汗が吹き出すから、少し休憩することにしよう。僕の目的地はこの先もう少し行ったところにある古い掘っ建て小屋だ。この不法投棄場は通過点にすぎない。

足元に紙袋をドシンと落とし、安堵の息をつく。ちょうど日陰になっている位置なので、心地よい自然のクーラーを全身に浴びることができる。そよそよとはりついた髪をやさしく風が乾かしてくれた。

ようやくこの厄介ごととお別れできる。そう思うと無意識に頬が綻び、悩みの種だった紙袋を見ても沈鬱な気分にはならない。

「そこで何してるのかな？」

ギクリ、とした。

どこからかまだ幼さが残る声がしたのだ。慌てて辺りを見渡すけれど声の主は見当たらない。

気のせいか？

人の気配はなく、蝉の鳴き声しかしない。長く休みを取りすぎて耳がおかしくなったのだろうか。ともかく、この場を去ろう。

無理やりそう決めつけると、幻聴が聞こえはじめた自分の意識を保つため、少し強めに頬を一回叩き、寄りかかっていた木から背中を放した。足元にある紙袋の紐を取ろうと腰をかがめた時、はっきりと物音がしたので顔だけあげてみる。幻聴ではなかった。

女の子が積まれたタイヤの横からひょっこりと顔をだし、ぴょんぴょんとゴミを避けながら僕に近づいて来ていたのだ。天狗のような身のこなしで着々と僕に近づいてくる。

なんてこった。

僕は額を軽く抑え、一瞬にして目の前まできた彼女に視線を合わせた。

ポニーテールの女の子が立っていた。小さな輪郭を際立たせるよ

うにセミロングの髪を後ろで結った、身長はそれほど高くなく、おそらく中学生くらいの少女。小柄ながらフットワークは随分軽そうだった。活発という二文字がお似合いである。
「こんなところで何してるの、あなた？」
表情は柔和だけど、声は固い。僕より頭一つぶん低い女の子だというのに、物腰は随分大人びていた。
「不法投棄」
「え、……」
正直なその漢字四文字にボタンのようにばっちりと円く開いた愛嬌のある瞳が曇る。柳眉を逆立てキツい口調で彼女は声を荒げた。
「その行為がどれだけ街の人の負担になってるかわかってるのかな？」
「それはもう。塵も積もればなんとやらだからね」
そもそも僕が街の人だし、学外体験でゴミ拾いを経験したのだ。袋何十個ぶんと高く積まれた山を今もありありと思い出すことができる。
「わかってるなら、やめた方がいいんじゃない。迷惑だし、持って帰ったら？」
正直な回答に困ったように眉間にシワをよせながら、一端の新任教師のような口調で僕に命令する。
「んー、一つ真実を言わせてもらえばこれは僕のゴミじゃないんだ」
「んじゃ、なんなの？」
「言っても信じてもらえないだろうけど、」足元の紙袋を指差して、現行犯は言い訳を開始する。いや、僕の場合は本当の話だ。一応言っておきたかった。
「知り合いに無理やり渡されたんだ。迷惑なことに」
「っもう、だったらその人をここに連れて来て。私が説教してあげるから」
「そうしたいのは山々なんだけど、生憎彼は旅行中なんだよ」
僕にこれを渡すだけ渡した真犯人、橘は今頃韓国でキムチでも食

っているだろう。夏休みに入ってすぐに家族旅行だから羨ましくはある。
「なんだか胡散臭い言い訳」
「言い訳だろうとなんだろうと、事実なんだ。地元民として心が痛むけど、僕にだって事情がある」
「それは違うよ。関係ない」
呟くと、彼女は地面の紙袋を爪先で軽く蹴飛ばした。僕を焚き付けるつもりで、小突くつもりだったのだろうが、存外力がかかっていたらしい。紙袋はバタンと倒れ、中身が勢いよく滑り出した。
「な、ぇ？」
目も塞ぎたくなるような状況になってしまった。

アダルトＤＶＤだった。
どキツいピンクのパッケージがこげ茶色した地面に彩りを加える。もちろん紙袋全てがＤＶＤというわけではないが、中身は全て１８歳未満お断りの雑誌などなのだ。
彼女の瞳孔は大きく散開、口はわなわなと見るからに戸惑っている。震える人差し指で、その惨状を指差しながら何か言おうとしているけれど、言葉を纏められず、「ひゅ、ひゅ」間抜けな空気が漏れる音がするだけだった。乙女には早過ぎる世界だ。
「物は大切に扱おう……」
そのままにしておくわけにもいかず僕は取り繕うようにしゃがみこんで、散らばったマニアックな性癖をお持ちの皆様には大好評のブツを集めはじめる。橘の平和なツラをぶん殴ってやりたい。
「あ、ぇ、ご、ごめんなさい！」
何故か彼女は顔を真っ赤にさせて謝罪を口にした。ひとえにＤＶＤの効力だろうか。しかもこれ、熟女オンリーなのだ。なんだか泣きたくなってきた。
橘が僕にこれを託したのは昨日の朝のこと。なんでも付き合っているカノジョに見つかってしまったのだそうだ。「私というものが

ありながらなんでこんな物っ！」と処分を言い渡された橘は捨てるのは忍びないと無理やり僕の家に痴話喧嘩の原因となったアダルトDVDを置いていったのだ。なにが「お前もこういうのに興味をもつ歳だろ？」だ。

とにかく僕には大迷惑な話だった。捨てるにも地域指定のルールがあるし、売るのもどうにも恥ずかしい。突き返そうにも橘はいまは遠く、途方に暮れた僕が思いついたのが、不法投棄という最後の手段だったのだ。

もちろん良心の呵責はあるが、緊急避難というやつだ。名も知らぬ少女に知られてしまった時点で、天罰が下ったみたいだけど。

「それじゃあ、いいかな。僕もなにかと忙しいんだ」

袋に再度恥辱の物を回収し終わり、腰を伸ばして汗を拭う。立ち眩みに似た疲労感が僕の頭を揺さぶった。そう、僕は確かに忙しい。

一学期に自主休校を連発してしまったので、今日から始まる夏期講習に強制的に参加するという条件で、ギリギリ単位を取らせていただいたのだ。今だって学校帰りなのである。

その上家族は今朝から僕一人を置いて実家に帰省中。数日限定の一人暮らしにワクワクを積もらせるより、家事をやらなくちゃいけない憂鬱の方が遥かにデカく、溜め息はついてもつき足りない。

気のせいかさっきより重くなった紙袋を手に持ち、早足でその場を去ろうとした。目的地はこの先の掘っ建て小屋。通称エロ本小屋である。

噂にはなっていた。暗黒街（不法投棄場の別称）を抜けた先、エロ本に溢れた掘っ建て小屋がある、と。当時の幼気な小学生男子の僕たちはエロに若干の興味はあるものの表だって行動をうつすことなく、女子と遊んだものがいれば「〇〇エロー」と囃したてるバカガキだった。よって、噂の真意を確かめようとはせず、大人しく校則に従って健全な遊びに明け暮れたものである。

中学校に上がって状況はターニングポイントを迎えるする。他の

区から来た少しマセた友達ができたことにより僕たちの視野は大きく広がったのだ。そいつはやけにエロ知識に詳しく、どこの学校にでもいる思春期少年だった。そして例にもれず、手ごまねく僕たちに勇敢に「エロ本小屋に行こうぜ！」と提案したのだ。５人くらいで今の僕と同じように山を登り小屋を見つけ出し、中に入って目を円くした。噂は本当だったのだ。

それ以来足を運ぶことがなかったソコに再び行くことになるとは思わなかったが、木を隠すなら森の中、エロＤＶＤ隠すならエロ本の中、という標語に従ってここまではるばるやってきたのだ。

長い回想になった。

僕の痴態を目撃した彼女と目を合わせないように、あの時を回想しながら奥へと歩みを進める。彼女だって、いきなり現れた変質者（誤解だけど）とお日様の下、立ち話を交わしたくはないだろう。

「待って！」

なので呼び止められる意味が分からなかった。

彼女は先ほどと同じように鈴を転がしたような声で僕の背中に呼びかけて、距離を埋め合わせるようにそっと僕に近づいてきていた。

息を吐き出しながら、振り向く。太陽に照らされ栗色になった髪を揺らしながら、女の子はブツブツと呟きながら僕の正面に立った。

「最悪な出会い方」彼女の呟きにそんな単語が聞き取れたけど、それには首を縦にふって同意せざるをえない。

「えっと、何？」

呼び止められたはいいが次の言葉がいつまで経っても来ないので、たまらず僕は尋ねた。

「あっ、ごめん。ついつい自分の世界に入っちゃってたよ」

「はあ」

あっけらかんと破顔一笑して彼女は続けた。

「私を助けてくれないかな？」

「…え？」
「あなたなら出来るはずだから」
どこかでカラスが鳴いたけど、元気にいっぱいのセミの声にかき消されている。
いきなりの発言に脳は真っ白。だけど残った回路で鼓膜に確かめてみるが、彼女の発言を裏付けをするだけだった。
初対面の人に助けを求めた少女は別段逼迫した感じではない欣々然とした笑顔を浮かべて僕にお願いをしてきたのだ。
やっぱり理解不能だった。

2欲望、衝動、蝉時雨

当初の目的地である掘っ建て小屋の軋んだドアをあけ、二年前と変わらぬその様子にホッと息をつく。僕の視線、というか足元はいかがわしい雑誌や本に溢れていた。

人を待たせているので長居は出来ない、この紙袋を適当なところに置いたらそうそうに去らなくては。

そう思いながらも、小屋の中は吹きさらしだからだろうか、心地よい風が僕の脳をそよそよ冷やしてくれる。申し訳程度についている屋根が太陽光をシャットアウトしてくれているので、四阿のように中は妙に過ごしやすいのだ。足元に広がるエロ本に目をつむれば、だが。

「ふう」

こんなところで休憩を取る気は微塵もないけど、一息ついて先程の出来事をまとめることにした。

数分前。

少女に助けを求められた僕は、襲いくる熱気にめまいを覚えつつ、どうしたものかと考えていた。手でひさしをつくり直射日光が視神経が狂わないようにしてから反射を繰り返す夏の日差しが幻を作り上げているかと疑ってみたのだが、少女は確かに目の前に存在していた。

「それで、助けてくれ、ってどういう意味？」

蝉時雨が耳に響く。初夏の蝉たちは来たるべくサマーシーズンに向けて元気の前借りをしているように活発だ。そんな鳴き声の中でも僕の言葉はきちんと少女に届いたらしく、嬉しそうに胸の前で一回パンと手を叩くと、笑みを浮かべた。

「話を訊いてくれるんだね！ありがとう！」

「まあ、聞くだけならいくらでもするけどさ」
「よかった。そうだね、うん。それじゃまず最初に自己紹介をしようよ。お互いの事を話合おう！」
機嫌が良さそうでなによりだが、お喋りに花を咲かせるには相応しくない場所に僕らは立っている。場所変えを要求したいところだが、彼女は笑顔のまま、勝手に話を進めていた。
「私の名前は、花見川むくげ。よく変わった名前って言われるんだけど、覚えやすくっていいかなって自分では思ってる。趣味は映画鑑賞。没個性的な趣味と批判されがちだけど、実際にそうなんだから仕方ないよね。好きな食べ物はイモ天。嫌いな食べ物はトマト。これだけはどうしてもなれないんだ。特技は、まあ後で言うとして私の自己紹介は、とりあえずこんなところかな」
胸に手をあて滑らかで淀みなく一気にまくし立てた。
はなみがわ、むくげ、ね。
言う通り変わった名字に名前である。
むくげは多分花の名前だろう。園芸部員ではないので詳しくは知らないが、ただなんとなくそう思った。
「それであなたはなんて名前？別に絶対必要ってわけじゃないけど便宜的に呼び名は必要だと思うんだ。いつまでもキミやアナタじゃ不便だから」
「白江藤吾。趣味は、…特にない。それから、えっと……好き嫌いもあまりないかな」
言うことがあまりない僕の方こそ没個性的な人間なんだろうが、初対面の怪しげな少女に警戒心を抱くなという方が無理な話である。
はっきり地元の高校一年生で民族学部の幽霊部員、趣味は散歩と小旅行、家族構成は父、母、妹、とでも言えば彼女が満足するとは思えないのでこれでいいのだ。
短い自己紹介にフンフン頷いてから、彼女は口を開いた。
「しらえとーご。うん！響きはけっこう好き。リズムがあなたにピッタリだもん」

「それはどうも。誉め言葉として受け取っておくよ」
響きとか言われたのも初めてだ。
「それで、あだ名みたいなのはないの？こう小学校からずっとこう呼ばれてるとかニックネームってやつ」
「あだ名ね。そうだなぁ……」
いきなり聞かれてもパッと思い浮かべるものがない。というか知ってどうする？まさか、そのあだ名で僕の事を呼ぼうというのであれば、滅多なことは言えなくなるぞ。
「これと言って、特徴的なのはないかな。人から呼ばれる時は全部名字か名前。藤吾か白江でしか呼ばれたことないや」
「じゃ、私がつけてあげる」
まっぴらごめんだ。
ただ口に出すのも忍びないので露骨に嫌な顔をしてみたのだが、彼女はちっとも気がついてくれなかったみたいだ。
「藤吾、だから。トウちゃん、ってのはどうかな？」
「どうもこうも嫌すぎるよ。なんだか悪意を感じるんだけど」
ネーミングセンスの欠片もない。父親の呼称になっている。わざととしか思えないあだ名を天然で思いついたのだとしたら逆に驚きだ。
「えー、ダメかなぁ。私は凄い好きなのに、親しみやすくなるし愛嬌三割増しだよー。ピッタリだと思うんだけどなー」
不思議な呪文のように語尾を伸ばして無理やり認めさせようとしてきた。
「…好きなように呼べばいいさ」
ここで拒否しても、彼女は呼んできそうだったので、渋々そのあだ名で妥協することにした。
「やったー。大丈夫！あだ名は最初違和感感じるかもだけど、いつか気にいる時がくるからさ」
「だといいね」
何世紀後の出来事だろうか。

「んょし、それでは！」
わけのわからない話でけっこう時間が潰れていたのを見越してか、花見川は大きくそう区切りをつけてから続けた。
「本題に入るね」
本題、彼女が僕に助けを求める理由だ。正直あまり気が進まないが、彼女がどんな悩みをもっているのかは興味はある。一見明るくハキハキした様子から悩みはなさそうなのに。
と、期待値が僕の使命を越しそうになったところで肝心なことがまだ僕の足元に転がっていることを思い出した。
「その前にちょっといいかな？数分で済むからさ」
「いい感じに出鼻を挫くね。なにかあるの？」
恨めしそうに僕を睨みつける花見川。彼女の語りに本来の目的を忘れそうになったがあくまで僕の目的は人助けではなく、１８禁紙袋の不法投棄なのだ。
「コレを置きに行きたいんだけど」
僕の用事にはそう時間はかからない。せいぜい5分くらいだ。それなら用事を済ませてから彼女を話を聞いたほうが、心残りがなくていい。なにより彼女の語り口は長くなりそうなのだ。
「か、紙袋……」
花見川は夏だというのに、白い陶器のような頬を上気させ、もうその話は止めてくれ、と口元を手のひらで覆った。少女らしく初々しい反応だが、一つだけ言わせてもらえるならば、この紙袋の中身の本来の持ち主は橘だ、ということくらいだ。
「ど、どうぞ。出来ればもう私の目につかない遠くにやってほしいな」
「悪いね。戻ってきたらちゃんと話聞くから、ここで待ってて」
「ラジャー。できるだけ早くしてね」
短い返答を背中で受けて不法投棄場を奥に進んだ。
目指すはエロ本小屋こと古い木造建築。あそこなら、コイツも目立たなくなるし、なにより中学生に夢を与えることができる。熟女

趣味の中学生なんているのかわからないけど新たな世界に目覚めるきっかけとして、紙媒体から動画になるのだから大きな進歩だろう。
いや、それはただ自分にするだけの言い訳だった。正直に言うならば、そんなのどうでもいいから、コレとお別れしたかったのだ。
断固として不法投棄許すまじの姿勢を取っていた花見川を、無理やり納得させた腕利きのネゴシエーター。彼に会うことはもうないだろう。

「よし、っと」
頭を切り替えるように軽く背筋を伸ばす。
紙袋はエロ本に囲まれて、真の仲間を得たようだ。
果たすべき目的を完遂したので、もうこんなところに用はない。
さっさと、出よう。
なんだかんだで目の毒だし、そこはかとなく空気は悪いんだもん。
最後にもう一度息を吐いてその場を辞しようと回れ右で体を傾きかけた時だった。
「こんなとこに小屋なんてあったんだねー」
僕の安息を切り崩すかのように場にそぐわない間延びした声が響いた。ほとばしる嫌な予感を抑え、後ろに何者かが来た気配を感じる。
「花見川…」
思わず彼女の名前を呟いた。待っていろと言ったのに着いてきてしまったのか。振り向いて、ダッシュでその場から駆け出そうかと思案したけど、彼女はすでに目の前に来ていたので断念した。
「私の事は下の名前のむくげってよんでよ。それよりこんなところに小屋があるなんて秘密基地みたいでワクワクしちゃうなー」
そう言いながら中に足を踏み入れようと前進して来た。それを妨害するように、彼女の体の前に移動する。
「？トウちゃん、なんで邪魔するの？」
「いや、ねぇ……」

あからさま進路妨害に彼女は疑問符を浮かべた。
秘密基地ではないけど、この先に広がるのは秘密の花園だ。僕が持ってきたアダルトＤＶＤなんて可愛く思えるくらい大量のピンク。得体の知れない恐怖とまだ見ぬコレクターの不気味さに本来起こるべく性欲もわかなくなるだろう。
常人が見たら引くくらいのこんもりとした山。思春期真っ盛りの中学生だった僕たちでさえ、不気味に思って引いたくらいだ。尋常じゃない異空間に、花見川は絶対に耐えられないだろう。本当に誰だよ、こんなに収集したの。
「この中に紙袋を置いたんでしょ？」
「う、うん」
「隠れ家っぽくていい感じなのになんでそんな残念なことやっちゃうか、…な、ッ」
止められず、ひょこりと顔を動かした彼女が絶句した。
どうやら僕の肩越しから見てしまったらしい。惨状を。
獲物を追うカメレオンのように眼球を動かし、口をあんぐりと彼女は戦慄いた。それも数秒で、やがて彼女はさっきの反応とは比べものにならないくらい顔を真っ赤にし、歯をカチカチと鳴らして、視線はどこに合わせればいいのかと宙をさまよい初めたところで、紅色に染まった彼女の顔はほどなくして青くなった。
さぞ恐怖だろう。コレだけ大量のエロ本なんてそうそうお目にかかれるモノじゃ――
「ふっ、ふ、」
「え？」
「不潔ゥッー！」
最後に見たのはドングリのように大きく見開いた目に微かに涙を溜める花見川と、青く澄わたった、空だった。
僕の世界がくるり回る。
ブランコにいきなり乗せられた後、空中ジャンプを強制されたかのようだ。

着地失敗したお尻、背中、頭と緩やかな痛みにつつまれた。
たったった、と逃げて行く足音をソナーのように耳が捉えた。音はだんだん、遠く、小さくなっていく。
花見川がこの光景にびびって逃げ出したのだ。何故か、僕に攻撃を加えて
「はあ……」
ため息をつく。押されて後ろに倒れたのだが、幸か不幸か、エロ本の山がクッションになってくれたからだろう、ダメージはない。
なんで、今日はこんなについていないんだろうか……。

夏期講習は強制参加だし、
登山をする羽目になるし、
アダルトＤＶＤを女の子に見られるし、
オマケにこんなところに立ちすくんでるとこまで、
今日ほど不幸な日はそうそうない。ため息をつくと幸福は逃げるというけれど僕に残された幸福ゲージは限り無く０だ。
そう思いながら、頭にかかった『魅惑のＤカップ』のピンナップを叩き落とした。

3 憂鬱、帰宅、お約束

用事を終えた僕は玄関のドアを開けて、静寂に支配された我が家に足を踏み入れた。

ドアにカギはかかっていない。鞄を置きに戻ったときに外出するのはせいぜい三十分と思い、カギをかけなかったのだ。その油断が命取りと言うことにはならなかったようで、一安心である。

家族は全員、母方の実家に帰省しているので、今日から一週間ほど僕はこの家に一人きりになる。ホームアローンな状況のわけは、帰省しようにも僕一人夏期講習強制参加という不名誉を与えられてしまったからだ。一学期ろくに授業に参加せず、遊び歩いたツケがココで回ってきたのだ。自業自得だけど、夏休みは夏休みで長期休暇を満喫したかったので残念である。

タタキで靴をぬいで、家にあがる。シンと静まりかえった空気は僕が一人だと言うのを浮き彫りにしているようで妙に生々しかった。さて、これから何をしようか。

昼食は夏休みに入ってもクラブや補修の学生のためオープンしている学食で済ませてきたのでお腹はすいていないし、今からテキストをやるのも気分がでない。

ふむ、そうなると本当にやることがない。時計はまだ三時にも達していないし、居間でボーとするのも時間がもったいない。

外に出て汗をかいたので、お風呂にでも入ろうか。

チラリとそんな事を思った。うちのお風呂は基本夕方なのでいつもはこんな時間には入らないのだが、そんな家庭習慣を崩せるのが一人暮らしのいいところである。よし、そうしよう。

決定。僕は早速浴槽に湯をはるため、風呂場にむかうことにした。日の光がはいらない家の廊下は薄暗く、夏でもどこかジメジメとし

ている。さっぱりした気分にする意味もこめて、お風呂という選択は利口な判断だろう。
それにしても、さっきの…花見川むくげだっけ？
一体何だったのだろうか。助けを求めてきたはいいが、小屋の惨状をみて、逃げ出した少女。それきり、彼女には会っていない。
下手に厄介事を背負わなくてすんだはいいが、喉につかえた小骨のように妙に気になる。　まぁ、もう会うこともないから気にするだけ脳細胞の無駄というものだ。
そう判断し、脱衣場の先の風呂場のドアをスライドさせた。

場が、凍りついた。
「……っ」
居るはずのない、僕の妹が湯船にアヒルを浮かべくつろいでいた。
一瞬目が合う
。
「……ただいま、モモちゃん」
「出ていってっーー！！！」
飛んできたアヒルがおでこにクリティカルヒットを食らわせる。倒れこむように僕は脱衣場に追いやられた。だけど追撃はやまない。続いてタライ、石鹸、タオル、果てには浴槽に敷くマットまで飛んできた。謝罪の声を上げながら、スライド式のドアを閉めの方向に引っ張る。
チラリと目にしたモモちゃんは顔を真っ赤にして右手で胸元を抑えていた。もし片手だけで風呂釜マットを投げたのだとしたら結構の怪力である。僕が知らぬ間にたくましく成長したようだ。
「そこからも早くでてってください！！」
まだ脱衣場に僕がいることを見抜いたモモちゃんが風呂場に声を響かせた。
白江桃里（しらえとうり）、ことモモちゃんは思春期真っ盛りの中学生で、二つ年

下の僕の可愛い妹である。
兄妹仲はそこそこ良い方、だった。
なぜ過去系なのかというと一年ほど前から家族内における彼女の態度が僕にだけやけによそよそしくなったからである。
それまでは下の名前に「くん」付けだったのに、去年から急に「兄さん」と呼び始め、僕に対してはなぜか敬語で話すようになってきたのだ。いくらなんでもこれでは他人行儀過ぎるので止めるように言ってもきいてくれないし、理由を尋ねても「なんでもありません」とお茶を濁されるだけだった。
その頃はまだ返事をしてくれるだけ良かった。最近じゃ、家で僕と会ってもろくに口をきいてくれないし、僕がリビングに行くと、すぐに自室に籠もるようになってしまったのだ。
と、今は僕と妹についての関係はどうでもいい。問題は一つだ。
本来ならば両親とともに親戚の集まりに行っているはずの、モモちゃんがなぜ家にいるのか？ということである。
一週間ほど前、もうすぐおばあちゃん家だ、と母さんと楽しそうに笑っていた彼女に「兄さんは行けないよ」と自虐を言うと、「そうですか」と冷たくあしらわれたのだから、今日から帰省するという予定は確かなはずなのに……。中止にでもなったのだろうか？
どちらにせよ、モモちゃんが居て、専業主婦の母さんが家に居ないのはおかしなことである。
家族を心配する気持ちが不安という影になって僕の胸を締め付ける。そんな気持ちを誤魔化すように僕はキッチンに立っていた。どうやら今の騒ぎにカロリーをだいぶ消費したみたいだ。

「なにしてるんですか？」
リビングに妹が入ってきた。
髪の毛がまだ完全に乾ききっていない。風呂上がりというのを物語るようにシャンプーの香りがほのかにただよう。
女の子の風呂は長いというが、彼女も例外ではないようだ。風呂

を待っている間に料理が完成していた。
「グッドタイミングだね。丁度今できたとこ」
なんだか妹と久しぶりにまともに会話をした気がする。いつもは何も言わないか、僕が話かけても素っ気ない返事をするだけだからな。
出来たてホヤホヤの手作りチャーハン二人前を食卓に運ぶ。お昼は確かに食べたけど、なんだか小腹がすいたのだ。それにお風呂があく時間を待つのも退屈だったし。
「チャーハン、ですか」
「そ。モモちゃん、ウィンナー食べられたっけ？一応入れといたんだけど、無理なようなら除けといて」
「お昼なら自分でどうにかするんで、いりません。お、お腹もまだすいていませんし」
モモちゃんはそう言って、水槽のグッピーやらゴリドラスやらにエサをやり始めた。
……コレどうしよう。チャーハンに視線を落とす。一人で食べきれる量ではない。
「お昼済ませるってカップラーメンでしょ」
「インスタントラーメンです」
水槽から目を放さずに応えられた。料理が出来ない彼女が作れるものはたかがしれている。
「同じようなもんだよ、そんなのばっかりじゃ栄養偏っちゃうでしょ。チャーハン食べるだけで大分マシになるんだから」
「具に千切ったキャベツを入れるんで食物繊維は取れます」
「だから、そうじゃなくて――」
僕が必死に説得を続けようとした時だった。
きゅるるる
と猫が喉を鳴らしたような小さな音がした。発信源はモモちゃんのお腹からだ。ベタなことに、腹の虫が神懸かり的タイミングで鳴いたのだ。

「……」
二人とも無言になる。
モモちゃんはピクリとも動かない。
僕も何も言えずにただ突っ立ているだけである。
今、室内に動きがあるのは、時計の針と、チャーハンからあがる湯気だけだった。
「し、」
そんな空気を気にしてか、モモちゃんはどことなく恥ずかしそうにこちらを振り向き、食卓のチャーハンを指差していった。
「仕方ないですね、ここで残して捨ててしまうのも勿体ないですし、いただくことにします」
「召し上がれ」
僕としては彼女に満足してもらえればそれでいいのだ。これは裸を見てしまったお詫びみたいな物だし。
二人向かい合うように席につき、小さく手を合わせて食事を開始した。レンゲなんて本格的なものウチにはないのでスプーンでチャーハンを掬って口に運ぶ。
会話は、ない。ただ時計の針が進む音だけが響く。二人黙々とチャーハンを食べるだけというのもシュールなので、モモちゃんに話かけることにした。
「母さんはどうしたの？父さんは？」
「……」
「あんなに楽しみにしてたのに何があったの？」
「……」
「モモちゃんだけなんで家に残ってるのさ？」
「…兄さんのせいです」
全て無言で済まされるかと思ったら最後の質問だけには応えてくれた。だけど、目は合わせてくれない。スプーンを口と皿とで往復させているだけだ。

「パパもママも、今頃は島根です」
母方の実家があるのが島根県なのだ。年に一度この時期に母の実家で親戚を一堂に会した集まりがあるのだが、件の通り、僕だけ用事があり置いてけ堀りを食らう予定だったのだ。仕事の都合などしょうがない場合は出なくてもいい。それは当たり前のことだけど、母さんの実家はなかなかのブルジョアで、父さんの会社もお世話になっているとのことで、父はどうしてもでなくてはならない。娘の母さんもまたしかり。
そんなこんなで飛行機でビュン、今頃は島根の無駄にでかい屋敷で一休みしている頃であろう。

それはともかく、モモちゃんの答えは僕の質問には対応していない。その旨を尋ねてみたら、小さく息をはかれた。
「やっぱり知らなかったんですね」
「え？なにが」
「いいです。続けます。パパの古い知人に不幸があったらしいんです。なんでも住んでたアパートが火災に見舞われたとか」
それはご愁傷様としかいいようがない。正直、その方と面識がない僕には無関係な話だ。
もぐもぐとチャーハンを咀嚼し嚥下してからモモちゃんは続けた。
「幸い怪我もなく助かったらしいんですが、家を無くしてしまったみたいでして、しばらくウチで預かることになったんですよ」
「……その人を？」
語り口からして猫や犬などのペットでは無さそうだ。なんだか嫌な予感がしてきた。
「いえ、家を見つけるまでの間、彼の娘さんを、です」
「娘ね……、なんだってまたウチなんだか」
心の中でため息をつく。非常に面倒くさいことになった。
「彼女の父親、つまりパパの親友は、会社の寮で条件にあった物件を探してるようですが、なかなか上手くいかないようです。寮は娘

さんまでは引き受けてくれないみたいで、仕方なくウチでしばらくの間、彼女を預かることになったんですよ。親戚が全員遠いところに住んでるそうなので」
「母親はなにしてんの？」
「いないそうです。結構前に亡くなったとか。大体兄さんも兄さんです。この話、三日間には決まってたのに、いつもどこかに出かけていないんですもん」
僕は放浪癖があるらしく、昨日の終業式はさすがに出たけどその2日前は、電車に乗ってぶらぶらしていた。
「でも昨日はいたじゃん」
「夜に兄さんに言付けしようと思ったら部屋にいなかったじゃないですか。昨日はどこに行ってたんですか？」
「うーん、なんだろ。多分散歩かな」
「そんなんだから補修をうけるはめになるんです」
「補修じゃなくて夏期講習！補修は期末が赤点だった人が受けさせられるやつだけど、夏期講習は有志を募って行うやつなんだよ。いっとくけど兄さん、期末は平均点以上とれてるからね」
「それでも出席日数でアウトです。強制参加だったら補修みたいなものですし。しっかりして下さい、兄さん」
「あ、心配してくれてんの？モモちゃん、やっさしー」
「白江家の面汚しになることだけは止めて、と言っているんです」
「それでも僕を思って注意してくれたのなら、それは素直な優しさだよね」
「……」
シカトされた。ガン無視でチャーハンを食べている。頬を赤らめてもいない、悲しい。
「そ、それはそうとさっきの話で疑問があるんだけど、」
「……」
三点リーダーばかりは寂しいので無理やりしゃべらせてみる。

「父さんと母さんが集まりで家に残れないのはわかるよ。家でその子を預かるのにね」
それほど大事な集まりなのだ。
「それでも、モモちゃんがウチに残る理由はないんじゃないかな。だって家には僕が残ってるんだし。なんだったらその子も一緒に島根に行ったらいい」
「そんなこともわからないんですか？」
心底呆れるようにモモちゃんはため息をついた。なんだか心外だ。
「連れて行ったりしたら、めまぐるし過ぎて落ち着けないですし、私が家に残った理由ですけど、簡単です」
フンと鼻をならし
「間違いがないようにです」
「は」
頭が一瞬空っぽになる。
「兄さんがムラムラしないようお目付役が私なんです」
なにそれ。僕ってそんなに信用ないのか。
自分に対する家族の評価が垣間見れた午後だった。

4来訪、再会、天変地異

肝心のチャーハンのお味についてだが、短時間で調理したにしてはなかなかいい味をしていると、僕自身は評価している。
水分もきっちり飛んでるし、野菜の噛みごたえもバッチリだ。ただ、モモちゃんこと妹、桃里はどうなのか、作り手として気になるところなので、
「おいしい？」
と感想を訊いてみた。
モモちゃんは微かに頷いた。ふっくらと柔らかいほっぺをチャーハンで膨らませているのは、マズくない証拠にはなりそうだけど、出来れば口を開いて感想を聞かせてほしかった。
どうやら黙りモードに入ったらしい。こうなるとモモちゃんの中に僕は存在しなくなり、空気中のキセノンレベルで薄い存在になってしまう。
ストレートにいうとシカト。妹思いの僕にその精神攻撃は効果大なのである。
彼女と会話することは喜びの一つなので、モモちゃんの口をなんとか開かせようと思案したけど、何も方法が浮かばなかった。
家で預かることになった女の子をダシにしようとも考えたが、もう訊くことがないことに気づいて断念する。他になにかあっただろうか。
カチャ。僕のそんな思いを断ち切るように空になった器とスプーンがぶつかり合う音がした。食べ終わったモモちゃんは小さく手を合わせ、空いた食器を流し台に持っていく。
パターンとして、そのまま自分の部屋に行ってしまうだろう。いつもは気にしないのだけど、いかんせん、今はウチに二人っきりだ。兄妹仲を深めるいいチャンスかもしれない。できればなんで僕を毛

嫌いするようになったのか、教えて欲しいところである。
と、いろいろ考えているうちにモモちゃんはリビングから出る扉に手をかけていた。
「ウィンナーもなかなかおいしかったです」
最後にそう言うとドアを閉めて出ていった。

残されてぽかんとする。久しぶりに笑顔が見れたと、嬉し涙が出そうになった。我が生涯に一辺の悔いなし、と崖っぷちで叫びたくなったが、もちろんそんな行動力を僕はもっていない。
さて、
僕も空になった器を流し台にもっていく。皿洗いはあとでまとめてやればいいから今は放置だ。
これから何をしようか。
当初の目的のお風呂に行こうかとも考えたが、妹とまったく思考回路が同じと見られるのも、なんとなく癪なので風呂はいつも通り夕方まで見送りにすることにした。
そうなると午後の予定ががら空きだ。夏休みの宿題に手をつけようとも思ったが、半分以上終わらせて余裕があるくらいなのでとりわけ焦るような問題ではない。強迫観念はあるけれど。
次に思い浮かべたのが散歩だった。しかし真夏の太陽の元気っぷりを考えれば、ベストな選択とは言えないだろう。行く手には炎天下がどっしり待ち受けているし、アスファルトに反射する太陽光は上と下とで容赦なく僕を照り焼きにするだろう。思い浮かべたら、外出する気もなくなってきた。僕が脆弱な精神をしているからではなく、殺人的太陽光を思ってのことだ。外に出るならば、近場を選択しなくては。
そうなると……、
一瞬花見川むくげの顔が浮かんだ。
すぐに首をふってイメージを飛ばす。彼女と会う予定はもうないのだから忘れてしまっていい人だ。第一、会おうにもどこに行けば

いいのかサッパリである。不法投棄場？山登りはもう御免だし、会える可能性は皆無だ。
「コンビニ行こう」
片手で握り拳を受けとめる古典的アクションを虚しく演じ、惰性が導き出した結論は、歩いて5分の市民の味方だった。

二階に上がり、『とうり』とピンクのネームプレートがかかったドアをノックする。返事はない。許可なくドアノブを捻るなんて野暮なことはしないけど、どうせ鍵がかかっていて僕の侵入を拒むだろう。
「コンビニ行ってくるけど何か買うものある？」
ドア越しにモモちゃんに語りかける。なにか必要なものがあったら同時に済ませてしまおうと思ったのだ。数秒の沈黙があって中から返事があった。
「……ピノ」
「ピノって、アイス？」
「はい」
「了解。それじゃ行ってきます」
すべきことを終えたので、階段に向かって歩きだす。
「あ、待って下さい」
すでに背後にあった扉が開いて中からモモちゃんが出てきた。呼び止められるなんて久しぶりである。ドアから少しだけ顔をだし僕を見つめている。
「なに？」
「あの、兄さん、ちょっと……」
なにか言いづらいことでもあるのだろうか。とりあえず、進んだ数歩分後ろに下がり、彼女の話やすい位置に移動した。
「少しここで待ってて下さい」
バタン。生ぬるい風圧に目を細める。中になにかを取りにいったらしい。

モモちゃんとこれだけ多く会話をするのは久しぶりな気がする。
前半、わけのわからない女の子にからまれてマイナス点だった今日の運勢は後半にきて怒濤の追い上げを見せているようだ。
「お待たせしました」
またすぐにドアが開いてモモちゃんが手になにかもって現れる。
「お金ならいいよ。アイスくらい奢ってあげる」
「違います」
財布でも取ってきたのだろうと思ったのだが違うらしい。
なにが、と口を開くのを遮り、彼女は手に持っていたものを無理やり僕の胸に押し当ててきた。ほぼ条件反射で受け取る。譲渡がすんだと判断すると、悪い目つきで僕に一瞥をくれドアをパタンと閉めた。
「玄関に落ちてました」
手に持っていたそれを、おそるおそる見てみる。
橘特選ＤＶＤだった。
その内の一本が、手の中にある。ドアを挟んだモモちゃんの声は深い泥の中で聞いているように妙に遠い。
あっれー、おかしいな。全部紙袋につめたと思ったのに落としたんだろうか。
「ち、違うよ、モモちゃん！このアダルトＤＶＤは橘の奴が、」
カチャ
返事はなく、代わりに鍵が閉まる音が虚しく響いた。
「……」
奇跡の追い上げを見せたさそり座の運勢はゴール間近で失速し、落とし穴のトラップにはまって死んだ。モモちゃんは、この先僕と口をきいてくれるのだろうか。望みは限りなく、薄い。
彼女の部屋のドアは文字通り固く閉ざされていた。教会のような静謐で荘厳な雰囲気を醸し出し、不浄な心を寄せ付けようとはしない。
どんなに誤解だと声高々に叫んだところで、疑わしい時点で罰と

いう厳格な意思で僕の言葉を跳ね返すだろう。
見えない空気のバリアと先ほど鼓膜を刺激した現実の鍵とが、僕と妹の間に深い溝を作り出した感じがする。子供部屋の薄い扉のはずなのに、隔てる壁はエアーズロックのように堂々聳え立っている。

沈みこんだ気持ちのまま、僕はとぼとぼと階段に向かって廊下を歩きだした。
いつか分かってもらえる日を、信じ足を動かすことにする。立ち止まってなんかいられない。足を止めれば涙が流れそうだから、ではない。

階下のすぐ先に玄関がある。階段を下りながらひとまず、捨て忘れてしまい残ったたった一枚のディスクをどうするか考えていた。
中途半端に残された物を処分するのは意外に面倒だ。一度に済ませられれば楽なのだが、もう一回同じ作業をしなくてはいけない。二度手間である。
そんな煩わしさを伴って僕の意識は深層へと沈殿していく。外の気温を考えれば、また山登りなど脳天気なことは言ってられないだろう。
あの辺りの丘陵地帯は、太陽により一層近いからか、余計に暑く感じられるのだ。イカロスの蝋で固めた翼もデロデロに溶けてしまうことだろう。
たった一枚のＤＶＤくらい残しておいても構わないのだが、妹だけでなく両親に見つかったらと考えたら、おちおちしていられない。隠し通すのが困難な現状、処分が最良の選択だろう。
「だけど、あそこに行くのは面倒なんだよなぁ」
しゃがみこんで靴に履き替える。意識しなかったが、僕のスニーカーは先ほどの登山の際についたのだろうか、泥が微量に付着していた。数グラム重くなった履き古しの靴は、それだけで僕の足を鉛にしそうだった。

ピンポーン
憂鬱から飛びかけた意識を引き戻すように、玄関チャイムの弾ける音が響きわたった。顔を上げ、すぐ目の前のチョコレート色のドアを見る。この先に誰かいるらしい。
郵便配達とか回覧板だろうか？新聞代はまだだろうから考えられるのはこの２つであり、まさか妖しげな宗教勧誘とかではあるまい。
催促するようにもう一度チャイムが押された。それに「はーい」と応え、立ち上がってドアノブに手をかける。
なぜドアスコープを覗かなかったのか。この時、躊躇という名の警戒をみせていれば、流されるような生き方をしなくてすんだかもしれないのに。
「どうもこんにちは」
玄関というのは出発を見守り、帰還を受けとめる神聖なる場所だ。人々が出入りする場所はそのまま幸せの通り道に直結すると僕は考えている。
そんな場所に、僕の不幸を象徴する人物がのっそり立っていた。
「花見川、」
むくげ。
変わった花の名を持つ少女。
二度と会うことはないと思っていたはずの彼女がそこにいた。
「よっ、トウちゃん久しぶり！さっきは、その、失礼しちゃったね……」
そこに居るのがさも当然のように身の丈あるほどのキャリーバッグを持って僕に気さくに笑いかけている。
「あ、それは別にかまわないけど、は、花見川、さん、なんで君が僕の家を知っているんだ？まさか尾行したのか？」
言葉を失いそうになるけど、ここで気落ちしてたら、僕の心は霧散してしまいそうなので必死になって言葉を紡ぐ。
「嫌だなぁ私にストーカー癖はないよ。ていうかっ」
びっ。彼女の指先が僕の鼻の頭ギリギリまでつけられる。

「私のことは下の名前――むくげ　で呼んでって言ってるでしょ」
初対面の女の子を下の名前で呼ぶなんて小人の僕には憚る大事だ。
「……そんなことより指が近いよ」
ふう、と息をついて腕を下ろし「そんなことより、じゃないよ」と前置きを置いてから彼女は続けた。
「むくげ、って知ってる？漢字ではキヘンに菫（すみれ）って書いて槿（むくげ）なの。読みにくいって平仮名で名付けられたけど、それがまた柔らかいイメージで気に入ってるんだ」
「そうなんだ。それより、」
「韓国じゃ国花になるくらいメジャーな花なんだって。白居易っていう有名な詩人が一日花として儚いイメージを植え付けたらしいよ」
白居易なら聞いたことがある。唐代の詩人で、案禄山の乱で知られる玄宗と楊貴妃のエピソードを七言古詩の長恨歌で詩にした人だ。連理の枝に比翼の鳥と、心に響く言葉が多くあるので印象に残っていた。
「日本では古くは朝顔って呼ばれる朝咲いて夜しぼむ白や紅紫色の花のことをさすの。万葉集かなにかに書かれてるよ。勿論今の『朝顔』とは別物だけどね。トウちゃんも見たことあると思うけど、朝顔より少し大きくて、」
「じゃなくて！」
マシンガントークの弾切れは期待できそうになかったので、たまらず怒鳴っていた。
「なんで、君がココにいるのさっ！」

セミの鳴き声を表すときしばしばジージーやミーンミーンが多用される。前者は油蝉、後者はミンミン蝉の鳴き声だ。
だけど、気のせいか、この時僕の耳には、ヒグラシのカナカナカナ…という切ないメロディーが響いていた。時期的にまだ早すぎてありえないけど、局地的天変地異なら僕の世界で確かに発生していたのだ。

「あれ？聞いてないの？」
キョトンとした表情を、すぐに緩ませて、彼女は破顔して続けた。
「今日から白江家のお世話になる、花見川むくげ　です。よろしくねっ！」

おいおい、まさか……
玄関も夏の熱気やられたのか、僕の思考は回らない。
今日から預かる女の子って、花見川……。

「それはそうと、トウちゃん。さっきから大切そうに胸に何抱いてるの？」
「あ」
僕は視線を落とし、それから静かに泳がせた
「不潔ー！」
その二文字が再び響くのにそう時間はかからなかった。

5自宅、失敗、言い逃れ

目眩が覚えるほど明るい笑顔で人を魅了するのが特技といった少女の瞳を例外的に曇らせることができるのが、僕という存在なのだと錯覚をおこすように、彼女は近所中に響きわたる大声で不名誉たる称号を僕に与えていた。

悲鳴ともとれる嘆きに引き寄せられた桃里が二階からせわしく下ってきて、

「今の声はなんですか、兄さ……」玄関に佇む彼女の姿を視認した。

妹の状況適応能力の高さはさておき、この僕と花見川の不可解の邂逅シーンだけで彼女はすべてを理解したらしい。僕が導き出すのに数分はかかった答えをいとも容易く呟いてみせた。

「ひょっとして……今日からウチに泊まる花見川さん、ですか？」

階段の中ほどでモモちゃんは尋ねた。自己紹介は不要らしい、するまでもなく花見川むくげについての詳細を知っているようだ。

僕と違い、モモちゃんは家なき子になってしまった女の子については十分理解しているのだ。

一方花見川はというと、いきなり奥から現れた妹に、のけぞらせるように僕に向けていた体を、別段慌てた様子なく、きっちりと背筋をのばしてから、見事なほどの挨拶をしてみせた。切り替えの速さは尊敬に値する。

「はい、今日からお世話になる花見川むくげです。不躾な頼みをきいてくださって有難うございます。不束者ですがしばらくお世話になります！至らぬところが多々あるとはは思いますが、何卒よろしくお願いします！」

気味が悪いくらいきっちりとした挨拶。なんで妹のモモちゃんに対してはこんな丁寧すぎるくらいにへりくだってるのだろう。その

微妙な差別に首を捻る。
「あ、そんなに固くならなくて大丈夫です。敬語じゃなくて、タ、タメ語でも全然」
普段から敬語のモモちゃんが言うようなことじゃない、家族では僕限定だけど。
「本当？平気？結構馴れ馴れしくなっちゃうかも、だけど……」
「あ、え、えぇ。気にしないでください。好きなようにしてもらって」
許可とった途端、砕けた喋り方になる花見川に脱帽だ。モモちゃんもいきなりの変貌に戸惑っているようである。
「ありがとう！！敬語意識して使わないと直ぐに崩れちゃうから、そう言ってもらえるとすごい助かるよ！お世話になりっぱなしだね」
「困った時はお互い様です。それよりむくげさん、こんなところで立ち話も何ですから、とりあえず家に上がりませんか？」
「お言葉に甘えさせてもらおうかな……。いろんなとこを渡り歩いてもうクタクタなんだ」
花見川は日光浴を始めたトカゲのように緩慢な動きで我が家の敷居をまたぐと、そのドデカい荷物を足ふきマットの横にそっとおいた。
「荷物はとりあえずそこに置いといて下さい。後で部屋に案内します。それじゃリビングで一息つきましょうか」
花見川はモモちゃんの言葉に感謝するようにぺこりと頭をさげてから靴を脱ぎ、家にあがる。その様子を僕はただ眺めているだけだった。
「あ、リビングに行く前に自己紹介しておきます。私の名前は白江（しらえ）桃里（とうり）。そちらが兄の藤吾（とうご）」
「あ、お世話になります！」
深々とむくげは頭をさげた。モモちゃんだけに。
「あと、父と母がいるんですが、大事な用事が入ってしまって、二人とも実家に帰っているので家にはこれから私三人だけで暮らすこ

とになります。すみませんこんな時に」
「急に無理言って、迷惑かけたのはこっちだから、謝るのは私がすべきこと、だよ」
「いえ、気になさらないでください。と、とにかく私がいいたいのは母さんのように家事が出来るわけじゃないので仕事を三人で分担しましょう。って、ことなんです。こんな時になんなんですが」
「おっけー。まかせてちょうだい。こう見えても私家事全般できるんだー」
「ふふっ、頼もしいです」
モモちゃんは僕にはめっきり見せることがなくなった笑顔を優しく振りまいて花見川に目を細めた。
花見川も楽しそうに微笑むと、リビングに向かって歩きだした妹に続いて足を動かしだす。
玄関とリビングとではすぐの位置にあるのだ。
リビングに入るドアに手をかけたところでモモちゃんはピタリと動きを止めた。
「なにをボーとしてるんです？兄さん」
「え？僕？」
二人に取り残されるように僕は未だに玄関の出入り口付近で立ちすくしているだけだ。時代の波に取り残された異物のようにただ一人ポツンと突っ立っているだけである。靴をしっかり履いていつでも外に出れるような格好だが。
「兄さん以外に誰がいるんですか？はやく来て下さい。むくげさんに家の勝手を教えないと」
「これからコンビニにピノ買いにいかないといけないしさ。モモちゃんにまかせるよ」
「買い物なんて後でもできます。どうしたんですか？いつもなら不気味に行動を移すあなたがそんな鈍重なことというなんて。……さては、それ」
僕の手に持つＤＶＤをまるで穢らわしい物をみるかのような視線

で射抜いた。まあ実際そうなのだけど。
「捨てに行こうとしてるんですか？」
ご明察である。
一枚くらいなら、ゴミ捨て場に放置できるかなと考えていたのだ。
「やめて下さい。仮にも白江家のあなたがそんなことするとこを他人に見られたら、世間体ってものがですね。それに今日は燃えるゴミの日です」
「いやだなモモちゃん。そんな面倒なことするわけないだろ。こいつの持ち主である橘の家のポストにでも返却しようとしてるだけだよ」
「……なんだかそれも問題があるような気がします」
とっさに口から出たごまかしは思った以上に功を奏したらしい。モモちゃんを釈然としないが一応納得させることはできた。それに誤解をとけたようだし、万々歳である。
そんな僕の杓子定規な計画を崩すのは、家族というコミュニティー外のイレギュラーであった。
「え。アダルトの山じゃなくて友達の家に戻すの？」
「ばっ、」
ばかやろう！口から出そうになった言葉をなんとか飲みこむ。
そんな僕の思いを知ってか知らずか、きょとんと花見川は腕に出来た虫ささされを平然と掻いている。
「アダルトの、山？」
モモちゃんは思った以上に花見川の発言が気にかかっているらしい。片眉をあげて、機械音声のような不自然なイントネーションで尋ねていた。
「うん。トウちゃんがさ、紙袋いっぱいのHビデオをそこに置きに言ってるのを、見たんだ。あー、もしかしてアレ全部トウちゃんのコレクションだったりして」
「断じて違う！僕にそんなリスみたいな習性はない！なんでそう君は誤解を招くような言い回しをするんだ……」

「え？でも小屋にアレを捨てに行ってたんだよね？」
それはそうだけど、なんだかなにもかもが予想外の方に行きすぎているような気がする。
「兄さんどういうことです？」
モモちゃんの目つきは気温とは相反して、鋭く冷たい。
どういうことと言われても、なんて返せばいいのか僕にはさっぱりだ。何を言っても言葉が続かずしどろもどろになるのが目に見えているので口を閉ざすしかないだろう。嵐が過ぎるのに時間かかるけど、沈黙の中で光ある答えが浮かぶまで待機だ。
「なぜ口を噤むんです？」
沈黙について格好いい言い回しをしてみても、現実世界じゃなにも言わずに、無口になっているだけである。
さあ、どうしようか。
誰かいい言い訳を僕に与えてくれ。
「どこで買ってきたんだか不思議だね。なんにせよトウちゃん、エロスはほどほどになー」

花見川はさらに混迷を極める一言を吐き出した。
頭が痛くなる。ちらり横目で確認するとモモちゃんは眉間にシワを寄せて、不快感を露わにしていた。
「最初から最後まで誤解があるようだから言うけど、まず僕がこういう、」
「あの、ちょっと」
泥沼の現実を脱出しようと紡ぎ出した言葉を遮るようにモモちゃんは語尾を強めて、僕を睥睨した。
「喋らないでください。もう、沢山です」
「……」
「さ、むくげさん。遠慮なくあがってください。自分家のようにくつろいでもらってけっこうです」
リビングの扉を開けて、モモちゃんは花見川の方を向きそう言っ

た。完璧に僕の事をスルーすることにしたらしい。
呼ばれた花見川は視線を僕とモモちゃんとで往復させどうすればよいかと戸惑っているようだ。
事態を悪化させた元凶のくせにいけしゃあしゃあとされるのもムカつくが、中途半端に気遣いされるのもまた困りものである。
「なにしてるんです？早く中にはいりましょう。今クーラー入れます」
モモちゃんはオロオロしている彼女に笑いかけ、再度言葉をかけた。
その言葉がスイッチになったのか、小動物めいた花見川むくげは戸惑いながらもリビングに足を運ばせはじめた。
僕はただ石像のようにぽつねんとしているだけである。

最後のチャンス。
そんな言葉が浮かんだ。
今を逃したら、この先一生、妹（と花見川）の誤解をとく機会はないだろう。
ここだ。この時だけだ。

「ちぇぇいぃぃぃ！！」
雄叫びをあげた。二人の注意をひくようになるたけ大きな声で。
注目を集める目論見は成功し、二人の少女は驚愕で目を円くしている。その様子を一瞬だけ観察し、僕は瞳を閉じた。視線を合わせていると恥ずかしさで悶死しそうだからだ。血液が体を駆け巡る、真夏の熱気を体内に取り込み
「す、とぉぉぉッッ！」
気合い一発、これ以上ないってくらい強烈な膝蹴りを手に持ったＤＶＤに浴びせた。右手左手と橋渡しするように支えられたパッケージの中心に、渾身の一打を叩きこむ。
割れることはなかったが、割ろうとする意志、は伝わっただろう。

不自然に凹んだあられもないパッケージの女性が、僕の意志を伝えてくれるはずである。
「しゅぅー」
僕の目的は、こんな物興味なんかないよ、と二人の目の前でＤＶＤを破壊せしめた後で懇々と真実を伝えることである。
壊すまで至らなかったが上々だろう。
「だから、一回僕の話を落ちついて聞いてく、」
顔をあげる。
一息ついた僕の視線の先には閉じられたリビングの扉があるだけで、モモちゃんとむくげはいなかった。
「……」
正真正銘、一人きりだった。
どうやら二人はすでにリビングに移動してしまった後らしい。なにこの放置プレイ。熱で頭がイカレたとでも見られたのだろうか。なんにせよ虚しすぎる。
僕はため息を一回だけつくと、目頭を軽く押さえた。落ち着くべくは、この僕だ。
さそり座の運勢は最悪なのだから今更気にするもんではないさ、ともう一人の僕がポンと肩に手をやった。

6時事、夕餉、夏の夜

夕飯の支度は僕がすることになった。こうは見えても料理は結構得意なのだ。放浪癖がついたのも、もしかしたら郷土料理を楽しみたいからなのかもしれない。

買い物は先ほど済ませたので材料に困ることはない。費用に関しても、子供三人が1ヶ月は優に暮らせる金額が封筒に入れられ冷蔵庫にカエルのマグネットで止められていたので、余裕はある。『生活費その他もろもろ』とだけかかれていたので使い方は自由であろう。

そう、年長者として今この家の財政は僕が握っているのだ。妹は料理の腕はからっきしだし、居候の花見川にやらせるわけにはいかない。

ふっふっふ、つまり食事をとる為には、僕に頼らなくてはいけないのだ。どんなに可愛げがなくてもお腹が栄養を欲する限り、僕に従うしかない。母さんもあちこちうろちょろする僕を『頼りがいのない兄さんねぇ』と冗談めかして評価していたけどなんだかんだで長男ということは認めてくれているのだ。

さあ、腕によりをかけて、クッキングといこう。

グツグツと気泡が上がり初めた熱湯風呂にキャベツの葉を投入し茹ではじめる。その間に挽き肉にみじん切りしたタマネギ、卵、小麦粉、塩胡椒を加えてよく混ぜ合わせ、茹で上がったキャベツの葉でそれをくるみ、コンソメの素をいれ煮込みはじめる。トマトスープ風味にしようか迷ったけどシンプルにいくことにした。後は片栗粉やらでとろみをつけて、ロールキャベツが完成だ。三つ葉なんかを浮かべたら見映えも良いってもの。

ご飯も炊いておいたし、前日母さんが作り置きしておいてくれた

ものがあるので、とりあえずはこんなところだろう。
食卓が整ったので二階に向かって、「ごはんできたよー」と大きく声をかけた。
ややあって二人が降りてくる。僕が買い物に行っている間にすっかり打ち解けたらしい花見川とモモちゃんの二人は、自分たちの部屋でテレビゲームに興じていたのだ。
降りてきた花見川の格好が変わっていた。僕と不法投棄場で初めて会った時も含め先ほどまではレース柄のワンピースだったのに今は水玉模様のパジャマ姿に変身していた。何回かモモちゃんがそれを着ているのを見たことがあるので、借りたのだろう。
気のせいか髪が湿っているし、どことなく頬も紅潮している。料理してる間にでもお風呂に入ったのだろうか。僕も食べ終わったら行くことにしよう。それはそうと外に出ずっぱだった花見川はともかく、不思議なのは家に引きこもっていた挙げ句、昼間湯船に浸かっていたモモちゃんまでもが、花見川と同じ状況なことだ。こちらはピンクの花柄パジャマだが、1日二回のお風呂とは贅沢な身分である。
「わー、おいしそうだねぇ」
「そう言って貰えると作ったかいがあったってもんだ」
花見川の実直な感想に鼻を高くする。料理を作る上で一番大切なのは、絶対美味いという自負心と、向上心、ついで美味しくなぁれという気持ち。白く優しげな湯気を上げるロールキャベツとみずみずしく光る白米、愛情料理に花見川に加えさしものモモちゃんも感服といったところか。
先の一件以降、僕の事を路傍の石のように扱っていたモモちゃんも、これらがそろえば好感度を取り戻すことも容易だろう。
「いただきます」
三人で食卓について、早速箸を動かす。うん、文句のつけようのない味だ。
「おいしい〜」

「たしかに」
花見川は頬を綻ばせ、モモちゃんはいつものクールフェイスで感想を述べてくれた。
料理とはいいものだ。昼間のチャーハンしかり人の心を和ませる力を持っている。どんなに種族が離れていようと食の楽しみには変わりはないのだ。そう考えると、料理人でもない僕にも、何かしらの力が満ち溢れる気がする。
今日の夕餉、ロールキャベツはこれまでにないってくらいいい味を出しているし、ご飯の炊き上がりも最高だ。僕らの胃を満足させる要素はバッチリそろっている。
ただ、一つ問題があるとすれば、
「……」
肝心の食卓に、場を盛り上げる会話が存在しないことだろうか。会話が最上の調味料とは誰がいった言葉か、とにもかくにも全体的にそれが足りなかった。初め「おいしい」という至高の誉め言葉を与えてくれた二人は今は黙々と胃に栄養を与えているだけである。普段喧しい花見川は、食事中は静かにするように躾られてきたのだろうか。
「テレビつけるよ」
許可を待たずして行動に移す。
沈黙を気にするような甲斐性はないけれど、咀嚼音だけのこの状況が妙に寂しかったので、誤魔化すようにリモコンのスイッチを押し、テレビの電源をオンにした。黒い画面がすぐに色彩豊かな番組を映し出す。４０インチの薄型テレビに表示されるのは夕方のニュースだった。
番組は犬猫の殺処分について特集を組んで長々やっているようだった。僕以外の二人は食事を続けながら画面にも目をやっているようなので、食事中にテレビを付けるというグレーなマナーを許容しているようでよかった。
罪のない命が年間４０万、殺処分されているんですっ！と悲壮感

に満ちた表情で若い女性アナウンサーがトピックをしめたところでＣＭに入った。
ＣＭ中も黙々と三人食事を続ける。画面は今話題のブランドムックの広告を知らせていた。
「酷い話ですね」
モモちゃんがぽつりと呟いた。
「ペットブームの無責任な産めや増やせな考えがすべての元凶なんです。純潔種にしろ雑種しろ、産まれてきたからには平等に命が与えられるべきなんです」
「私は血統書付きを買う飼い主より、無闇に繁殖させるブリーダーにも問題があると思うよ。悪徳を検挙出来ない警察にもね」
花見川もモモちゃんに概ね賛成のようだった。僕ももちろんガス室送りになる動物たちのことを思うと沈鬱な気持ちになってくるが、ペットブームを散々盛り上げたメディアの手の平返しの状況がなんだか釈だった。このテレビ局だって別の時間になれば人気のペットランキングとか無遠慮な企画を行ったりしてるのだ。実に下らない。
ＣＭが明けた。画面はまた別のＶＴＲを放映している。
どこにでもあるような閑静な住宅街が広がっていた。そこをメガネをかけた男性記者がゆっくりと歩きながら、何が起こったかを説明している。
悠長に聞くのも面倒くさいので画面右上に表示された文字を読んでみた。
『連続殺人　３人目の被害者』

洒落にならない凄惨な文が目に飛び込んできた。
「連続、殺人？」
小説の中ではよく扱われるテーマだが現実世界で目にすることはあまりない珍しいワードである。そんな悲惨な事が平和な世界に訪れていたとは知らなかった。
ぽかんとする僕に、モモちゃんがチラリと目をやってからため息

をついた。
「兄さん、もしかしてこの事件知らないんですか？」
「うん。最近バタバタと慌ただしかったからね。夏休み前は旅行とかしてたし」
「呆れた。１ヶ月前くらいから話題になってましたよ。ほら、」
モモちゃんは言葉を区切って僕にテレビを見るように促した。
画面には第一の被害者という表記と男性、６月２１日という先月の日付と聞き覚えのない地名が上げられていた。
「最初の遺体が発見されたのが６月２１日。遺体の状況から死後そこまでたっていないそうです。鋭利な刃物による刺殺、即死だそうです。この時兄さん何してました？」
「時期から考えて、旅行はしてないし何でだろう。このニュースそんなに話題になってた？」
「どうでしょう。マスコミが本格的に騒ぎだしたのは次くらいですから」
「連鎖性でもあったの？」
共通点に死体には必ず赤いバラが添えられてたとかそういうミステリー小説にありがちな展開が。
「いえ、ただ被害者男性二人ともが一突きで抵抗した様子もなく死に至っており、地域も関東のみだとしたら同一犯としてみるのが一般的なのではないでしょうか」
「ふぅん。……3人目の被害者は？」
「それは、ニュースを見てください」
モモちゃんはそう言って、喉が渇いたのかコップに口をつけ中の麦茶を飲み干した。
言われた通り視線をテレビにやる。画面は今までの復習を終えたのか、新たな殺人についてのニュースを報じていた。
『一昨日朝、市民の憩いの場となるこの公園で、彼の遺体は発見されました。被害者は４１歳の男性で、死因は刺傷とみられます。茂みに隠れるように遺棄されていた遺体を見つけたのは、近所に住む

男性で犬の散歩中発見したそうです』
画面が切り替わり第一発見者の男性のインタビューが入る。彼は終始落ち着いた様子で淡々と発見当初の詳細は語っていった。
それが終わるとすぐにまた発見現場の公園が映し出される。
『男性は発見される2日前には死亡していたとみられ、警察は地域で起こっている通り魔殺人との関連性を視野に調査を進めていく方針であります』
スタジオに返されコメンテーターが適当に警察批判を終えたところで、番組のメニューはスポーツニュースに切り替わった。テレビではメジャーリーグでの日本人選手の活躍を語りだし、オマケのようにプロ野球の詳細を告げている。
「通り魔だなんて物騒な世の中になったもんだね」
「金品に手をつけていない事が逆に恐怖です。純粋な狂気しかないということですから」
「案外怨恨とかかもよ。もしくはただの偶然とか」
「そうですね」
ほどけたキャベツを物干し竿にかかった洗濯物のようにしながらモモちゃんは眺めている。中のお肉はすでに平らげたようだ。
「3人も亡くなってるだなんて人ってのは案外簡単に亡くなるもんなんだなぁ」
「まさか犯人は兄さんじゃないですよね？」
「んぐっ」
突然の決めつけに口腔内部で小爆発が起こり、鼻からご飯粒がでそうになる。
モモちゃんは「ごほごほっ」と咳をする僕に気遣いの言葉なく、ほうとうを食べるようにキャベツをすすった。
「と、突然、なにを言い出すんだ、モモちゃん。どんな根拠で白江家の血筋に殺人者を生み出そうとしてるのさ」
「別に。ただ兄さんはフラフラとして家に寄り付かないのでどんな疚しいことしてるのかと思っただけです」

「だからただの旅行だって。僕に疚しいことなんてこれっぽっちもありゃしないよ」
器にやっていた視線を一瞬だけ僕によこし、苛立ちを隠そうともせずぶっきらぼうにモモちゃんは呟いた。
「それは良かったですね。あなたの世界は全く平和です」
「……」
モモちゃんが言いたいことがなんとなくわかった。おそらく昼間のＤＶＤについて言っているのだろう。誰か彼女の一部分の記憶を削除させる魔法を唱えてくれ。
「あ、は、花見川、箸が進んでないようだけど、どうしたの？何かマズいものでもあった？」
冷たく細いモモちゃんの視線から逃れるために、箸をもったままぼんやりしている花見川に話かけた。
急に話かけられて驚いたらしい花見川は、びくりと肩を震わせ、
「な、なんでもないよ。ただ、ちょっとお腹いっぱいになっちゃただけ。ご、ごめんトウちゃんごちそうさま」
「あ、そう。食器は置いといていいよ。後片付けは僕がしとくから」
さっきまで「おいしい、おいしい」とコンベアのように進んでいた箸が動きを止めていたから、よっぽど彼女は少食なのだろう。おそらくたぶんきっと不味いものが入っていたわけじゃないはずだ。
「ありがとう。それじゃ荷ほどきしなきゃいけないから部屋に戻ってるね。ロールキャベツ美味しかったよ。ごちそうさま」
食事を締める挨拶をまた言ってから彼女は食卓を立ち、二階にあてられた部屋にむかっていった。

7未来、夢幻、ラプソディ

食卓を片付けた後、少し遅めの入浴を済ませ、フリータイムになった僕は机に向かって、夏休みの宿題を終わらせていた。
ワーク最後のページまで一気にペンを走らせ、目先の障害を無事一つとりのぞいた僕は浅く息をつき、ゆったりとした気持ちで次の作業に移ることにした。
夏期講習で使うテキストの予習を開始した時だ。
ベッドの上に放り出されたままの携帯電話が聞き慣れぬ着信メロディを奏で、何者からのメッセージの到着を知らせた。
流れる曲は確かラプソディ・イン・ブルー。携帯に最初から入っていた音楽で、ＳＭＳ着信時流れるように設定していた曲、それが初めて作動したのだ。
普段のやり取りはもっぱらＥメールなので、ＳＭＳでの受信などしたことがなかった。いずれにしても重要なのは誰からの着信か、という点である。
椅子から腰を浮かし、ベッドの上でピカピカ光っている通信ツールに手を伸ばす。メッセージを確認したらすぐテキストに戻ろう。明日の予習だけだからそんなに時間かからないはずだ。

こんこん。擬音としてはありがちの、そんな音が僕の部屋に転がった。ノックの音に伸ばしかけた手を戻し、視線を部屋のドアにやる。
「どうぞ」
「お邪魔するね」
ドアを控えめに開けて中に入ってきたのは居候一日目の少女であった。
「どうしたの？」

「あっ、えっと、ね」
花見川は妙な戸惑いを見せた後、意を決したように言葉を紡ぎ出した。ノックもどことなく控えめだったし何か予期せぬ事でもあったのだろうか。
「トウちゃんに聞いてほしい話があって。ほら、昼間に私、あなたに助けを求めたでしょ。その事について言っとかないといけないことがあるの」
「あーはい。あれね」
言って「座れば」と先ほどまで自分が腰を下ろしていた学習机の前にある椅子を指差した。恥ずかしそうに頭をポリポリ掻いていた花見川は「ありがと」とお礼を告げ、ちょこんと腰かけた。彼女に向かい合うように、僕はベッドに全体重を預けた。
「家が火事になったからお世話になりますって意味だったんだね。それならそうと言ってくれればよかったのに」
「違うの。えっと、それも、その、そうなんだけど、」
「そういえばよく僕が花見川がお世話になる白江家の人間だってわかったね」
「そう、そこ！重要なのはそこなんだよ！トウちゃん！」
「……どこ？」
ふと口をついた疑問にテンション高めに花見川は食いついた。
「私がなんでトウちゃん家にお世話になるか分かっていたかと、言うとね。……信じてもらえないかもしれないんだけど、」
「なにがどうした知らないけど緊張する必要はないよ。昼間言ったように話だけなら聞くから」
「あ、ありがとう。うん、」
覚悟を決めたように、彼女は小さく息を飲んだ。大した話でないだろうと、決めつけていた僕は、予想だにしていなかった続きの言葉に衝撃を受けることになる。
「私には、予知能力があるの」

「は？」
その時まで、ドミノがカタカタと進むよう良い感じに続いていた僕の集中力は、ストッパーをかけられたかのようにブツリと途切れ、一瞬意識のヒューズがとんだ。何度か彼女の発言を頭の中で繰り返してみたけれど、頭蓋骨内でこだまする度にそれは『ぽかん』という間抜けな擬音に変わっていった。ブラックアウトしかけた意識で片眉をあげ、理解不能な言葉を吐き出した花見川の意思を読みとろうと、彼女を見つめてみる。
部屋の電灯の明かりをその茶色がかった虹彩に宿し、白磁器のような肌の上には汗をうっすら浮かべ、何かに耐えるように待っていた。なにを？それは、…僕の言葉だろう。

「あっ、えっと、予知？未来がわかる、あの」
「うん。単純に言えばそう」
「アニメとか漫画とか、超能力、の？」
花見川は無言でこくりと首を縦にふった。
なんて言えばいいんだ？夏の暑さに頭がやられたか、と気遣うフリして皮肉を言うのは簡単だけど、果たしてそれでいいのだろうか。
「……やっぱ、信じられないか」
花見川は、栗毛の髪を耳にかけてから、しょんぼりと呟いた。切なさが滲み出すようなその仕草に、どうしていいか反応に困る。
「ごめん。忘れて。何でもないよ、私だけでどうにかするから」
そのまま音もなく立ち上がった花見川は出口に向かおうと足を動かしはじめた。
「待ちなよ」
気がついたら消えかけた彼女の背中に、トーンを一段階あげて言葉を投げかけていた。
『あなたなら出来るはずだから』昼間の彼女の言葉が蘇える。
「え」

呼びかけるように言ったその一言に、振り向いた彼女の表情は春の陽気のように希望に溢れていた。もう一度椅子に座るように促してから僕は言葉を続ける。
「話を最後まで聞かせてよ。信じる信じないはその後の段階だろ」
オッケイオッケイ。いくら非現実の特集能力が僕の心の玄関扉を叩こうと、そこから先そいつを採用するか決定を下すのは最終的には僕の意思だ。同様に目の前の花見川が夢追い人の思春期少女だろうと、それは彼女だけの問題で口出しする権限はない。ただ、バラエティー番組のいやに緊急来日したがるサイキッカーより、目の前の花見川むくげという少女は信用に足る人物だと僕は判断している。
「ただ、一つ。君のそれは信憑性を高める必要がある」
ぴっ、手の平を彼女に向け、待ったをかける。喜びの色が一瞬陰った。
「汎用性がどれくらいか知らないけど、予知ができるなら、簡単に提示できると思う。未来を示せばいいだけだからね」
「証拠を見せてほしい、ってわけだね。それで私は何をすればいいかな」
少し勝ち気な口調で、静かに瞳を細めて彼女は僕に尋ねた。　何をすべきか予知をしてみろ、と挑発的な発言が刹那脳裏を掠めたが大人げないので自重することにした。
ＥＳＰカードでもあれば話は早いのだろうが、あいにく地球防衛軍でもない一般人の僕はそんなもの持っていないので、ふと思いついたお手軽ゲームを提案してみる。
「これから紙を渡すから、その紙に僕の次の発言を書いて事前に予知してみてよ」
いつかテレビでマジシャンがやっていたネタみせをアレンジした超能力テストだ。タネも仕掛けも存在しないこの状況で、それを成功させたなら、手放しで僕は彼女を信用するだろう。
「どうかな？予知というよりは透視に近いけど、未来を視るって点では、これでいけると思うんだけど」

思いつきにしては上手い方法だと自画自賛したくなったのだが、
「最初に言っておくと、私のは予知夢なんだよ」
そう上手くはいかないみたいだ。
「……つまり、寝てる時だけに視えるって、こと？」
「うん。私が望んだ未来のビジョンの、なんて言えばいいのかな」
「ぼんやりとした未来が視えるってわけで、くっきりとそれを伺うことは出来ないのか」
都合がいい能力である。花見川を疑うわけじゃないけどなんだか理由を付けて誤魔化そうとしているみたいだ。
「あ、そういうのは大丈夫。寝る前に何が見たいとか強く念じれば、見えるようになるの。例えば、『どうしたらトウちゃんは私の言うことを信じてくれるか』とか」
「予知っていうより夢のお告げに近いものがあるね。それ」
心の中だけで僕は頭をおさえた。
「そう！一番しっくり来る言葉がそれだね！夢のお告げ、まさにその通り。的中率１００％の占いなんだ」
「ふーん。予知ちゃあ予知だけど、自分が望んだ答えが得られるならそっちな方が都合がいいかもなぁ」
あくまで彼女の言葉をまるっきり全部信じるのであれば、である。
「そうは言っても制約はあるんだけどね」
そう言ってから彼女は自分の持つ、夢のお告げ能力の説明をしてくれた。

１．夜寝る前に『何が知りたいか』を強く念じる。
「コックリさんにする質問みたいね」
「オカルトだな」
なんにせよ人外の力は不気味ではある。不可思議な能力を信用するのはある種の危険を孕んでいるように思える。
２．そのまま眠りにつくと、夢の中でぼんやり“ノート”が浮かんでいるのが見えてくる。

「ノート？」
「うん。キャンパスノートって感じかな。そこに文字が書いてあるの」
神秘的な能力が、現実の要素を伴って、摩訶不思議を演出しだした。シーンが見えるのでなく、文字媒体で、ということだろうか。
3．夢の中に出現したノートには寝る前にした質問の答えが“漠然”と書いてある。
「ってどういう意味さ？」
「そうだなぁ。本筋の直球ど真ん中、のみって感じ。キーワードしか書かれてないわけ。例えばジャンケンの予知なら、結果だけで過程が書かれてないの。綴られるのは試合の勝者だけ。」
「宝くじなら当選番号だけが視えるわけか。それだけでも随分助かるけどなあ」
「やったことはないけど多分そうなるだろうね」
4．夢の中での“お告げ”は覚醒時でも記憶している。
言い終わってから花見川は疲れたように息をついた。
「浅い眠りのレム睡眠時に夢を視るわけだけど、通常覚えている夢は最後に見たもののみとされるよね。そのノートを見てる時、はっきりとこれは夢だ、って自覚はあるの？」
ルールを聞き終わった僕の口は自然に動きはじめていた。
「あるよ。ハッキリと質問の答えだって自覚してるもん。意識を持ってなくちゃ記憶できないじゃん」
「その状況を明晰夢っていうらしいけど、そういう状態なら自分で夢をコントロールできるらしいんだ。つまり未来予知ってのは捏造の空想でそう思いこんでるだけなんじゃないの？」
言ってから、しまった、と思った。話は最後まで聞くと言ったのに、これでは非科学を言及する頭でっかちの研究者みたいになってしまっている。
僕の指摘に花見川はショボンと肩を落としてポツリと呟いた。
「それじゃ証拠みせるよ」

態度とは裏腹な強気な発言の意図がつかめない。
「証拠？さっき言ったようにそれは寝ないと出来ないんじゃ、」
「昨日の夜、質問してから寝たの。内容は『どうすれば信用してもらえるか』。ピンポイントで内容は知る事はできないけど、これで合ってると思う」
器用なマネは出来ないと言っていたのに、果たしてどんな答えが提示されたのか気にはなる。その為に必要なのは彼女から証拠を受け取ることだ。
とにもかくにも彼女は昨日のうちに今日の今この時を予知していたというのだ、非常に興味深い話である。
「方法はどうする？」
「さっきトウちゃんが言ってたので」

花見川が『予知』を紙に書き、僕がその通りの行動をとれば、花見川の力は本物ということになる。　もしハズレたら花見川は嘘つきだ。
「――という訳でいいのか？」
「それでいいよ」
花見川は机の上に転がっていたペンで、僕から受け取った紙の切れ端に『予知』を書き始めた。迷いなど一切見られない。さて、僕は次になんて言おうか。
彼女の能力の裏付けとなることだ、できれば予想がつかないようなのがいい。彼女が行動を起こしている間、もう一本のペンを持ち余った切れ端の部分に文字を書き付けた。
「出来たよ」
そうもしないうちに花見川が声を上げて予知を書いた紙を見えないよう机に伏せた。
「早かったね。それじゃ僕の発言だけど、」
待っている間に書いた文字を見えないように彼女に示した。
「この紙に僕がなんて書いたか当ててもらう」

僕がそう言うのを待ってたかのように花見川は『予知』が書かれた紙を、僕に見せてきた。まさか、これすらも予知されて…

『君が好き』

とんだ的ハズレだった。ほら吹き、か。仕方ないが、そういうルールだ。

「残念」

下でお茶でも飲もうと立ち上がった時だった。

「最近のマジシャンは最初わざと間違えて、場を盛り上げるんだって。それはそうと、トウちゃん、」

花見川がベッドの上の携帯を指差し、

「携帯光ってるよ」

その指摘に、小首を傾げながら、携帯を開く、そこには『０８０…』と見知らぬ番号からの着信と、

『僕は年上より年下が好きだ』

紙に書いた文が、画面に表示されていた。

8夕日、赤口、シルエット

携帯画面に表示される間抜けな文は、ズバリ言い当てられるまで、昼間の騒ぎを逆手に取った良い一文だと思っていた。

ＳＭＳ、携帯電話同士で数十文字の短い文字メッセージを送受信できるショートメッセージサービスのことで、ドコモの「ショートメール」、ａｕの「Ｃメール」がこれにあたる。通信端末によって方式が異なるため同一業者間でしか利用できないのが難点だが、電話番号さえわかれば、要件を文にして伝えられるので便利ではある。残念ながら相互通信性の高いメールシステムの普及とともにほとんど利用されなくなってきているが。

そんな始めての送信者を睨みつけながら、僕は訊いた。

「なんで分かった？」

見事に力を示され、絶対的に有利だった立場が覆されたのだ。いやが上にも警戒心が高まってくる。半分遊びのような心構えだったのだが、そうもいかなくなってきた。彼女が紛う事ない本物だと証明されたのだから。

「さっき説明したでしょ。私には夢のお告げがあって――」

「僕が言いたいのはそうじゃない。さっきの話を聞く限り君のその特殊能力は、明確なシーンを描くのではなく、ノートに書かれた文字なんだろ？それじゃ、そのノートにはなんて書かれてたんだ」

そういうことか、と花見川はイタズラげに微笑むと、教師のように人差し指をピッとたてた。

「昨日の夜、私がした質問は『どうしたら救世主は私を信用してくれるか』で、その答えがさっきの文。それだけしか書かれてなかったんだけどね。意味がわからなくて桃里ちゃんからあなたの携帯番号に教えてもらってそのままの文章を送らせてもらったんだけど、どうやら当たってたみたいだね」

未だに伏せておいてあった僕の紙を表にし、正解を確かめてから、満足いったようにニコリと笑った。
僕の行動が完璧に予知されていたのは微妙に悔しいが約束は約束なのでもう花見川を疑わない。それより気になるのは今の発言だ。
「救世主？それってもしかして僕のこと？」
「うん！トウちゃんが私の救世主！どう、いいでしょー」
なにがやねん。関西圏でもないのに思わずそう言いそうになってしまった。僕が彼女を救う、という事だろうか。
問題を先送りするように僕は別の質問をすることにした。
「……それはそうとノートって微妙に不便だね。お告げなら声が聞こえた、とかの方が分かりやすいだろうに」
「ああ、それはね」
ふとした呟きに花見川が別段嫌がった素振りもなしにあっけらかんと説明してくれた。
「小さい頃、母さんが亡くなった寂しさを紛らわせるため、ノートに夢日記をつけてたんだ」
「夢、日記？」
「知らない？夢の内容をノートに記述しとくの」
母親のいなくなった自分を慰めるのに、随分と変わった行動をとるものである。その行為には合理性の欠片もない、だからこそ没頭できるのかもしれないが。
「夢日記をつけ出して、1ヶ月くらい経った時かな。父さんがそんなのは夢と現がわからなくなるから止めなさい、って」
一理ある考え方だ。生産性の無い夢を記録するより現実と向き合い過去を記す方がいくらか前向きではある。
「それで、言われた通りに止めたんだけど、しばらく経って見た夢に、そのノートが出てきてこの能力に気付いたんだ。それ以来寝る前に念じれば出てくるようになったの」
「神のお告げ、ねぇ」
実際に能力の片鱗を目の当たりにしても、未だ信じられなかった。

「それで、ね。一週間くらい前に、私ちょっと困った事態に陥っちゃって……」
なんで夢のお告げがノートを通して行われるか説明し終わった彼女は、現実の時を今に戻し、少しだけ悩ましげな表情でぽつりと話はじめた。
「火事のこと？」
「あ、私が抱えてた問題はその少し前の段階ね。火事の前に警察に駆け込むべき大問題が私に降りかかったの」
泣きっ面に蜂、というやつか。
「それで、火事にあった後どうすればいいかと夢に頼ったら、ノートに今日の日付とあの不法投棄場が記されてたの」
「つまりそこにいけば助かる、と」
それでは、未来予知ではなく、まさしく占いだ。頼りにはなるがどうも濁した言い方で方角や場所のみを示す、運命の担い手。
「そういうこと。質問は火事に襲われる前に悩んでたことだったから、トウちゃんは火事で困る私とその前の話をダブルで救ってくれる、まさに救世主ってわけ」
こんがらがってきたので軽く纏めてみる。まず、火事が起こる少し前、彼女の中で大問題が発生、警察に頼ろうとした矢先、火事にあう。この状況をどうにかしようと、先に『大問題』を解決するため能力を発動、指定された場所に偶然にも僕、白江藤吾があらわれた、と。しかも、その人がなんとたまたま火事でお世話になる家の長男坊だっのだぁ！……これで合ってる、かな。
「どうして火事の前に能力を使わなかったのさ。そしたら火事は回避できたかもしれないのに」
「未来の事は極力知らない方がいいかと思って、いつも寝るとき何も質問しないようにしてるの。その時私の問題は警察に駆け込めば助かると思ってたから」

随分と偉い考え方である。僕がもし花見川と同じ力を手に入れたら、することがなくても毎日能力を使いそうなものだが。
「そりゃまた不幸だったね。一難去ってまた一難、というか」
「それが去ってないから大変なんだよ。火事はともかく、最初の問題は」
それを聞いてなんと返せばいいのか。彼女曰わく、その問題を解決するのは、僕なのだ。全く心当たりがないのに。
「警察沙汰にしようとしてたんでしょ？」
「うん。結構世間的にみても大きな問題だし」
「……最後に一つ、言わせてくれ」
沸々と嫌な予感が僕を取り巻きはじめる。厄介事には慣れていないのだ。
「僕は、出来れば楽をしたい」
「え？」
夏の夜の虫たちのコンサートに負けないよう、キッパリっと言い放った。
「目の前に困っている人がいれば、そりゃ助けるけど、出来ることならそんな人には出会いたくないんだ」
「えっと、何がいいたいのかな」
「頼らないでくれ。僕が君に言えるのはそれだけだ。過度な期待は子供にとって多大なプレッシャーなんだよ」
「いまは教育論の話はしてないってば」
この場から離れて、コンビニにでも逃げたかった。それが叶わないならせめて、花見川がいないモモちゃんの部屋にでも。
と、出来もしない妄想を膨らませるより、現状と向き合う方が最優先だ。彼女は僕に助けを求めてきた。少なくとも、そんな状況下で僕が言えることはただ一つ。
「警察に頼るべき問題を僕に押し付けないでくれ！」
「だぁぁ、違うってば、話を聞いてよトウちゃん！あの火事だって、私が変な行動を起こさないようにヤツが釘をうったから起こったん

だって！だから警察には頼れないの！」
ヤツ？ヤツと言ったか？誰の事を指してそんな呼称を用いたのだろう。
「考えすぎだっ！火事は偶然起こっただけで、君が思い悩んでいるような事は一切ない」
「絶対そうなんだって！犯人は放火もする恐ろしいヤツなんだ！」
犯人。冷たいナイフで背中から深く内臓をかき回されたような嫌な感触が沸き起こり、冷や汗が流れる。
「だ、第三者を持ち込むなよ。そりゃ火事は不幸だったかもしれないけど、冷静になって客観視することを忘れたら、なにもかもが疎かになる」
「だってそんな偶然あるわけないでしょ！通り魔殺人を目撃した次の日に火事なんて」

通り魔？
そんな、ワードが鼓膜を揺らした。さっきのニュース番組の無表情で淡々と現場を述べたアナウンサーの顔を思いだす。そんな、馬鹿な。
「……だから、聞きたくなかったんだ」
「なにが？」
思い通りいかない世の中を憂いて、右手で顔を覆うけど、偽りの安心感を得るだけで事態はなにも変わってはいなかった。花見川は、無邪気な感じでキョトンとしている。
通り魔。昨日まで無縁だった単語が今日はやけに耳につく。
「何があったかもう一度言ってくれ。火事の前の日に何があったか」
断片でも話を聞いた以上、後戻りはできない。それに事前に、話は最後まで聞く、と明言していたのだ。

花見川はやっと僕が土俵に上がってきたのが嬉しいのか、一瞬朗らかに笑ったが、すぐに表情を笑いとは対象的な悲哀に満ちたもの

に変え、話を続けた。
「あれは、一週間前くらい前になるかな。夜寝る前に、久しぶりに能力を使ってみたんだ」
「未来の事は知らない方がよかったんじゃないのか？」
「ただの退屈しのぎで、天日干しだよ。それで、した質問が『変わったことはないか』それに対する返答が、近所の公園だったんだ」
「公園？もしかしてさっきのニュースでやってた場所？」
犬の散歩のおじさんが第一発見者の、通り魔殺人第四の犯行。テレビの中だけの遠い事件が、いつの間にか僕の世界に飛びこもうとしていた。
花見川のお告げに示された公園。ノートに文字で公園とだけ記されている図柄はなかなかシュールだが、そんな事言って茶化すような雰囲気ではなかった。
「そうだね。それでその公園なんだけど、普段は凄く閑散としていて寂れた遊具しかないから子供も寄り付かないような不気味な場所なんだ。近所といっても結構入り組んだ場所にあるしね。それで学校帰りにお告げの事が気になって寄ってみたんだけど、」
沈鬱そうに言葉を一回くぎった。
「男の人が、二人、何をするでもなく立っていたんだ」
「二人？もしかして犯人と被害者か」
「うん。夕日はバックに、私も遠くから伺うくらいだったから影になってよくなかったんだけど、しばらくしてから、片方の、シルエットが、」
花見川は言いづらそうに目をギュとつむった。その時の光景がフラッシュバックしないようにしているかのようだ。
「ナイフ、ナイフでズブリともう片方を刺したんだ。聞こえるはずないのに、そんな音がするくらい、深く、」
「……」
「倒れこんだ人を見下すように、赤い髪をした男の人はナイフの血を拭ってしまってた」

「赤い、髪？」
「茶髪みたいに髪を赤に染めてるんだと思う。辛うじて薄暗闇でも分かる感じで特徴的だから鮮明に記憶に残ってるの。その人がもう一人を刺したんだ。
一瞬だった。言い争うでもなく、突然……。予想外な展開に私はなにもできなくて震えてた。泣いてたかもしれない。怖くて、足がガクガクで、うまく動かなくて」
「花見川、もうわかったからそれくらいでいいよ」
あまりにも辛そうだったので思わず声をかけていた。
冷静になるならば、僕ははっきり彼女に力にはなれない、と告げるべきなのだろう。なぜなら殺人は高校生ごときが扱えるような問題ではないのだ。大人しく警察に頼るべきだろう。よって僕は君の力にはなれないし、巻き込まれたくない。
そう言えばいいはずなのに、何故かそれらのワードが口から放たれることはなかった。
「まだ、話はこれからなの」
多少瞳に力を戻し花見川は続けた。
「私、その場から逃げ出したんだ。もう、恐ろしくて、でもなんとか、立ち上がって。その時にね。目が合ったの」
「なん、だって」
「倒れて動かなくなっている人の傍らで立ってた男が、見てたの。私をジッと」
危険すぎる。現場にいない僕でもそれくらいわかる。
「逆光と距離がすごくて顔は見えなかったんだけど、とにかく警察に行こうと思った」
「賢明な判断だな。そのまますぐに警察に行くべきだよ」
「うん。私もそうしようと思ったんだけど――」
彼女は、警察にはいけなかったとさっき言っていた。なぜだろうか。
「その時あまりにもパニックになってて、学校で使う鞄をそこに忘

れちゃったの。取りに戻ろうとも思ったんだけど、やっぱり怖くて、そのままに一日悩んで、明日警察と一緒に行こうと決めた時、ウチが小火にあったんだ」

「そりゃ、」

警察にはいけなくなるだろ。それは明らかに脅しだ。犯人が花見川に対する警告。そう考える方が自然である。

「だから、私はまた夢に頼ったんだ。夢のせいでこうなったなら解決してくれるのも夢のはずでしょ？」

「それは、どうだろうか」

はっきりとは言わないけれど、ちっぽけな力も持たない僕が花見川むくげを救えるとは到底思えなかった。

9中天、教室、夏期講習

昨夜の花見川との不可解な会話をベッドの中でも悶々と繰り返していたら、寝るのが遅くなってしまったらしく、最悪なコンディションのまま夏期講習が行われる学校に向かっていた。

普通の学生ならこの時期制服は着ないでハンガーラックにかけっぱなしなるだろう。だけど長期休暇をとることが許されなかった僕は制服姿に身をつつみ、授業がある時と変わらぬ時間に目を覚まして遅刻しないよう人気のない校門を一人寂しく潜っていた。いつもなら教師が明るく「おはよう！」と声をかけてくれるのだが、講習参加者の人数を考え、そんな野暮は行っていないらしい。

この時間帯学生がいない街は湖畔周りのように静まりかえっている。みんな寝ているのだろうか。午後に向け気合い溜めするセミの代わりを務める雀だけがチュンチュンと愛らしい鳴き声を上げている。雀と違って午前に滅法弱いモモちゃんはまだ夢の中みたいだった。花見川もだろう。

誰もいない廊下を夏期講習が行われる1—Aに向かいテクテク歩く。昨日は講習前のHRに少し遅れてしまい教師からお叱りをうけたのだが、これで汚名返上だ。

教室に入ると、もうすでに参加者が多く集まっていた。そのほとんどが、僕と同じように成績はそこそこだけど、休みがちな不真面目な生徒、もしくは期末赤点で補講＋で受けているような奴らである。そういう人達は見た目からして自堕落だ。最も僕もそこに含まれているのだが。

そんな空間にも異質な存在というのが存在する。

成績表についた『1（電柱）』を『2（アヒル）』に変えるために行われる補習と違い、講習は有志を募って行われるものなのだ。ただしそれだけでは集まりがよくないので、そこに遅刻とか休みが

ちの生徒を半強制的に参加させているから夏期講習の人数がけっこうな数あるのだ。別段進学校というわけでなく、みんな高一の夏休みくらいエンジョイしたいと考えるらしく、有志だけじゃ少人数過ぎて惨めになるのだ。

少人数をウリにするわけでなく外から敏腕塾講師を招くのだから、外面だけはよくしたい校長が考えそうなとこである。

とにもかくにも今教室は真面目と不真面目の両極端の生徒で構成されていた。見知った顔といえば、有志組の中に一応同じクラスの女子がいるのだが、生憎一度も会話したことがない女子だった。分厚いメガネにボサボサの髪、他人を寄せ付けないオーラを出す彼女は常に成績は上位で目立ってはいるけど、どうにも関わりがないと印象が薄くなる。名前も思い出せないので同じクラスの女子Aということで。知っている顔はそれくらいだった。

孤独感を味わいながら、僕は自分の席に着こうと足を進めた。何を隠そう、1―Aは僕のクラスなのだ。ホームのはずのクラスが、他の連中に占領され、アウェイになっていた。同じクラスの女子Aもこんな惨めな気分を味わっているのだろうか。とりあえず自分の席についてから、考えよう、と足を動かす。

昨日もそこで講習を受けたのだが、今日は少し様子が違っていた。既に別の誰かが、もうそこに座っていたのだ。

「そこは僕の席なんだけど、ちょっといいかな？」

「ぁ、ぇ？」

座っていたのは、入学式の時から美人だと話題になっていた他クラスの女子だった。文化祭でコンテストがあったら絶対一位だろ、とみんなが騒いでいた女の子だ。どういうわけがあってか、彼女もこの講習に参加しているらしい。肩までとどかないあたりで切りそろえられた髪の毛と、どこか日本人離れした端正な顔立ちでビスクドールのようだが、そういった精巧さとは対照的にどこかほんわかした雰囲気の少女である。

人形のような少女は、僕に突然声かけられて驚いたように、長い

睫毛をパチパチさせながら、
「ご、ごめん。すぐどく」
「そのままでいいよ。中の電子辞書とらせて貰えれば別に」
「ぁ、ありがとう」
なんでお礼を言うのだろう。よっぽどこの席が気に入ったのだろうか。確かに一番後ろの端っことというのはポイント高いだろうが、頬を赤くして喜ぶようなことじゃないだろうに。
僕は彼女の脇から手を伸ばし、昨日そのままにして置いたあった電子辞書を手に取って、一つ前の橘の席に腰を下ろした。夏は窓側より廊下側の席の方がヒンヤリしていていい。春先のくじ引きでの運の良さをここでほくそ笑むとしよう。
「この席、あなたのなの？」
「うん？」
鞄からテキストを出していたら、後ろからボソボソと蚊が鳴くような声でそう話かけられていた。ちらりと振り返って、彼女に返事をする。よく聞こえなかったけど、なんで僕が机の所有権を主張したか尋ねて来たのだろう。
「僕はこのクラスでそこの席だから、そう言ったんだ」
「そうなの。じゃ、じゃあ、どく」
「気にしないで座ってていいって。それとも男子が使ってるのが嫌だったらその隣が五十崎（いかざき）って女子の席だからそっちにすれば座れば」
「そ、そういうわけじゃなく……。ご、ごめんなさい」
なんで謝るのだろう。もしかして僕が怒ってると勘違いしてるのではないか。気を悪くさせてしまっているようなので、僕の方が謝罪を口にしたくなったのだが、場の空気をこれ以上湿気させたものにするのもなんなので明るい調子で彼女に話をふった。
「ところで昨日の講習には出てなかったね」
「ね、寝坊しちゃって」
あの教師、ちょっとの遅刻で僕をネチネチ弄り続けてたのに欠席してる人もいたんじゃないか。

これ見よがしに教壇で遅刻の理由を僕に尋ねてきた体育教師に心の中で恨み言をのべた。『遅刻の理由はなんだ？向かい風だったからか？』なんて小馬鹿にした態度で言っていた、あのツラを殴りたい。

「私、テスト、できなかったから、怒られて」

意外であった。色素が薄く、吹いたら飛んでいってしまいそうなふわふわした感じの女の子だけど、利発そうな顔立ちなのに。

「ふぅん。んじゃ、おんなじだ。僕は休みすぎて、これじゃ単位やらないって脅されて強制参加。お互い苦労するね」

「うん。た、大変」

おどおどした同意をえられたところで、ガラリとドアをスライドさせ、先生が現れた。

講習の前に点呼の意味をもって学校の先生が出席をとるのだ。それが終われば６０分３コマの夏期講習がスタートする。

この先の時間縛りにため息がでるのを抑えながら、僕は静かに返事をした。

講習といっても、いつもより詳しくやる授業といった感じで、塾講師が要所要所受験テクニックを伝授する、そういう単調なものだった。６０分は長いと思っていたのだが、集中していれば存外時間の概念というのは感じなくなるらしく、３コマが本当にあっという間だった。

今日の日程を終わらせたので、グーグーと抗議をたてる腹の虫をどうしようと思いながら、鞄にテキストをつめる。

朝温存していた体力を爆発させるかのように、真夏のセミは元気いっぱいで鳴き声を上げていた。そんな外に出るまえに腹の虫を鎮めるべきか悩んでいたところ、後ろの席の彼女が先に立ち上がり、

「じゃ、お先に、ね」

「ん。また明日」

「あ、明日」

ひらひら手を振りながらドアから出る彼女を見送った。
さて、どうしようか。

家に誰もいなかったなら学食でお昼を済ませていただろうに、今ウチには花見川と妹のモモちゃんがいるのだ。どうせモモちゃんは放っておいたらインスタント食品しか食べないだろう。それなら僕が家に帰って何か作ってあげたほうがいい。彼女は料理が全く作れないのだ。

とりあえず、僕は携帯で妹のメールアドレスを呼び出し、『お昼どうする？』と打ち込み送信した。

鏡に反射する光のようにすぐに着信があった。もっとも『次のあて先へのメッセージはエラーのため送信できませんでした』という報告メールだったけど。

「……」

モモちゃん……。アドレスかえたなら知らせてくれ。それが嫌ならせめて着信拒否ぐらいにしてくれないか、兄さんの心は極寒だよ……。

挫けかけた魂を奮い立たせるように、今度は自宅の電話番号を押してウチに電話をかけた。

コール音がそうしない内にガチャリと受話器をあげた音が僕の耳を刺激した。

『はい。はなみ…しっ、白江です！ご用件はなんでしょうか』

「花見川……。人ん家の電話に勝手に出るなよ……」

『そ、その声はトウちゃんだね！今なにしてんの？まだ学校にいる？』

彼女のバックヤードからテレビの騒がしい音とモモちゃんの『誰からー？』という音が聞こえた。二人はもうすっかり仲良しさんらしい。モモちゃんの口上が柔らかくなっている。

「ああ、今終わったところ。ところでお昼どうしてる？」

『お昼ご飯はねー、もんじゃ作って食べたよ』

「もんじゃ焼きっ！？」
今までウチでそんな料理を作ったことないし、出されたこともなかった、そう考えるとつまり花見川が率先して食卓に立っているのだろう。それにしても暑いのによく鉄板なんてしようと思ったものだ。
「へぇ。もんじゃ焼きってどんな料理なんだ？」
『ドロドロのお好み焼きみたいな感じかな。見た目グロテスクだけど結構おいしいんだよ。トウちゃんも食べる？』
一瞬真剣に悩んだが今更一人分彼女の手を煩わせるのも悪いと思い、お財布の小銭を頭の中で数えてから応えた。
「いや、僕は学食で食べてくよ。今から帰ったんじゃ腹がへりすぎてダウンしちゃいそうだからね」
『ういー。りょーかーい』
「あっ、そうだ花見川！」
通話を終えようとする寸前に大事なことを思いだした。大丈夫だとは思うが一応訊いといた方がいいだろう。
『ん？なんだいトウちゃん』
「念の為訊くが何も変わったことはないよな？」
受話器の向こうで静かに息をのむ音がしたが、ややあってから返事をしてくれた。
『……うん。平気。トウちゃんも気をつけて帰っておいで』
「僕はいいんだ。それより注意を怠るなよ。何かあってからじゃ遅いからね」
『ふふっ、オーバーだなぁトウちゃんは』
「笑い言じゃないんだろ」
もしかしたら、例の犯人に花見川は狙われているかもしれないのだ。現場に鞄を遺留した彼女は、運が悪ければ重要な個人情報さえ知られているおそれがある。
「とにもかくにも要注意。ウチから小火がでるのも勘弁だからね」
『そうならないよう努力します！』

上官もびっくりのいい返事を受けて彼女との会話を打ち切った。
携帯をパチリと閉じてポケットに滑りこませる。
さて、お昼を過ぎて腹も悲鳴を上げてるし、栄養摂取しに学食にむかうとしよう。

１０学食、遭遇、憂鬱の続き

人が疎らの学食は喧騒とは無縁といった感じで、静寂を伴い落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

窓側の席を陣取った僕は、『からあげ丼』の食券を購入し、一人ポツンと料理ができあがるのを、順路と書かれたテープ内で待っていた。

普段は学生で賑わう学食も長期休暇に入った7月下旬は閑古鳥が鳴いているようで、そんな落ち着いた雰囲気の学食で食事を取れるのは、休み返上で頑張るクラブや、僕のように夏期講習参加者の特権であろう。

「まずはお味噌汁ね」

「どうも」

学食のおばちゃんが、お盆に良い香りのする味噌汁を乗せてくれた。白い湯気が優しげにたゆたう。それからすぐに、からあげをヒョイヒョイとご飯が盛られた丼にのせ、上からトロリと特性のタレをかけ、

「はいお待ちどうさま」

「ありがとうございます」

完成したからあげ丼は結構なボリュームを誇っており、この量で４００円はなかなかリーズナブルだと僕は判断している。料理は得意な方だが、毎回作るとなると億劫であり、その点食堂という存在は有り難い。僕もモモちゃんの事を言えたもんじゃないのだが、小鉢のサラダで食物繊維もバッチリなので、大目に見てほしいところである。

受け取った生活費を一人余分に使用している件については、“頑張った自分へのご褒美”というありがちな言葉で勘弁してほしい。何を頑張ったんだかよくわからないが。

「あ、ちょいと待ちな」
「え？」
「ほら、これもオマケでつけてあげよう。夏休みなのに頑張るあんたにサービスだ」
「ありがとうございます」
おばちゃんはそんなこと言いながら本来ならばつくはずのない柴漬けを僕のお盆にひょいとのせてくれた。その心遣いに胸が熱くなるのだが、生憎僕は漬け物類全般が苦手な食べ物なのだ。だから、わざわざ漬け物がつかない食券を選んだのに、……いや、よそう。感謝こそすれば、いちゃもんつけるのは間違いだ。
とにもかくにもこの鮮やかな紫色を持て余してしまうのは残念としかいいようがない。自分以外からもらったご褒美と言っても過言ではないのだから。

貰った柴漬けについてどうするかの考察は後にし、とりあえず取っておいた席につく。窓から見える景色は、夏の午後の日差しに溢れていて、建物内から見てる分にはなかなか風流ではあった。帰宅の事を考えると、ほとほと嫌になってくるが。
小さく「いただきます」と唱え箸をもつ。誰もいなければ手もあわせていただろうけど、そんなモーションを一人で取っているのを他の学生にでも見られたら恥ずかしいからしなかった。
味噌汁を持ち上げた。学食のお箸はエコ活動だかなんかで、使い捨ての割り箸から、洗えば半永久的に使えるプラスチックの箸に昨年変更されたそうだ。どちらでもいいが最近猫も杓子もエコだエコだと騒ぎすぎな気がしないでもない。
僕に言わせれば、人間やはり地球規模の大きな問題よりも、目先の個人問題の方が最優先事項だろう。例えば――
味噌汁をすする。
「おいしい」
――飯がうまいかどうか、とか。

こんな気概じゃダメで、みんなが広く問題を意識し対策を講じることが大切です、と環境問題のレポートは締めるのが僕たち学生に課せられた義務だけど、おいしいものは素直においしいと論じることが許されるのもまた人間に与えられた自由の一つである。

碗から口を離し、一応のメインディッシュであるからあげ丼に手をつけようとした時だった。

「よう」

正面から声をかけられた。

慌てて前に目をやると、見知らぬ男が十年来の友人に再会した時のようににこやかに笑いながら、前の空席に腰を下ろしていた。相席になるほど混雑していない、むしろ選びたい放題だ。にもかかわらずわざわざ僕の前に座る意味がわからない。

「……どうも」

「そんな警戒すんなって。別にあんたを取って喰おうってわけじゃねぇんだ」

警戒するな、という方が無理という話である。目の前にいきなり現れた男はあきらかに学校関係者ではなく、ほぼ間違いなく部外者なのだ。随分と若く、もしかしたら学生かもしれないのに、そう断言できるのにはわけがあった。

「座らせてもらうぜ。……何食ってんだ？」

我が校の学生はたとえ休み期間だろうと校門を潜る者は制服、もしくは指定のジャージの着用が義務付けられている。彼の今の格好はカジュアルな都会の若者といったような物だ。

制服を着てなくても何かしら本校の生徒と分かるものがなくてはいけない。卒業生だろうと、事務室で手続きを受け、それを証明された者しか入れないはずだ。なんにせよ、『卒業生』だ『見学者』だ『作業中』だ、そういったワッペンをつけていなければ、彼は不法侵入者ということになる。

そして何より彼の髪は染め上げられていた。校則に『流行のファッション』の禁止、ようは節度を守った格好しか許されていない生

徒はそんなこと出来るはずがない。髪を染める事自体は違反じゃないがこれだけ綺麗な赤だと生徒指導室行きは免れないだろう。
夏休みに浮かれて染めたのだとしても、その格好で学校を訪れる意味がわからない。誰かに見せびらかしに来たのだろうか。
「すかしてんなよ。返事くらいしてもいいだろうが」
不機嫌そうなその呟きに、僕はそっと息をついた。
「失礼ですが、初対面ですよね？」
「あ？」
きょとんとした瞳で僕を見据えた。
「そうだぜ。前世がどうかは知んねーが、俺があんたと会うのは今日が初めてだ。でもそんなの気にするような事じゃないだろ、誰だって最初は初対面だ。劉備だって関羽や張飛と最初から知り合いだったわけじゃねぇ」
大仰に手を広げわけのわからない事を言いはじめた。開き直りだか知らないが、一人静かに食事をとる僕の邪魔する意図がいまいち理解できない。
もしかしたら、からかわれているのかもしれないな。だとしたら、迷惑だ。ちょっかいを出すのは仲間内だけにしといてほしい。
「なんか用ですか？」
「んー。そうだなー。用というほどのもんじゃないが、時間を取らせるつもりはねぇ。とりあえず話でもしようぜ」
「……」
むかっ腹立ってきた。
ピンとはねた髪の毛を戻そうと髪を撫でつけながら、人の様子を窺うようにただでさえ切れ長なつり目をさらに細めている。
この人の意図がなんなのか知らないが、なぜ初対面にも関わらず僕に話かけてきたのか。ナンパならば可愛い女の子しか認めないし、そもそも彼は性別でアウトだ。僕にそっちの気はない。第一、僕が女でも彼の誘いにはそう易々と応じないだろう。見た目からして、悪の道をゆく不良、ワイルドに憧れを抱いていない僕に惹かれる要

素はなに一つとしてなかった。
「あんた、名前は？」
「……」
自己紹介を求めてきた。最近このパターンが増えているのだろうか。妹のように無言で貫き通せば、いつか飽きてどっかに行くかもしれない。
「名乗るほどの者じゃねぇ、ってか？そのセリフは誰か助けた時にいうもんで俺はアンタに手をさしのべられた町娘なんかじゃないぜ。呼吸をするだけで人助けしてると思ってんならそりゃ自意識過剰ってやつだ」
「……人に名前を尋ねる時は自分が先に名乗るべきだろ」
「なるほど、そりゃもっともだ」
子犬のように明るい笑顔で、合点承知と彼は続けた。
「俺は、樒原（しきみはら）。ま、あんたが俺に愉快なあだ名をつけようが構いはしねぇよ。自由に呼んでくれ」
最近なんだか新入生でもないのに自己紹介の機会がめっきり増えたな、と思ったがよくよく考えてみたら、花見川相手にしかなかったことに気がついた。
さて、問題は目の前で僕の自己紹介を所望する彼である。幼気な少女ならまだしも、見るからに怪しさを身に纏った彼相手に、気軽にほいほいと個人情報をばらまくのはいささか気がひける。かと言って黙りこくるのも考えようだ。
「橘藍（たちばなあい）」
悩んだあげく友達の名前を拝借することにした。ＤＶＤだなんだと僕に迷惑かけたのだから、これくらいは許してほしい。
「たちばな？おいおい嘘だろ。そいつはダウトだ」
瞬時に見破られた。なぜだ？僕が橘みたくエロ目じゃないからだろうか。
「あんたの名字は白江（しらえ）だろ？俺が間違えたのか？」
「いや、合ってるけど、……なんで知ってるんだ？」

「嘘を真顔でつくとはヤりにくいタイプだよ、あんた。最初に警戒すんなって言っただろうが。今ので俺の中で白江の好感度はガタ落ちしたぞ」
知るか、そんなこと。
そう思ったが口には出さなかった。僕も彼と全く同じ感想を抱いていたからだ。ヤりにくいタイプと称したが、それはこの人にしてみても全く同じ事が言える。
僕の事を事前に知っていてそれでも尚、自己紹介を求めてきたのだ。初対面を装うことで警戒心をとく意味も込められているだろうが、相手の人間性を確かめる上で自己紹介はやっておいて損はない作業だ。彼は僕にそれを仕掛けた。それにより僕の人を疑り深い信念というのが彼にバレたのは言うまでもない。
もっとも彼についての警戒心を強めた意味では彼が僕の本当の名前をあきらかにしたのは失敗だろう。知らないふりして話を進めていれば、疑うことはなかっただろうに。
「それで知りたいのは下の名前の方だ。あんたのフルネームはなんていうんだ？」
「知ってどうする？」
名前を書いたら死ぬノートにでも綴る気だろうか、僕はまだ死にたくない。
「別に、何も。そんくらいじゃなんもできねーよ」
「だったら名字だけで十分じゃないかな。お互いの呼称には困らない。僕もあなたの樒原という名字しか知らないし、これでフェアというものでは」
「確かにその通りだな。しゃあねぇ」
「それでなに？用がないなら話かけないでくれよ。昼食くらいゆっくり食べたいんだ」
別に強くそう思っているわけではないが、これ以上いっしょにいるのは危険だと、第六感とやらが赤信号を灯しているので、その警告に従うことにした。

「おいおい……、急にトゲを出し始めたな。いいだろう。それじゃこっからが本題だ」
彼はそう言ってから、赤く染め上げた髪を揺らし、僕を睨みつけてきた。赤色――？

いままでどうして気がつかなかったのだろう。彼の髪を見て今更な事に気がついた。
ボーとしていたにしても酷すぎる。あんな決定的証言を……。昨日の花見川のおどおどした様子がフラッシュバックする。
『髪を赤に染めてるんだと思う。辛うじて薄暗闇でも分かる感じで特徴的だから鮮明に記憶に残ってるの。その人がもう一人を刺したんだ。』

花見川との昨日の会話だ。通り魔事件の決定的証言。
「俺が聞きたいのはただ一つ、」
そして、目の前の男、樒原は、通り魔事件の犯人と同じく、髪の色が赤色だった。
偶然かどうかは、まだ判断のつけようがない。彼はパニックを煽るようにゆっくりと言葉を紡ぎ出した。彼曰わく、話の本題を――
「花見川むくげ　を知らないか？」
その言葉は深く重く僕の耳に残留した。

１１虚偽、真実、誤魔化し

「花見川むくげだよ」
樒原と名乗った青年は僕の様子を確かめるようにもう一度同じ言葉を投げかけた。
エウスタキオ管を跳んだり跳ねたりする花見川むくげという名詞に聞き覚えがあるかと問われたらイエスとしか言いようがないのだが、
「花見川むくげ？さあ。知っていたらどうなんだ？」
赤い髪をしたこの人だけにはそう易々と答えを教えてやるわけにはいかない。
花見川の名前が飛び出した時点で確定だろう。こいつは、考えうる最悪のパターン、通り魔犯だ。僕と花見川が今、もっとも接触を恐れている人物。
「とぼけねぇで正直に答えろよ」
「一切がっさい存じあげません。……と言ったらどうなる？」
本当なら、そう言いたいところだが、庇ったところであまり意味をなさない。なぜなら僕に花見川の事を尋ねる時点で彼女が僕の家に転がりこんでると当たりをつけているだろうからだ。よって濁した言い方が僕に残された最後の防波堤である。
「さぁて、ね。質問が拷問に変わる、なんて事もあるかもな」
「それは怖いね」
大げさなため息をついてから、味噌汁に口をつける。パニック状態を悟られないようにいかにも冷静を装ったわざとらしい仕草だ。自分の演技の下手さを誤魔化す手段に食事を選んだのはなかなかいい選択だろう。そうだ、忘れちゃいけない、今僕は昼食を取っているんだ。
「正直に答えた方が身のためだぜ？

一度でいいからこのセリフ言ってみたかったんだよ」
クシャとシワよせて笑っている彼から悪意というものは全く感じられないが、最初のセリフにはゾクリと鳥肌がたったのは事実だ。
「花見川、むくげ。彼女については知ってます」
「ほーぅ。んで？」
べつにへたれたわけじゃない。ここで意地はって彼を挑発し続けても意味をなさないし、なにより大まかな大筋を樒原は知っているのだろう。
火事で家を失った（実際は住めなくなったくらいだけど）花見川が白江家に居候しているということを。
「んで、と言うのは？花見川については知ってるけど、その続きになにを求めてるんだ？」
「むくげを探してんだ」
「探す？なんで？」
「秘密。そりゃ本人にしか言えねーよ。それで今、あいつはどこにいるんだ？」
なぜ下の名前で彼女を呼んだのかはさておき、秘密とは上手い言いようである。言及しようと思えば出来るけど、したところで誤魔化されるのがオチだろう。自分の犯行の目撃者に会った犯人が取る行動、昔から相場が決まっている。
花見川も花見川だ。現場に個人情報の詰まったカバンを忘れるだなんて、ベタな事をしてくれたものだ。それではわざわざ私を狙って下さいって言っているようなもんじゃないか。
「それよりなんで僕に花見川の事を聞いてきたんだ？」
「先に質問に答えろよ、今花見川むくげは何処にいるんだ？」
僕は何も言わずに唐揚げご飯を口にかけこまし、これ見よがしにもぐもぐと咀嚼した。その様子に樒原はやれやれと小さくと息をはいた。
「あいつんチが火事にあったらしくてな。家に行っても不在なんだよ」

椹原は僕が通り魔犯の正体に気付いている事を知らないみたいだ。これは一つのアドバンテージ。
彼は元から花見川の知り合いだと僕に思わせようとしてるみたいだ。不審火で花見川の口封じに成功したと判断してるのだろうが、残念。僕は花見川から事の詳細を構わず報告されている。なんてったって僕は彼女の救世主、だからな。……なんも嬉しくない。
「それで調べてみたら彼女の親父さんの同級生の家に転がりこんでるそうじゃねぇか。それでその息子のあんたに接触を図ってみた、ってわけだ。それで、実際はどうなんだ？」
「どう、とは？」
彼が何を聞きたいのかわかっているがとぼけたふりして会話を引き伸ばす。僕はその間に何を言うべきか、言わざるべきか、考えを必死になってまとめていた。
「だから火事で自宅を離れた花見川むくげはあんたんチにいんのかって話だ」
「ああ、はいはい」
火事を起こしたのはお前だろ。そう思いつつも口にはださない。
……ん？ふと疑問に思った。口封じのために小火を起こしたのになぜ花見川の行方をこいつは知りたがっているのだろう。喋るな、と脅しをかけて花見川の家に火をつけたのなら、もう彼女の前に現れる意味はないだろう。それとも、警察には言うなよ火事のように俺は本気だぜ？と会ってわざわざ言いたいのだろうか。
もしくは元々あの火事は花見川を天に送る目的で起こしたのだろうか。失敗したので、会ってもう一度、とか。
どちらせよ、危険極まりない男だ。
「ああ、確かに花見川は居候してるよ」
「ほう、そうか。会わせてくれ」
さて、
「だけど彼女、僕の両親にくっ付いて実家の方に行っている。だから今、この街にはいない」

嘘だ。だけどそれくらい言っておかないとこの場を誤魔化しきれないだろう。
自分の強行を目撃した花見川をこいつがどうしたいのかは知らないが、助けを求められて何もせずに傍観してたのなら寝覚めが悪くなるというものだ。
「……実家だぁ？どこだよ」
「島根」
短い返答に樒原は一瞬当惑で目を円くしてから、
「シジミ？」
「うん」
「石見銀山？」
「うん」」
樒原は目をぱちくりさせている。
「出雲大社」
「うん」
「鳥取県とよく間違えられる？」
「そうなの？隣の県なだけじゃん」
「一年計の砂時計？」
「サンドミュージアムにあるね」
「……中国地方？」
「うん」
彼は僕の頷きを受け、無言になった。あと、松江城や宍道湖を付け加えようかと思った矢先、樒原は大きく声を上げた。
「遠いじゃねぇか！」
「ごもっとも」
立ち上がって睨みつけられてもこればっかりはどうしようもない。正直に『嘘ぴょーん』と言っても許してもらえそうにない雰囲気だ。花見川がそんな遠い場所に行っていると認識したら樒原もそう易々と手を出せないだろう。

「なんでそんな遠いとこに行ってんだよ」
「親戚の集まりがあるんだよ。花見川は特別ゲストだ。僕は夏期講習があるからお留守番」
花見川の件だけ嘘で、あとは全部真実だ。真実の中に嘘を織り交ぜることで見破りにくくなるとテレビで言っていた。
樒原は文句を言いたげに唇をとがらせているが、口を開かず、そのまま椅子に座った。
「と、いうわけで花見川はいまここから単純に片道８００キロ先にいるわけだ。何か言いたい事があるなら電話で言付けておくけど、なにかあるかい？」
「いや、いい。それよりいつ頃帰ってくるんだ？」
彼が僕に伝言を頼めないのは当たり前だ。まさか自分が殺人者だと明かすわけにもいくまい。生憎僕は知ってるけど。
「多分一週間後くらいになるかな」
「一週間か」
大まかな日付を聞いて樒原は何かを考えこむように顎に手をあてた。
とりあえずの猶予期間を得たな、と思いながら僕は食事を続ける。大丈夫そうだ。樒原は信じた。僕を疑ってはいない。帰ったら速攻花見川と相談会だ。
「よし、むくげが帰ってきたら教えてくれ」
ポンと思いついたように樒原は朗らかに僕に告げた。何を言ってるんだこのキラー。
「メルアド教えてやる。今なら特別電話番号もだ。むくげがお前んチに帰ってきたら連絡してくれ。赤い髪の男が話があるってな。それだけ多分向こうは分かるだろう」
十分すぎるくらい知り得るだろう。心労で殺す気かこの男。
「それでいいよ」
「おし、それじゃあ早速」
彼はそう言ってポケットから、赤い携帯を取り出して僕にかざし

てみせた。どんだけ赤が好きなんだろう。
「おい、お前も出せよ、携帯」
「なぜ？」
「なぜ、じゃねぇーよ。連絡先交換しようってのになんで動かねぇんだ」
なるほど、ね。
「ああ、携帯今家にあるんだよ。学校に持ってきちゃいけない決まりでね」
本当はポケットにサイレントマネーでしまってある。それを出さないのはただ単純に彼に自分の連絡先が知られるのが嫌だからだ。
「ふーん、そうか。んじゃ仕方ねぇな」
樒原はそう言って自身の携帯をポケットにしまった。それから何かを要求するように手のひらを上にして僕に差し出してきた。
「なに？」
「ペンと紙貸してくれ。学生ならカバンにそれくらい入ってるだろ」
言われた通りノートの切れ端とボールペンを渡すと、流れるような動作で何かを書き付け僕に一式を返した。紙には文字の綴られている。
「電話番号とメールアドレスだ。あとで連絡くれ。花見川むくげが帰ってきてもな」
「了解」
短く応じて、メモをズボンのポケットにしまう。
誰が連絡するか。一生この番号をマイセルラーフォンに入力することはないだろう。

会話が途切れたと同時に食事も終えたのでお盤を持って立ち上がる。セルフサービスなので食べ終わった食器類は流しに返しにいかなければならないのだ。
椅子に座ったままの樒原が驚いたように僕を見上げていた。
「おい白江。まだ漬け物が残ってんじゃねぇか」

「柴漬けが苦手なんだ」
「いらないなら俺にくれよ。好物なんだ」
「……」
とりあえず学食のおばちゃんの心遣いを無駄にしないで済みそうだ。

１２通話、対話、乙女の祈り

いやはやなんとも。

……書き出しに、その言葉を選ぶのはあまり推奨されるべき物ではない。

しかし僕の心情をあらわすのに、これ以上しっくりくる言葉は他にはないだろう。一山乗り越えた僕に降り注ぐ真夏の太陽は、藤吾グッジョブとまるで祝福するかのように燦々と降り注いでいた。残念ながら優しさとは無縁な、下手したら人を殺しかねない直射日光だけど、爽やかな気分にはさせてくれた。

赤髪通り魔犯（確定的）、樒原と学食を出たところで別れた僕は、彼がいないのを再三再四確認し、校門を抜け路地を何本か折れたところで、こそこそと持っているのを秘密にしていた携帯を取り出した。そこに１５年間生きてきてすっかり脳にこびりついた自宅の電話番号を、迷うことなくプッシュする。

花見川につい先ほど僕の身に降りかかった事実を報告しようと思ったのだ。耳に当てた携帯電話が自宅の呼び出し音を伝えてくれる。

帰ってからでも良かったのだが、事は急を要する。彼女を捜す通り魔犯がすぐ側まで来ているという事実は一刻も早く伝えるべきだ。そして僕が彼女に言うべきことは一つ、外出禁止令。

下手に外出して樒原と遭遇しようものならどうなるか分かったもんじゃないが、家にこもっていれば目撃される危険性は少なくなるだろう。

彼女の身を案じ焦る気持ちを助長するように、虚しくコール音が鼓膜を刺激した。しかし、そのまま自宅と繋がることなく留守番電話に突入した。通話を切る。どうやら今家には誰もいないらしい。先ほどまで自宅にかけた電話は繋がったのに、よりにもよってこの短時間に、二人そろってどこかにお出かけを開始したらしかった。

花見川は自分の立場が分かってるのか？外出している場合じゃないだろう。モモちゃんもモモちゃんだ。出会って2日目の女の子と仲良く外出なんかしないでくれよ。

家に戻るように言わなくては、とモモちゃんの携帯番号を呼び出す。もしかした友達と遊びに行っているだけかもしれないが、責任感の強い彼女が預かっている子をほったらかしにして、遊びに行くとは考えづらい。彼女の近くにはおそらく花見川がいるはずだ。

中学生に携帯は早いと思う一方で便利な世の中になったものだと一人関心しながら呼び出した電話番号が繋げたのは『おかけになった電話番号は、現在使用されていません』と淡々と告げる女性の声だった。

「……」

そのまま、その音声相手に、『僕の妹ったらメールアドレスはまだしも電話番号が変わった事さえ教えてくれないんですよ』と愚痴をこぼしたかったが、耳から携帯を外して繋がることのなかった通話を切った。

しょうがない、家に帰るか。

連絡が取れなかったので、そうするしかあるまい。あとは、まあ、自宅で花見川が樒原と出会わないよう祈るくらいしか僕には残されていない。

花見川の携帯番号でも知ってれば直接そっちにかけるのだが生憎彼女と連絡先の交換はしていな……

あ

灼熱地獄のアスファルトから立ち上がる熱気が、僕の頭に光化学スモッグをかけていたとしか思えないほど、すっかり忘れていた事柄を思い出した。

そうだ。何をしていたのだろう。

しまいかけた携帯電話を再び握り、ＳＭＳ受信ボックスを呼び出した。ショートメールサービスとは電話番号を利用した同一端末同士でしか利用できない簡易版メールシステムだ。つまり、僕は花見

川むくげの電話番号を昨日の『予言』で知っている。それしても、花見川、僕とたまたま機種が同じだから良かったものの、違かったらどうやって僕の信頼を得ようと思っていたのだろう。
昨日始めて届いた番号に、電話をかけながら耳にあてる。
そういえば最近ＳＭＳは異なる企業で契約をしていても利用できるように調整されると耳にしたが、実際はどうなるのだろう。メルアドより電話番号の方が入力の際、容易なので便利といえば便利なのだが、
そんな思考をぶった切るように、花見川の着メロが僕の耳を賑わせた。懐かしさともどかしさが僕の全身を駆け巡る。
『乙女の祈り』だった。
上昇旋律が美しい優美な曲だ。このピアノのメロディを聞いたことがない人はめったにいないんじゃないだろうか。
ポーランドのテクラ・バダジェフカという女流作曲家が１７、８の時に作ったヒット曲だ。彼女は若くして逝去してしまったらしいが、紡ぎだしたメロディは何年経過しようと色褪せることない。
中学の時の同級生が、『私の手じゃ小さくてうまく弾けない』と嘆いていたのを思い出した。子供の弾く曲と思われがちだが、簡単というわけではなく、オクターブの移動が結構あるため、手が小さいと弾きつらいのだ。

『はい、もしもし、』
夭折しても、何かこの世に残せるなら、これほど幸せなことはないんじゃないだろうか。
と、懐かしさに埋没しそうになった僕の思考を掬いあげるように、花見川の声がメロディラインの代わりに響いた。
「もしもし、花見川？僕だけど、」
『今流行の僕僕詐欺ですか？』
それを言うならおれおれ詐欺だし、流行りは一昔前に去った（と思う）。

電話口でのっけから、なんて事を言うのだろう。確かに彼女からしてみたら、いきなり電話が来て警戒する気持ちは分かるけど、僕相手にそれはないでしょ。さっき自宅に電話した時は一発で僕だって気づいてくれたのに。

「違う。白江藤吾。急用があるから電話したんだけど、」

『トウちゃんは私の携帯番号を知りません、よってあなたはトウちゃんじゃありません。以上証明終了ー。この詐欺師、二度と電話してくんなー』

プッ。

間延びする声が鼓膜に残留している。いきなり切られた通話に呆然と立ちすくんでいたが、いつまでもツーツーを聞いてても意味はない、リダイヤルだ。

それにしても注意を怠らないように言ったのは僕だけど、僕相手にそんな事をするなんて想定外にもほどがあるわ。

『しつこーい！』

乙女の祈りが流れる前に花見川が着信に応じてくれた、のはいいのだが開口一番なんて事を言うのだろう、彼女は。

『偽トウちゃんめ！本物のトウちゃんはもっと春の小川のように澄み切った声をしてるの！』

そんなはずあるか。唯一無二の白江藤吾という人間の声帯は二回の変声期を経て完成されているはずだ。出来上がった声を今更変えようだなんて「七匹のこやぎ」の狼のようにチョークの粉を飲めというのか。まっぴら御免だ。

「君が誤解してようと、僕の名前は白江藤吾だ」

『嘘だー。本物のトウちゃんは私の携番知るはずないもんねー！』

過去の悪戯を武勇伝の如く語るファミレスの男子高校生のような、チャラチャラした言い回しだ。いくら警戒するように、と注意を促したが、挑発しろとは言っていない。電話口に息がもれないようにしてから極力聞きやすいようにゆっくりと言ってやった。

「昨日の予言で僕の携帯に、自分の番号から文を送ったでしょ」
『あっ、』
息を飲む音がして、数秒、沈黙の二文字が漂った。
『ご、ごめんなさいっ！』
それからすぐに氷解した誤解と、大きな謝罪が鼓膜を震わせた。
『そのことを知ってるとは、１００パーセントウちゃんだね！ああ
あなんてこと！私ったらとんだ失礼を』
「いや、わかってくれればいいから……。電話であんまり怒鳴らな
いでくれ」
難聴にする気か。それから無意味にあだ名を進化させるのも止め
てもらいたい。
「それより花見川、今どこにいるんだ？」
『うん？私？』
君以外に誰がいるんだ。少し涙声で花見川は口を開いた。
『表を行った先の目抜き通りでショッピングしてるよ』
そういえば、雑踏がずいぶん騒がしい。
「モモちゃんも近くにいる？」
『うん。桃里ちゃんが新しい服が欲しいって付き合ってるの』
「そうか……」
予想通りだけど、それでは電話で花見川に通り魔犯と遭遇したと
報告するのは止めたほうがいいだろう。下手をしてモモちゃんをこ
の問題に巻き込むというのは出来れば避けたいし、今後の対策を練
るのも含め長くなるだろう。そうなると電話だと不便だ。モモちゃ
んに怪しまれる。
「悪いがショッピングは中止して、すぐ帰ってきてくれないか？」
『えっ？なんで？』
「なんで、って……」
事実を端的に伝えるのは簡単だけど彼女の表情をここで曇らせる
のも得策ではない。今は樒原のことは伏せた方がいいだろう。
「大事な話があるんだ。花見川、君に言わなくちゃならないことが」

『えっ、そっ、それ、って』
電話口の花見川の声はしどろもどろになってめちゃくちゃだ。まだ樒原のことは言ってないのになんで一足早くパニックになってるんだ、彼女は。
『うん、す、すぐ帰るね』
数秒と経たないうちにそう返事が返ってきた。どことなく嬉しそうな口調だが、どうしたのだろう。とりあえず帰宅させることは出来そうだが。
「ああ、頼む。出来るだけ早く。急いでくれ」
『うん。わかった。今から戻る、よ』
「おし、頼んだ。ああ、そうだ花見川」
一つの不安が浮かんだ。それはその帰宅中に樒原の視界に花見川が入る可能性についてだ。そうなっては元も子もない、全てがパーだ。考えすぎかもしれないが、用心に越したことはない。
「そこで帽子かなんかを買って着けてこれないかな。出来れば飛びっきり服装変えて、サングラスかなんかが似合うんじゃない？」
変装、とまではいかないが、少し格好を変えることでバレる可能性はグッと低くなるだろう。当然僕の指摘に花見川は『なんで？』と訊いてきたが、その質問に正直に答えるわけにはいかない。
ここで君は狙われていると言うのは、彼女の不安をイタズラに煽るだけだ。と、いうわけでなんと言おう。まあいいや適当で。
「ただ僕が見たいだけだよ」
『……』
花見川は無言になった。向こうの雑踏が耳につく。いやにながい沈黙の後で焦ったような早口で花見川が口調を荒げて続けた。
『わ、わかった。ぼ、帽子だね！買っていくよ！ど、どういうのがいいかなー』
「それは君のセンスにまかせる。とにもかくにもそうしてもらえると助かる」
何を頑張るんだろうと思ったが、朗らかな口調に戻ったようなの

で、なんとなく安心した。
外の世界は危険がいっぱい、というわけじゃないが、外出中が一番危険度が高まっているのも事実だ。
印象を変えてカムフラージュすることで樒原の目をごまかせたら最高だ。
だけどそんな提案、当然花見川は疑問に思うんだろうな、と半ば言い訳を考えつつ、答えを待っていたら、意外にも素直に、
『うん、わかった』
と、花見川は頷いてくれた。
「頼んだよ。んじゃまた後で」

これだけで、ひとまずは安心できるだろう。偽装ポイントは今の発言だけで多くある。
後は花見川と樒原の遭遇しないよう、本当に祈るのみだ。

そうと決まれば僕も帰宅を急がないと。先に花見川とモモちゃんが戻るのは言い出しっぺとしてよくない。
ようやく夏の日差しから離れられると思うと少し気持ちが軽くなった。

13誤解、紅潮、怠惰

昼間のワイドショーは、芸能ニュースをおもしろおかしく放映している。自宅で一人、リラックスしてテレビを見ている僕の耳に、慌ただしい足音が聞こえたのは、くつろぎだしてそう経たないうちだった。

「兄さん！」

勢いよくリビングの扉を開かれ、妹のモモちゃんが息をきらせてあらわれた。あの電話からけっこう時間がかかっているが、無事帰宅出来たのならそれで良いだろう。

「おかえり」

「ただいま、……じゃ、ない、ですっ！兄さん！」

帰宅の挨拶はこのやりとりで合っているはずなのに、なぜか半分怒鳴る勢いのままつかつかとソファーに座る僕に詰め寄った。

「なんていう人なんですか。あなたは。呆れました。まさか、そんな人だったなんて」

「……いきなりどうしたの？」

「どうしたもこうしたもありません。あなたが縁者で私は恥ずかしいです！兄だなんて認めたくないほどです！」

驚いた。面と向かってそんな言葉を言われたのは、初めての経験である。いつもは何も言わず、不機嫌そうに顔をそむけるだけなのに。

「そりゃ、モモちゃんは若いからいろんな考えが頭の中に巡ってるかもしれないけどさ、兄妹は変わりようない事実なんだからいい加減受け止めてよ」

「知ったような口きかないで下さい。私はあなたの思春期に絶望してるんですから！」

昨日までそこそこ良好だった彼女との関係はこの数時間で一変し

てしまったらしい。いや、ＤＶＤとか色々あったけど、夕飯時には機嫌治ったと思ったんだが、ぶり返してしまったのだろうか。
「突然何を言いだすんだ。もしかして去年から妙によそよそしくなった態度について説明してくれるの？ずっと疑問だったんだ。なんでモモちゃんは急に僕相手に敬語でしゃべりだしたのか、とか」
「今は関係ありません！」
僕はタンスの上に飾られているモモちゃんの去年の修学旅行のお土産に目をやった。私立だからと調子に乗ってニュージーランドに行ったモモちゃんのお土産は、母さんにはキウイのぬいぐるみ、父さんにはデフォルメされた羊のステッカー、僕には、何もなし、だった。催促したら淡泊に「元気な私がお土産です」と返され何も言えなくなったのはいい思い出だ。

「兄さんはわかってないみたいですね」
「えーと、……なにが？」
けんもほろろな彼女に対抗する手段はクエスチョンマークを浮かべるくらいしか残されていない。モモちゃんは憎々しげに眉をよせ、僕を睨みつけている。
「私がなぜ今ここにいるか、言ってみて下さい」
「ここ、って……家？」
「そうです。なんで私がママやパパに着いていかなかったか。さぁ早く！」
いきなりの問題形式に、寝起きドッキリを仕掛けられた芸能人の気分を味わっていたら、時間切れになってしまったらしく、僕にぐいっと顔を寄せてモモちゃんは呆れるような口調で言った。
「あなたが男子高校生らしく、疚しい行動を起こさぬよう私がいるんです」
「やま、……は？何？」
僕の戸惑いとは裏腹に、モモちゃんは冷静なボソボソと小さな子供に言い聞かせるようにそっと囁く。

「一つ屋根の下に同年代の少女がいればムラムラするんですか？まさか兄さんがそういう人間だとは思いもよりませんでした」
「もしかして、花見川の事を言ってるの？」
「ママやパパが、預かる女の子と兄さんと二人っきりするは倫理的にマズいだろう、と相談してた時、私は大丈夫だと思っていたんです。兄さんにそんな勇気ないし、なによりクラスの男子とは違うって。それなのに、」　とりつくしまもない、僕の声は彼女にとって心臓の鼓動のように意識しないものになってしまったようだ。
少しだけ悲しそうに、眉尻を落としてから、彼女は続けた。
「まさか、実際はそんなエロティシズム溢れる男の子だったなんて」
「なに意味がわからないこと言ってるんだ」
「信じてたんです！兄さんは精神的に成熟した男性だって。それなのに、性欲まみれ……。汚らわしい！思えば昨日のＤＶＤとか、あれもだったんですね？」
「いや、違うから。何いってるかわからないけど」
「あんな言い訳信じた私がバカでした。いくら女に飢えていようとお目付役の私がいるにも関わらずむくげさんに手を出そうとするなんて」
「やっぱり勘違いしてるな」
薄々感づいてたんだ。話が妙に噛み合わないと思っていたら妹は僕のことを、軽蔑しているのだ。今までの彼女の瞳は、冷たくてもそんなに酷いものではなかったのに、今日のそれは昨日のＤＶＤを見ている時と同じだったんだ。
僕の妹は清廉なのか知らないけれど、エロスに関しては妙に毛嫌いする傾向があるようだ。ひたすら僕を『不潔』扱いする花見川同様。
そういうデータを統合してみた結果、導き出した答えは、モモちゃんは先ほどの僕の発言、『大事な話がある』、を男女の思いの伝え合い、『告白』かなにかと勘違いしているようなのである。
そして僕の発言は電話だったため花見川しか聞いていなかった。

又聞きのモモちゃんが勘違いしたという事は、花見川も、なのだろう。
「どうやら二人とも僕の言葉を履き違えているみたいだけど、僕が花見川に言った……、
ってちょっと待て、花見川はどこにいるんだ？」
今更ながら当事者の花見川がリビングにいない事に気がついた。
「まさかバラバラに帰ってるとかじゃないだろうね」
不安が脳裏を掠めた。それは、マズい。よりにもよって彼女を一人きりにするのは。
「むくげさんには廊下で待っていてもらっています。私が兄さんに一言あるって先に中に入ったんです」
しれっとモモちゃんは言った。ホッと安堵の息をつく間もなく、
「ともかく時と場所をわきまえて下さい兄さん。あなたがそんな低俗な人間だったのはこの際気にしません」
隔靴掻痒、なんてもどかしいのだろう。きちんと話を聞いてもらえれば、わかってくれるはずなのに。
「ただ、よそ様の娘さんに対し劣情をそそるのは、最低の屑の所存です。最後の頼み綱であるあなたの理性に語りかけます。正気を保って下さい」
実の兄貴が、畜生以下と彼女は認識してるのだろうか、ショックを通り過ぎて絶望だ。
「ただ、」
ぐわんぐわんと頭の中に鐘の音が鈍重に響きわたり、誤解をいかにして解くか思考を巡らせていた中、モモちゃんは言葉を区切ってから、少しだけ複雑な表情を浮かべてから呟いた。
「むくげさんは可愛いくて、優しくて、……あなたがそう思ってしまうのも理解出来ないわけじゃありません」
嬉しさと悲しさが半分半分入り混じった不思議な表情だ。
「あー、モモちゃん、君は重大な勘違いを、」
「私からは以上です。ここから先は兄さんの自由。私がししゃり出

るのはこれが最後」
　モモちゃんはそう言うと悲しさが睫毛をにじませるまで幾ばくもない危うげな表情でそっと離れ、キッチンの椅子に座った。
「モモちゃ、」
「むくげさん、話は終わりました。どうぞ入って来て下さい」　大きな響きわたる声で、モモちゃんが言ってから、リビングの扉が再び開くまでそう時間はかからなかった。

「えっと、」
　もじもじしながら、女の子がドアを開けて入ってきた。

　一瞬誰かわからなかった。
　シンデレラとか、眼鏡からコンタクトとか、サナギから蝶とか、そんなの比にならないくらいの、大変身だ。
「花見川？」
　戸惑いから唇が震える。昨日屑鉄造りの海で初めて出会った時のように、言葉がこれ以上でそうにない。あの時は、まだ幼さが残る少女と言った感じだったのだが、今は完全に一人の女の子、だった。
　昨日からの花見川の容姿も彼女の性格にマッチしていたが、１８０。の方向転換した彼女もなかなかお似合いだ。
「うん、どうかな、トウちゃん……」
　照れたように頬を紅くして、
「似合う？」
　恥ずかしそうに花見川は聞いてきた。

「よく、似合ってるよ」
　今の彼女の格好は似合いすぎるくらい合っていた。こじゃれた言い方が何も浮かばないのでストレートに表す。予想外のインパクト。昨日からの花見川の容姿がベストな状態だと思っていたが、垢抜けるとこんなにも、……止そう、こっぱずかしくて、僕が死にそうだ。

「ほんとっ？ありがとう！」
心底嬉しそうな声を上げた。

今の花見川がテレビのオシャレチェックに出たら文句のつけどころがなく最高得点を叩き出すだろう。
僕の注文した帽子が、いいかんじに彼女の頭に乗っかっている。サングラスは装備してないみたいだが、ブラウスとスカートをドレス風に組み合わせたシックなチュニックドレスが大人っぽさを演出していた。
髪型も昨日と違いまとめておらず、フワフワと下ろした栗毛の髪がたまらなく、似合っていた。
「たった数分でむくげさんはそれだけオシャレできるんだから脱帽です」
夏休み明けで垢抜けた同級生をからかうような口調で、頬杖ついたモモちゃんが声を上げた。
「そ、そんなことないよー！桃里ちゃんが手伝ってくれなかったら出来なかったってー」
「私は似合いそうな服を見せただけ。それを見事に着こなすから凄いんです」
「う～、あんまり冷やかさないでよー」
モモちゃんはケラケラと笑い声をあげた。
「あ、私は部屋に戻って夏休みの宿題でもやるとします」
気を使わせたのかわからないけど、モモちゃんは寂しげな笑顔のまま居間を後にした。
リビングに花見川と僕で二人きりになる。

「と、トウちゃん」
「あ、何？」
見とれてたワケじゃないけど、無言になっていた僕の方を向きなおり、花見川がまばたき多めで呟いた。

「本当に、変じゃないかな？お化粧慣れてないから、不細工になってないよね？」
「ああ、大丈夫。よく似合ってるよ」
逆に驚いた。なぜならよくよく考えてみれば昨日までの花見川は全く化粧をしてなかったのだ。少女特有のあどけなさが、カバーしたのかわからないが、昨日の花見川も十分に可愛いかった。
今はほんのりとしたナチュラルメイクを施しているみたいだけど、それはそれでプラスになってるから、女性、いや花見川は凄いのだろう。
ああもう、なんか僕は花見川教の信者みたいになってるが、彼女が綺麗なのは事実だ。

それだけお洒落に気を使っているからこそ、残念なのだ。
彼女はおそらく、僕からの大事な話を愛の告白か何かと勘違いしているのだろうが、実際は血なまぐさい赤髪殺人鬼が近くにいるというなんとも落差が激しい話なのだ。
「そ、それで、大事な話って？」
いじいじと指を絡ませながら花見川は俯きがちに尋ねてきた。
そのまま告白とかした方がシチュエーション的には正しく頬を上気させる花見川を見てたらそうしてあげたいとは思うのだが、
……そうはいかないだろう。
さあ、なんて言おうか。
新たな命題は、僕には少々難しいみたいだ。

１４後悔、夕闇、ナイフ

中学生の頃、ひょんなことから女の子を泣かせ、その日一日、罪悪感がつきまとい夜眠れなくなったのを覚えている。モヤモヤとした不思議な感情が弁となって、いつもなら体外に放出されるなにかをせき止めているようだった。

数年経ち、精神的に少しは成長したハズなのに、胸のしこりはあの時と同じように僕を苦しめていた。

寝転んだベッドはいつもなら励ましの優しさで包んでくれるのだが、今日は責めるみたいにしわくちゃで、シーツが花見川の気持ちを代弁するかのように僕の背中に不快感をぶっかけていた。

女心を弄ぶ気なんてなかったが結果的にはそうなってしまった。

声に出さず、口内だけ反省を呟き寝返りをうつ。景色が変わっても罪悪感に変化はなかった。

夕暮れ時の室内は薄暗く、夏の黄昏にＢＧＭを蝉から夜の虫に引き継がれようとするその刹那。僕は一人自室でぼんやりベッドに横になっていた。眠気はない、ただ身体全体がだるかった。

目を閉じると、これで何度になるかわからない昼間の回想がぶわりと浮かんだ。

事情を説明し終えた彼女の瞳が潤んでいたのは、樒原の恐怖によるものだけではないだろう。僕が彼女に要注意を促した時、彼女は静かに頷きながら、唇をギュッと真一文に結んでいた。

「うん、わかった……」

「今日はもう外に出ない方がいいね。それとさ」

少しだけ悲しそうな表情で彼女は僕を見上げた。

「やっぱりこの問題は僕だけの手には負えないよ。君のお告げを疑うわけじゃないけど荷がかちすぎる」
「ごめんね、迷惑かけて」
「違うんだ。責めてるんじゃなくて……。その、警察に行こう。樒原が脅しをかけてきたのだってそれをおそれているからだ」
「でも、そんな事したら、その人もそっとしておいてくれないんじゃ、」
「最近警察も証言者保護に力を入れ初めたらしいし、大事にはそうそうならないよ。それに、」
目の前の小さな女の子の震える肩にそっと両手をおいた。
「そうならないように僕も努力するさ」
「ありがとう、トウちゃん」
心からの感謝というのは、感覚で理解できる。くさいセリフも言ったかいがあったというものだ。僕もなるたけ柔和な笑みを浮かべた。
「それじゃ、明日一緒に警察に行こう。付き添い人として僕も同行するよ。あっ、通り魔犯に会ったのは僕も同じか。ということは花見川といっしょで僕も証人だ」
「うん」
「ほんとは今すぐにでも行きたいけど、あいつがうろちょろしてるかもしれないからな。とりあえず明日、僕が学校から帰ったら準備して行こうか」
こんな事態でも僕はまだ学生でいたい。
花見川は僕の提案に今度は無言にコクンと頷いた。
それから下げていた顔を上げて、僕をジッと見てから恥ずかしそうに言った。
「それにしても、勘違いしておしゃれしちゃうだなんて、私、ほんとにバカだよねー、たははは」
上気させた頬をわざとらしい笑顔で塗りつぶす彼女の表情と、その乾いた笑い声は、僕の物言いを反省させるには充分だった。通り

魔犯に関してではなく、花見川に自虐させてしまった事についてだ。
夕飯の準備は任せてと、キッチンに立っている花見川に僕は心の中でもう一度謝罪を述べた。
「直接言わなきゃダメだよなぁ」
声にだして行動を促してみたものの、実際そんな勇気は起こせそうにない。ヘタレだろうとなんだろうと、過ぎた事に対する謝罪ほど言い辛いものはないし、もし言葉にしてみて自意識過剰と取られるのも、嫌だ。
……うじうじ成分を凝り固まらせるのは、このへんにしておこう。言葉に出さなきゃ伝わらない気持ちというのも確かにある。
僕は孤島になったベッドから床の上に降り立ち、外界との接続を試みた。花見川に対して決心を固め、ゆっくりと息をはく。だけど、とりあえず、
「コンビニ行こう」
昨日はなんだかんだで行かなかったし、花見川に粗品を用意したい。それについさっきもモモちゃんがアイスを食べたいとダダをこねていた。妹の機嫌取りを兄としてはやっていたい。
決して厄介事をおくりだすのではない、とここに誓いをたてておく。

お手伝いのモモちゃんとキッチンに立つ花見川二人に軽い外出先を告げ、僕は外に出た。僕の料理作りは手伝わないモモちゃんが花見川のアシスタントをなぜ務めるのか疑問に思ったが、ともかくすぐに戻るという言葉を受けとった二人は了承してくれた。花見川は少しだけ心配そうな瞳をしていたけど、僕自身が通り魔犯に直接狙われているわけでないのでそれは杞憂というやつだ。

玄関から外にでる。夏の温い風が僕の頬をべったりと撫でつけた。
夜の帳がおりはじめた夏の夜は、昼間溜め込んだ熱気をコンクリ

ートが放出するせいか、冷たさとは無縁で生暖かい空気がじっとりと絡みつく嫌な時間帯になっていた。いつもはカラッと爽やかな夜の匂いが漂っているはずなのに、今日は湿気が高かったのだろう、熱帯夜の言葉通りになっていた。

そんな空気だ。嫌な予感がしなかったわけではない。

だけど油断していたのもまた事実だ。

「よう」

背後から、昼間と同じような口調で声をかけられた。瞬間電流を流されたかのような衝撃を受け、身体がカッと熱を帯びたのを感じながらも、静かな、見せかけだけの冷静さで背後を振り返り、声の主を視認した。予想通りだが認めたくない。

ブロック塀に寄りかかった会いたくもない人物。黒い水彩に気配を溶けこませたのだろうか、忍者のごとく、ひっそりと立っている。オレンジの街灯が彼の雰囲気を不気味に演出していた。

「こんばんは」

出来るだけ平静を装い、僕は赤髪の少年に返事をする。一瞬にして熱くなった血流は、いまは逆に氷水のように冷たくなっていた。

「おーぅ、こんばんはー。久しぶりだな。つっても2、3時間くらいか」

「そうだね。急にどうしたのさ」

恐怖からのパニックを態度に出さないよう抑揚のない冷淡な口調で会話をする。

樒原はもちろんの事、僕をも包みこむ夜の黒色は間違いなく危機的状況を作り出す一要因になりうる。昼間は感じることのなかった“恐れ”という感覚がひしひしと僕に纏わりついていた。

「何か用でもある？」

警戒しているのを悟られないようにするのは勿論、逆なでしないよう慎重になりながら言葉を選ぶ。樒原は僕の言葉に呆れたような息をはき頭をポリポリ掻きながら口を開いた。

「てめぇ早くメール寄越せよ。連絡が取れねぇじゃねーか」
「ああごめん忘れてた。君のアドレスの書かれた紙は僕のズボンのポケットにいれっぱなしになってるよ」
おどける口調に樒原は小さな舌打ちをしてから続けた。
「はあぁ、やれやれ。それより花見川むくげと連絡は取れたのか？」
「あれ、別に連絡はしないでいいんじゃなかったの？花見川が帰って来たら教えろって」
設定上、花見川は今島根県にいるのだ。たしか僕が連絡を取ろうか、と訊いた時彼はきっぱりノーと答えたはずだ。
「あぁん？俺がそんな事言ったか？」「うん、確か。花見川に伝言しようか？って僕が訊いたら別にいいって」
「そうか。そういえばそうだったな。いやわりぃ。気が変わったわ。言付けといてくれねぇか？」
「それは構わないけど、……なんて？」
息のつく間もなく彼は言葉を続けた。
「赤髪の男が“早く”お前と会いたがってるって」
ああ、やっぱり花見川を心労で殺す気か、こいつ。急な心変わりは、彼女に対する脅迫の一手段なわけか。
だがここでゴネるのは不自然だ。
「わかった。伝えておく」
「やけに物わかりが良いな。ま、俺は助かるからいいけどな」
僕の返事に鳩が豆鉄砲を食らったようにキョトンとしていた樒原は、ふざけるように手首をブルブルと回した。
なんの意味があるのだろうと疑問に思ったが、彼との会話に休止符が付いたようなので当初の目的を大義名分にその場を辞することにした。
「それじゃこの辺で。用事があるんで」
「おい、待てよ」
２つ返事でＯＫしてあげたのに、その場から離れようとする僕を

樒原は呼び止めた。
　コンビニに向かっていた足を止め、冷や汗をかきながら振り向く。
「なに？」
「俺に訊きたい事があるんじゃないか？」
　なにそれ。とんだ自意識過剰じゃないか。僕は会話より早く身の安全を確保したいのだ。目の前の男は、僕と花見川のブラックリストに名前を連ねている危険なヤツだ。
「とくには。ないけど」
「そうかぁ？例えばよーぅ」
　彼はイタズラな笑みを浮かべ自分の立つ真下の地面を指差した。
「なんで俺がここにいるのか、とか」
「……」
「お前なら、そんな偶然なんてないことくらい分かってんだろ」
　確かに疑問には思っていた。なぜ僕の家の近くの塀に、よりにもよって樒原が寄りかかっているのか、と。そもそも学校にいたことも不自然だ。だけど僕は偶然ということにし深く考えないようにしていたのだ。楽観視して思考を誤魔化そうとしていたのだ。
　そこん所を樒原の口から指摘されるとは思ってもみなかった。
「結論から言うぜ」
　鼻を鳴らして樒原は続けた。
「俺はお前んチが何処にあるか知ってんだ。住所をな。ちょうど良いタイミングで外出してきたから声をかけたわけだが。…この意味がわかるか？」
「それと言うとつまり、君は」
　背筋がぞくぞくしていた。小学生の時のレクリエーションで怖い話を聞かされた時のようだ。
「ストーカー」
「はあ？」
　もちろん本気で思っているわけではない。感じた恐怖を誤魔化すための冗談だ。

「何が悲しくて野郎の事をつけ回さなくちゃなんねーんだ。どうせストーキングすんなら、可愛い女の子、花見川むくげの方にするぜ」
やったな花見川、お前通り魔犯に可愛いって誉められたぞ。
「あ、そう。君が僕の家をなんで知ってるのかは知らないけど、頼むから不法侵入だけはしないでくれ。あとプライバシーも守れ。それじゃ」
「いい加減、腹を割って話そうぜ」
コミュニケーションを求められても困、

「俺が通り魔犯だと花見川から聞かされてんだろ」
通り魔、まさかこいつの口からその言葉がでるとは。
「……」
「じゃなきゃ異常に警戒しすぎだ。いくら初対面とはいえな。そうでなくても目立つ頭してんのによぉ、厄介事は宇宙からの素粒子みたいに常に俺にまとわりついてやがる」
へらへらとぼかした言い方をしているが彼は確かに核心をついていた。それはもう、確実に。
「通り魔？なんの話をして、」
「おいおいおいおい。だから腹を割って話そうって言ってんじゃねぇかよ。とぼけんじゃねぇって。別に脅そうとしてんじゃねぇけどよ」
彼はそういうと片手をポケットに突っ込み、何かを取り出した。それをこちらに見えるようにひらりひらりと振るう。
ナイフだった。裸ではなく皮製のカバーがかかっているがカタチからしてそうだろう。
「てめぇの認識通りだ、まあ、とっくにご存知だったようだけどよー。……スーパーサイヤ人成り立てみたいだな」
彼が何を言っているのかよくわからなかったが、僕の危険信号を真っ赤に明滅し、副腎はアドレナリンを大量に分泌していた。これは、危険だ。バレている。

そして何より、目の前で楽しそうに小型ナイフを持つ彼に危険を感じた。カバーがついていても、アレは尖った刃物だ。
「樒原、君が、……通り魔犯なのか？」
「厳密に言うと違うが、まあ、世間を騒がせてるのは俺になるんだろうな。さぁ、俺はカミングアウトしたぜ、白江。そろそろ正直になろうか」
背中をブロック塀からはなし、樒原は僕の正面に立った。身長は同じくらいなのに僕を見下すようにこっちを見ている。
「花見川むくげはお前んチにいるんだろう？」
「だったら、どうする？」
昼間の学食では秘密と濁した言い方をしていたが夜になって気分が高揚でもしてるのか、別段気にした様子なく続けた。
「会わせな。会ってやつに言わなきゃいけないことがある」
「なにを」
「通り魔犯が何をしたいか、を」

湿気が高い熱帯夜は、僕の世界を黒く染め上げていく。
彼は皮のカバーがついたナイフを冗談めかした様子で軽く僕に傾けた。

１５中空、遊戯、クエスチョン

月は雲に隠れているけれど、暗澹としているというわけではなく、夜でもオレンジ色の街灯が明るく空間を照らしてくれているので鳥目でも心配はないだろう。田舎というほどでない中途半端な立地の僕の住む街は、景観を崩さないためなのか知らないが、路脇のライトは目に穏やかな橙色に統一されていた。

この道をまっすぐ行くとコンビニがぽつんとあり、ずっと先にはシャッターが壁となったアーケード街のトンネルと続くのである。

そんな道の真ん中で僕は男と二人きりだった。

「１９時を回ったか。時間としては頃合いだな」

これからどんどん人通りがすくなくなっていく。夕焼け小焼けで子供が、夕日とともに大人が家路につく。そうだとわかっていても、一気に人気がなくなるこの時間帯は、人攫いの妖怪でも出現したのではないかと錯覚してしまうほど静かだった。

「なにかあるの？」

「いんや、なにも。ただ俺の習性か知らんが、暗くなればなるほどテンションがあがるんだわ」

「夜行性か。ハムスターみたいだね」

「初めて言われたぜ。んなこと」

今日会ったばかりの男が僕の正面に立っていた。彼は常に余裕のある態度で僕の機嫌をとりつつ会話を進めてくる。彼が正常の思考を持つ人物だったなら、クラスの人気者にでもなっていただろう。

だけどそれはありえないのだ。

「白江藤吾、ゲームをしないか？」

彼は、僕が名乗らなかった下の名前と供にオレンジ色に陰影をぼかせ気心のしれた親友のように切り出した。なぜ僕の名前を知っている、なんてこと聞く必要もないだろう、住所を知っていたのだか

ら似たような意味だ。
「ゲーム？」
それつけても、提案に軽々しく応じるわけにはいかない。樒原は殺人者なのだから。
「なぁに、ただの会話のおつまみ程度に思ってくれりゃそれでいい。ようはキャッチボールみたいなもんだ」
「そんなことする義理はないね」
「はっ。釣れないこと言うじゃねぇか。俺はただ単にお前に願いを叶えてほしいだけだぜ」
カバーのついたナイフの腹で自身の頬をぺしぺしと叩いた。
「それとそのゲームになんの関係があるのさ」
「ゲームには罰ゲームが必要だろ？だから負けたらどんな質問にも答える、ってのはどうだ」
まるでそうなる事を待っていたかのように溌剌とした口調だ。
時間として少し前、僕は彼の願いを反故した。樒原が花見川と連絡が取りたいと言っていて、やっぱり嫌だとそれを拒否したのだ。もう隠す必要はない。つまり彼の機嫌をとる必要もないからだ。
「友達とやってくれ。君と僕はまだ出会ってトータル2時間も経っていない」
「大切なのは時間じゃなくて心の結びつきだぜ、白江藤吾。女の子に言いたいセリフだがな」
ひょうきん者というのは逆に言えば、飄々としていてつかみ所がない者の事をいうのだろう。どんな舞台を軽々しくこなすサーカスの芸人より、コメディのピエロの方が身軽そうに見えるのは僕だけなのだろうか、あのでっぷり腹が無くなった時ピエロは神速を記録するに違いない。今度から樒原と書いてペニー・ワイズと読もう。
「悪いが君と僕との間には万里の長城レベルの外壁がそびえ立っている」
彼の正体を知っていると知られた以上、無駄に警戒を隠す必要はない。僕が3人を殺したシリアルキラー相手にこれだけ強気になれ

るのは人通りが少しはあるこの時だけである。もう一時間もすれば
ここは完全にゴーストタウンと化す。その前に彼から離れなくては。
「つまり俺はお前にとって異民族ということか」
「人を殺して平然としているようなやつを僕は自分と同じ人種だと
認めないしね」
「いろんな世界の事情を知るのは国際社会において必要なことだぜ」
「……今はそんな話はしてないんだよ」
なんでよりにもよって樒原とグローバルスタンダードについて語
りあわなきゃいけないのだ。一番の規格外に開国を責められる言わ
れはない。
「おっとそうだったな。今はゲームの話だ」
「だからやらないって、」
「いいのか？お前が勝てばどんな質問にも答えつやるぜ」
仮にやるとして僕は彼に聞くべきことはあるのだろうか。
「……」
時間にしては幾分もない一瞬の逡巡を樒原は見破ったらしい。こ
こぞとばかりに声音を大きくした。
「どんな質問にも答えてやる。連続殺人犯の話が聞けるなんて滅多
にないぜ」
この先一生ないだろう。ないという事を祈っている。
「…しつこいな」
「一度くらいついたら離れらんねーんだ。ひっつき虫のように」
オナモミとかセンダングサのことを言っているのだろうか。確か
に厄介ではあるが取ろうと思えばいつでもとれるわ。
「わかったよ、やればいいんだろ」
「よっしゃ。物わかりが良いじゃねぇか」
樒原はまたくっしゃりと頬をほころばせた。
「ルールは？」
「こういうのはどうだ。今からこのナイフをお互いに回転をかけな
がらキャッチボールみたく投げ合いしていく。んで落としたり刃の

部分を掴んだら負け。罰執行、という単純ルール」
「シンプルでわかりやすいね」
「だろ？決まりだな。ああそう、ナイフにはもちろんカバーをかけたままでやるから安心してくれ。俺はそこまでクレイジーじゃない」
ナイフを高くかかげ、薄く笑った。その優雅とも取れる微笑に充分狂気を感じたが僕は口を開かずただ見ているのが限界だった。椦原はそれからゆっくり後ろに歩き僕と軽く距離をとった。
「暗くて見えない、なんてことはなさそうだな。趣味わりぃ照明だが、お互いの顔ははっきりわかる」
「夜にキャッチボールなんて初めてだよ」
「ボールじゃねぇよ。キャッチ、ナイフ？まあとにかく曲芸師のジャグリングみたいにやりゃいいんだ」
椦原は言い切る前にナイフを緩やかな縦回転をかけこちらに放り投げていた。驚く間もなく目の前に来たそれに手を伸ばし握りしめる。ほぼ条件反射だ。僕の右手は運良くナイフの柄を握っていた。
ほっと安堵し先ほどより小さくなった男に声をあらげた。
「投げる前に何か言ってよ。急にはズルいよ」
「わりぃわりぃ。でもキャッチできたんだからいいじゃないか。それより、ほれっ。ゲームを続けようぜ」
椦原は自身の胸を叩きながら、こっちを挑戦的な目つきで見ている。
そのにやけ面をかき消すように僕はナイフを彼に放った。
「白江は俺に勝ったらどんな質問をするつもりなんだ？」
投げナイフだがダーツのようにではなく、相手が取れるよう回転をかけ投げるのがこのゲームの暗黙のルールらしい。初めてそんなに経たないけどそれくらいわかる。
そして、肝がナイフの柄を握らなくてはいけないという事。回転がかかっているナイフの刃を握らないようにするのはかなり厳しく、お互いがパフォーマーでもないナイフの回転は未知数である。かなりの動体視力がなくては飛んでいるナイフの柄を握るという行為は

運の世界にはいるだろう。
　それでもなんてことはないよというようにケロッとした顔で樒原は僕が投げたナイフの柄の部分をキャッチすると、悠々口を動かしながらこちらに投げ返してきた。
「君はなぜ人を殺すのか、とか…」
　ナイフをキャッチする。落とさなかったのは、幸いだが、
「質問しようと思ってたんだけど、どうやら僕の負けみたいだね」
　僕の手のひらはカバーのついた刃の部分を包み込んでいた。
「よぅーし。まずは俺の勝ちみたいだな」
「そうなるね」
「んじゃ、質問させてもらうぜ」
　そうなることが規定事項だったのだろう。樒原はさきほどと全く同じ調子で僕に言葉を吐き出した。
「花見川むくげは今どこにいるんだ？」
「……」
　嘘をつくのは簡単だが、どうせバレている。この質問はただ単に確認の意味なのだろう。そして、ここまでこの問いにこだわるという事は、樒原はまだこの街で花見川と会っていないということになる。つまり過去花見川は危険に合っておらず、これから先、外出を控える彼女は滅多なことじゃ危険に合わないのだ。
「さぁ。僕の家でもんじゃ焼きでも食ってんじゃないかなぁ」
　僕が彼女居場所をバラさない限り安全なのだが、もうそんな次元の話ではない。樒原はとう気づいているのだから、これから先はいかにしてこの男を花見川に近づけないかが鍵となる。
　明日までの我慢だ。
　明日になれば警察に行ってこの赤髪野郎を捕縛してもらえるのだから、せいぜいウチにいる花見川に夢中にでもなっているがいい。
「くくっ、もんじゃ焼きねぇ。あいつそれが好きなのか？」
「おっと質問はここまでだ。その質問に答えるにはもう一度僕を負かさなくちゃいけない」

「くはは、ケチくせぇ。大体お前の答えだってぞんざいじゃねぇか。もんじゃ焼きの件はいらねぇだろうが」
「僕はあくまで答えられる範囲でしか返答してないからね」
投げたナイフはいとも容易くキャッチされ、苦笑いのまま投げ返される。
右手のこつんと当たったナイフは、指をハエトリ草みたいに閉じる前に手のひらに弾かれ地面にコトンと落ちていった。僕はナイフを取り損じたのだ。2連敗。
「はっ。それじゃ第二の質問だな」
「花見川がもんじゃ焼きを好きかどうか、だっけ」
「バカ野郎。そっちじゃねぇ。俺がする質問は」
地面に転がったナイフを前屈みで拾いあげ親切に元の体勢になるのを待ってから樒原は言葉を続けた。

「花見川むくげは超能力者か否か」

「……ッ」
まさか、
「知ってたら教えてくれ。ただの偶然ならそういうことにするが、あいつがあの時あの場所で俺の犯行を見ていたことは不自然なんだ」
まさかだろっ！？
「は、花見川が、超能力者？何意味わからないことといってるんだ」
僕の答えに不気味な含み笑いをすると樒原は少しだけ声のトーンを落として続けた。
「信じらんねぇかも知れねーが、この世には確かに科学じゃ証明できねー神秘的力を持つ人間が存在すんのよ」
「オカルト雑誌の編集部とかとかけあってくれ。あいにく僕はＳＦに興味ない」
「花見川がどんな力を持ってるかは別に構わん。ただ超能力者かそうでないかだけでいい、知ってることを正直に教えてくれ。これは

そういうゲームだろ？」
　ルール上ではそうかもしれないが所詮は口約束の世界だ。いくらでも嘘はつける。
　この場合の問題は僕に対する尋問ではなく、その内容、どうして樒原がその事を知っているか、ということだ。
　花見川が自らの超人的能力、予知夢をおおっぴらに公表するとは思えないし、それを樒原が嗅ぎつけ信じるというのも可笑しな話だ。中学生の妄言として取り合わないのが普通である。僕はああいう状況だからすんなり信用したが、目の前の赤髪が噂をそうやすやすと信じるとは思いがたい。
　そして気になるのは先ほどの言いぐさ。『花見川が犯行時に現れるはずがない』、といういかにも決めつけた物言い。この男はなにを考えているんだ。
「そんなわけないだろう。仮にそうだとしても、僕は知らない」
　とにもかくにも自らの情報を全て吐露するのは賢い行為とはいえない。ポーカーなんかのカードゲームで手札をオープンして闘うのはバカか天才のどちらかである。僕は後者ではないので、全てを知らぬ存ぜぬで貫き通すことにした。
「そうか。ま、普通は能力者でも隠すだろ。晒されるのは勘弁してほしいからな」
「突然なにバカな事を言い出すんだ……。超能力って念動力やテレポートとかさすんだったら、それこそ非現実的だぞ。そんなこと言いだすなんて意外と夢見がちなんだな」
「ちげぇよバーカ」
「んじゃ、なんなのさ？……あ、ゲームのルール上負けてもいないのに質問には答えたくないか」
「はっ、俺はてめぇみたいにケチじゃねぇ。そんくらいサービスで答えてやるよ」
　焚き付けるセリフが好を奏したらしく、樒原はどことなく自信に満ち溢れた調子で僕に短く告げた。

「俺も超能力者なんだ」
「は？」
ゲームに勝ってもいないのに質問した報いなのだろうか、返答は限り無く理解不明な摩訶不思議な単語だった。
２１世紀の時世で超能力、ねぇ……。いやまぁ花見川も事実として夢のお告げをもっているけど、僕の周りが特殊な人間に溢れているとは考え辛い、だろ、普通。

１６質問、自殺、超能力

超能力と聞いて真っ先に思い浮かべるのがスプーン曲げだ。２日前の僕なら、そうだったのだが、今はスプーンではなくある少女だった。

人間は筋肉を使い物体を動かす。筋肉を使わず現象を発生させたらそれはもう立派な超能力だ。触れずに物を動かしたらサイコキネシスという特殊能力だし、声帯を使わず思いを伝えたらテレパシーだ。

そりゃ人間には秘められた力があるかもしれないけど、僕の生きてる世界にそんな非現実はこれ以上必要ない。僕の中でのＳＦは『サイエンスフィクション』ではなく『少し不思議』であり、そこのところは花見川で満タンになっている。

「超能力、ねぇ」

「疑ってんな。だから言いたくなかったんだ」

べらべら立て板に水で勝手に喋ったのはそっちの方だ。

僕が疑念に満ちた目をしていることに樒原は気が付いているらしい。

「ちっ。心外だ」

きれいに染め上がった髪の毛を手櫛でいじり、唇を尖らせた。苛立ちを表に出して僕に反省を促しているようだが、その行為の一つ一つが照れ隠しにしか見えなかった。

「それでどんな能力なの？」

聞いてほしそうなので、舌を動かしてみた。

「あー。俺に訊いてんの？」

「僕の前には君しかいないだろ」

にやりと笑ってから彼は続けた。

「能力っていうと、俺の“チカラ”がどんなのか知りたいんだな？」

うわぁ、この人わざわざ強調して訊いてきたよ。面倒くせぇ。

「そうだね」
「くっくっく、聞いて驚くなよ」
スッと息を吸ってから、彼は続けた。
「時間を止められるんだ」
「はぁ？」
よりにもよって凄まじい能力者だった。予知夢が視れるとか、次元が違う。
「ただし、俺も動けないけど」
数秒で付け加えられた補足説明は、なんとも言えないものだった。
「……意味あるの？それ？」
「ない。つうか嘘だ」
「嘘かよ」
時間を無駄にしたよ。
樒原の意味不明の嘘で場が和む、なんてことはなく、変わりに感じたのは静かな苛立ちだった。
「結局なんなのさ」
「なにってなにが」
「君は超能力者なんだろ？」
「いえす。物心ついた時から俺には人外の能力が備わっていてな」
「予知とか透視とかサイコメトリー、テレポート、千里眼。樒原のはどのタイプに分類されるんだ？」
わざとらしい含み笑いをしてから樒原は、白い歯を見せながら僕に言った。
「バトル物の漫画かなんか読んでてよ。思ったことないか？なんで敵はベラベラと自らの能力について解説してんだよ、と」
質問の答えになっていない。僕の苛立ちを助長するだけだった。
「あまり漫画を読まないからわからないな」
「漫画を読まない、だぁー？んじゃ何読んで育ったんだよ」
「別に読書しなくても生きていけるだろ」
新聞や専門書などは読めるのだがストーリーのついた小説や漫画

は小さい頃から目を通すことが苦手だった。強制されれば読めないことないが、自ら進んで手を伸ばすなんてことはしたことがない。
「げぇー、信じられない野郎だ。てめぇどこの異星人だよ。日本人じゃねぇー」
「人より読む量が少ないだけで、読んだことがないってわけじゃないよ」
「うるせぇ。国語の教科書でも読んでろ」
なんか知らないが樒原から僕への好感度が今のでガタ落ちしたらしい。この人、見た目に似合わずオタクなのだろうか。
「たくっ、話を続けるぜ。ともかく俺が言いたいのは、敵に能力を明かせばパワーアップするってわけでもねぇのに、フィクションじゃおおっぴらに自分の手の平を見せすぎだってわけだ。マジシャンがマジックのタネを明かしてるようなもんだぞ。致命的だ」
樒原は演説するみたいに両手を広げ、表情をうつろにしていたが、言い終わるとコメントを求めるように僕をチラリと見た。
「だから？」
「そう簡単に手の内見せるか。俺は大々的に能力を明かさないって誓ってんだ」
「でも君と僕は敵対関係じゃないし、なにより僕はなんのチカラも持たない一般人だ。もともとのリングが違う」
口から出任せ、とまではいかないが、僕は全体的に目の前の男を信用しているわけではなかった。人間性自体は目の敵にするほどではないだろうが、こいつの捉えところのない煙のような不気味な雰囲気は好きになれない。
「協力関係でもねぇーだろ。さっきから話を聞いてると、お前はやけに花見川にこだわりを持っている気がする」
「そりゃまんざら知らない人ではないからね」
助けを求められて、無碍に扱うなんてこと出来るわけない。
「出会って数日もしてねぇだろ。それなのに不自然だ。俺が何したか知っているにも関わらず対峙して逃げ出さない、ってのがな。普

通通り魔犯を目の前にして逃げ出さない奴はいないぜ」
「今だって駆け出したいさ。だけど足が震えて動かないんだ」
「パチこいてんじゃねぇぞ。元気いっぱい俺に向かって来てんじゃねぇか。正義のヒーローにでもなったつもりか」
「そんな大それた者、憧れを抱いたこともない」
「それならばなぜ花見川むくげに肩入れをする。ほぼ無関係の人間なのに」
　意味なんて……。不自然を指摘されようが、僕の性格がこうなのだから、としか言いようがない。
「花見川に惚れでもしたか？顔は可愛いかったからな。あの子」
「そういう事にでもしといてくれ。僕は花見川を愛してるんだ」
「かっ、白々しい」
　湿った空気に汗の玉が頬を伝って顎からアスファルトに落ちた。
　何を緊張しているんだ僕は。樒原が何を言おうと、深読みしすぎだと笑ってやればいい。
「それより、僕の質問に答えたらどうだ？樒原」
「質問？ああ、俺の能力についてか。だからさっき言っただろ。俺はペラペラ手の内語る雑魚じゃねぇんだ」
　右手のナイフが空を切った。いや、錯覚だ。思ったより勢いがついていたからそう思っただけだ。
「んぐッ」
　僕の手から放たれたナイフは樒原のわき腹にあたり、地面に2、3回バウンドして転がった。
　回転もなしに一直線に暗闇を引き裂いたナイフの刃にはもちろんカバーがかかったままだったが、投げた感覚は今も手に鈍く残留していた。
「っってぇ！なにしやがる！？」
　初速を加えた僕の右手と、ナイフ自体の加速度は樒原のわき腹にダメージを与えたらしかった。当たり前だ。物が当たれば痛い。
「それ」

わかっていたが、僕は投げた。そして今、涼しい顔で地面に転がったナイフを指差している。
「取れなかったから僕の勝ちだね」
「……あのスピードは無効だろ」
「次からは気をつける、そういうことにしよう。たった今、そう決まった。だけどついさっきまでルールに含まれてなかったから、質問には答えてくれよ。そういうゲームだろ？」
「はっ。屁理屈だな」
鼻で笑いつつも樒原は楽しそうだ。なんだこの人、マゾが？
「お前が俺を無理やり説き伏せようとしてるのはわかったがてめぇの言い分は筋ってもんが通ってねぇ」
「君が常識をわきまえた人間だったらそう思えばいい」
「おーおー、言うようになったじゃねぇか。てめぇ自分の状況わかってんのか？ちょっと周りを見渡してみろよ」
人通りはゼロになっていた。道の真ん中でオレンジ色の街灯に照らされる僕と樒原以外に人はいない。
寂しい、と思う前に、目の前の彼のプロフィール欄を思い出し総毛立つ。通り魔犯の絶好のシチュエーションだ。
「二人きりだ」
「その通り。それを覚悟して俺をキレさせようってんなら、おめーは思ったより肝が座った野郎だ」
「ただ単に忘れてただけさ。逆上したのは僕の方で、猪突猛進のバカなんだ」
「くくっ。そういう過激なのは好きだ」
ニヒルな笑いを浮かべ樒原は言った。
「いけすかねぇ野郎かと思ってたらなかなかおもしれぇこと言うじゃねぇか。そのユーモアに免じて特別サービスで俺の負けにしといてやるよ」
なんだか知らないが勝った。喜びの万歳三唱を心の中でするとしよう。

「答えるのはさっきのでいいんだな？」
「ああ」
どうせハッタリかなにかだろ。そうは思うが彼がどんな事を考えているかは興味がある。
樒原は僕が頷いてからタメるなんてことせずにすぐに言葉を続けた。
「人が死ぬのがわかる」
超能力者は公表したがらない、というのは彼の持論だが。
「え？」
なんとも地味な能力だった。
「俺にはもうすぐ死ぬ人が分かるんだ。その人の周りに負のオーラっていうのが出てて。それでなんとなくヤバい奴がわかるのよ」
猫など人の気配に敏感な生物が、寿命わずかの人を察知できると聞いたことがある。それと同じなのだろうか。
「なかなか興味深い力だけど、実生活では使いどころが無さそうだね。まさか死にかけの人にあなたもうすぐ死にますよ、なんて言えるはずないもんね」
「そーでもねぇーよ」
僕の言葉を遮る樒原は、少しだけ悲哀に満ちた瞳でなにかを憂うようにボソりと続けた。
「お前は日本の自殺率がどれくらいか知ってるか？」
「自殺率？」
急の発言で面をくらうが、ぽっと解答が浮かんだ。たしか
「3万人前後、だった気がする。ただし警察で自殺だと断定される必要があるから実際はもっと多いだろうね。解剖医も不足がちだから自殺と判断されないケースもあるんじゃない？」
「よくわからんが、日本は世界的に見て自殺大国らしい」
そんな大国になったところで嬉しくもなんともない。なんか話がずれて来ている気がする。
日本人はメンタルが弱いのかなんなのか知らないが、自殺率が他

国から見てもけっこう高いのは確かであった。計算してみると年間交通事故で亡くなる人な五倍以上もが、自ら命をたつのだそうである。

自殺の理由として日本では一番に経済があげられる。自殺率では中高年のサラリーマン男性が一番多く、それが顕著に現れている。失業者と自殺率は相関関係にあるのだ。欧米では自殺率は老い先が短くなり生きる希望を失った老人のほうが高いのに、日本の閉塞された状況がありありとデータに記されている。

それはそうと、樒原は突然なにを言い出したのだろうか。

短い付き合いだが彼は愛国心溢れる若者でなく自分が楽しければそれでいい、という自由人っぽい性格だとおもっていたのだが。

認識不足か？

「突然どうしたんだ。君の能力についての説明じゃなかったけ？」

たしか今はその時間のはずだ。反則めいた手法で勝利をもぎ取った僕が言うのだから間違いない。

「ああ、だから能力の説明さ」

彼はそこで初めて気がついたみたいに僕が放り投げたままにしてアスファルトに転がったままだったナイフを拾おうと前屈みになった。

「俺は人がいつ死ぬかわかると言ったが、死に方によって見方がかわるんだ」

「見方？」

「ああ、もうすぐ死ぬ、っていう人間にはなんか、こう、モアモアと全身から煙が上がって見えるんだよ。俺の目には」

抽象的だが、言いたいことはわかった。聞けば聞くほど不思議な能力である。欲しいとは思わないけど。

「それに死にかけの人間しか煙が立っているわけでなく。病気で悪い箇所があればそこからも上がって見えるから意外と便利なんだぜ」

「定期検診いらずだね」

「ん、あー。そーだな」

樒原は初めて考えついたみたいに照れた顔でポリポリ頭をかいた。
「まっ、病死するやつはそれで大体わかるんだわ」
知ったところでどうすればいいんだよ、と僕は思った。
「ただ俺にも見えないもんがあってな。交通事故とか突発的な怪我の死亡事項はわかんねーんだわ」
彼の能力は未来予知、ではなく、透視にカテゴリーされるわけだ。
「それ以外はわかるんだ。たとえば憂鬱な気分とか気が塞ぎこんでる人の煙とかな。そして、」
いままでのは全て前フリだったらしい。彼はようやく本題をきりだした。
「その煙が激しくなった自殺する人なんかもな」
自殺…、さっきも彼から、きいた。タイミングがよくわからなかったけど、今ならわかる。
「……樒原、お前まさか」
「ああ」
「俺は通り魔じゃねぇ。自殺を手伝ってやってんだ」
それを聞いて僕はどうしたらいいのだろう。

17虚構、恋愛、敵前逃亡

たとえ自殺の意思を持つものがいようと故意に便宜を与えて死に至らしめることは、自殺幇助罪という立派な犯罪だ。
もっともこの法律が適応されるのは、樒原の言い分を全て信じた場合のみである。
「ニュースで取り上げられてる3人ともが全て、元自殺志願者だ。他にも何人かいるがこちらは目立ちたくないということでひっそりやらせてもらった」
「俗世から救ってあげたとでもいうのか」
「いや、そういうわけじゃねー。ただの通り魔犯扱いされるのが気にくわなかっただけだ」
「僕がもし刑事だったら、」
超能力者の通り魔犯の本当の目的が、実は人助けだったなんて認めないし、どんな理由があろうと人を傷つけることは罪だと僕は考えている。
「続きは署で聞こう、かな」
「俺の言い分が世間じゃ通用しないって事くらいわかってら。ただ俺だって好きでこんな事やってんじゃねぇんだよ」
「嫌なら止めればいいじゃないか」
人助けと称して自らの破壊衝動を殺傷で鎮めようとするのは間違いなく趣味の領域だ。自己中心的なエゴイズムに反吐がでる。
「そういうわけにはいかないから困る」
心底疲れきったサラリーマンみたいに深い溜め息をはき樒原は続けた。こいつが自殺志願者みたいなんだが。
「どういうことさ」
「あ、いや…。……仕事でやってんだよ」
「仕事？え、ビジネス？」
「詳しくは言えないが、そういう仕事が世の中にはあるんだ。面倒

くせぇことにな。殺される側だって自殺と断定されると保険金が貰えなくなったり減額されたりと他殺と判断されることを望んでる連中だっているんだ」
「裏の世界の事情を僕の耳にいれないでくれ。後日スキンヘッドの怖いおじさん達が口封じに来る、なんてことは勘弁してほしいんだが」
「安心しろよ。今回は殺しが目的じゃねぇから」
先ほどまでの憂鬱そうな雰囲気を気怠さと退屈に変化させ、欠伸を噛み締める表情のまま彼は言った。
「花見川を仲間に引き入れに来たんだ」
「はぁ？」
「あー。保護者でもないお前にそんな嫌そうな顔されても困るんだが」
そんな四方山話を聞いてこんな顔にならないほうが、おかしいだろう。何を曲がり間違えば、あんな幼気な女の子を殺人すら請負う危険なキャリアウーマンに仕立てあげようと思うのか。お茶汲み係募集中なら秘書検とった格闘技経験者でも採用してろ。
「まぁ、ともかくだ。こっちに害意はないからよ。素直に花見川と話させてくれ」
「なんで花見川をお宅の仲間にしようとしてんだ？彼女フットワークは軽そうだけど、大分非力だよ」
「あー、っとな。……言ってもいいのかな、これ。まぁ、いいや面倒くせー」
近頃の消極的な男子、というのを表すかのように樒原は教えてくれた。背負わない責任、というより全部ぶっちぎってる感じ。
「異能集団なんだわ」
くらくらしてきた。
彼の突拍子もない陳腐な発言と余りの展開に頭が回らなくなってきたのだ。なんだその男子中学生が憧れそうなフレーズ。
「俺が所属するとこがな、…こう、その、人にはない、と、特殊能

力で色んなことを請け負う何でも屋、みたいな感じなんだわ。仕事の訓練は受けさせられるがよ」
珍しく恥ずかしそうに樒原は言った。ミステリアスな雰囲気など微塵もない。ヒーローショウの舞台裏を目撃した気分だ。
「その異能集団に花見川を加えたいってか」
「ああ。本当に花見川が超能力者だったらな。構成員の中には無能力者のやつもいるが、超能力だけは才能がいるからな。滅多にいないんだ。その分、能力者だったら一発合格だ」
「まて、そこが気になってたんだ。なんで花見川を超能力者だと言い切る。ただ偶然君の犯罪を目撃しただけだろう」
あくまで花見川が実際に特殊な力である“夢”を見れることは、秘密である。
「ああ、そんなことか。簡単だ」
決められたデータだけを口にするロボットのように淡々と彼は続けた。
「俺たちの仲間に、空間を支配できる吸血鬼さんがいてな。そいつ曰わく指定した場所に誰も近づけなくさせる能力を持ってるんだと」
色々と突っ込みどころが出てきたが今は我慢だ。
「君が犯行中はその能力でカバーしてるってわけか」
「そういうこと。流石に現行犯逮捕は言い逃れできねぇ。そんな能力発現中に学生の女の子が入ってきたんだ？なんかしら疑うだろ？」
「飛躍させすぎだ。偶然か吸血鬼さんが嘘をついてるんだ」
そもそもヴァンパイアの存在自体が胡散臭いのによくもまあそんな発言信じたもんだ。樒原と愉快な仲間たちは馬鹿正直というより馬鹿なのか。
「いやアイツは嘘がつけないやつだ。それで聞いてみたら能力を覆すのは能力しかない、っていう理屈らしい。よって花見川むくげは超能力者だと決定付けて仲間に引き入れようとしているわけだ」
「馬鹿らしい」
あながちその理論が間違いじゃないから恐ろしい。花見川むくげ

は確かに超能力者である。前日の夜に的中率１００％の夢占いができるという、超能力。
「そういうな。俺だって周りにせっつかれて嫌々出てきたんだ。吸血鬼のほうが適任だと思うんだかなぁ」
吸血鬼さんの話はやめてくれ。興味がないわけではないが、目眩がしてくる。
「まあ落ちてた鞄に情報がいっぱい入ってたから割り出すのは簡単だったんだが、書いてあった住所に行ったら家が煤だらけになって立入禁止になってんのには戸惑ったなぁ」
樒原は懐かしそうにその後いかにして花見川の足跡を辿ったかを語りだしたが、僕の耳には溢れだした疑問が栓をしていた。
「待て、どういう事だ」
「あ？何が？」
「火事は君達が起こしたんじゃないのか？」
おかしな話になっていた。
樒原も超能力者だというのはこの際どうでもいい、問題は花見川が我が家に転がりこむ原因となった火事の方である。
「違ぇよ。なんで仲間にしようとしてる奴を焼死させようとしなきゃならねぇんだ」
樒原はその質問を受けること事態が理解不能という感じでキョトンとしている。完全に信じるわけではないが嘘はついてなさそうだ。だとしたら、
嫌な考えが頭をよぎった。
嘘をついているのは、花見川むくげ？
なぜ、どうして。殺人者の魔手から逃れようと自暴自棄になったのか？それとも、他に何か理由があるのか？はたまたただの偶然か？だが花見川は火事にあったのは確かだ。
わからない、わからない事が多すぎで何もかもあやふやにしたい気分だ。
「どうした、白江？急に黙ってよぉ。俺が独り言の痛いヤツみたい

になるじゃねぇか」
「ああ、ごめん。なんでもないんだ」
あとで花見川に尋ねてみよう。真相はあかされなくても反応は見られるはずだ。
「それはそうとを殺しだなんてなんでも有りだね。ニュースにまでなって話題性高めて何がしたいんだか。僕には理解できない」
思考を軽いアップ代わりに下らない世間話をするように切り出した。
「してくれなくて結構。社会には荒波があんだわ」
少なくとも一般社会には不適合である樒原には言われたくない一言である。
「あ、わかった。世間を大いに盛り上げて、会社のブランド性を高めようとしてるとか。前に流行った通り魔殺人、あれウチの犯行ですよー、って言って依頼を増やしたいとか」
僕の当てずっぽうの発言に樒原は顔を真っ青に無言になっている。複雑な問題をごまかすための軽いジョークに空気は一気に重く沈みこんでいる。照明は橙色なのに、暗い。
「……おい、まさかだろ？」
「……」
「いや、ただの冗談だよ。今の」
樒原は親に隠していた答案が発見された子供みたいに続けた。
「正式な依頼じゃねぇんだ。街で明日死にそうなやつに話かけて、はした金で殺してやるだけ。当然断わられる場合もあるが、全力で圧力かけて警察に行かないようにすんだわ。残された家族を殺す、みたいにな」
「……」
「依頼が成立したら、あとは殺してやるだけ。俺は小さい頃から訓練受けてるから苦しまずに逝かせてやれるしな。そんでもって遺体が見つかればニュースに取り上げられて、正式な依頼も増えるって寸法よ」

「なんで僕に教える？」
　樒原は黙った。
「まさか冥土の土産、ってわけじゃないよな？」
「スキンヘッドの怖いおっさんが嫌なら俺が代わりをつとめてやろうか？」
「……勘弁してくれ」
　帰ったら即刻荷造りだ。それから置き手紙を用意しなくては。文面は、兄さんは旅に出ます。どうしたら僕は助かるか花見川の夢のお告げに頼るのも手かもしれない。
「冗談だ」
「ほんとにほんとだよね？心臓に悪いんだけど」
「はは、まあ勘がいいのは考えようだな。俺以外なら洒落になんなかったかもしれん」
　樒原は右手のナイフをポケットにしまってからゆっくりと僕の方を向き直した。
「それで花見川むくげと会わせてくれる気になったか？あんまりイライラさせると不法侵入だって考えちゃうぜ」
「花見川は超能力なんてもってない普通の中学生だ。会う必要もないだろ」
「中学……？あ、いや能力を持ってるか持ってないかはこっちが判断することだ。お前が決めつけることじゃない」
　ナイフを片付ける際に突っ込んだ右手をポケットから出さないまま樒原はこっちを三白眼で睨みつけている。
「逆に聞くよ。どうしたら花見川を見逃してくれる？」
「ああん？」
　不良の知り合いはいないけどドラマなんかでよく聞くトーンで樒原は喉をならした。
「なんだよテメー、花見川のナイト様きどりか？」
　残念、正解は救世主だ。
「こっちは花見川むくげを傷つけようとはしてねぇてのに。だから

よぉー、会って話をして無能力者だと判断すりゃもう二度と手をださねぇて」
「どうやって判断するんだ？まさか君には人の死がわかる上、嘘を見破れる力があるとか」
だとしたら厄介だ。花見川はたしかに超能力者なのだから。
「俺は持ってないが仲間にそういう力を持った人がいる。そいつと会わせるための仲介役が俺ってわけだ」
今まで樒原カンパニー（仮）の愉快な仲間たちの明かされた超人的能力は、1死にかけの人がわかる。2特定の場所に人を近づけさせなくさせる。3嘘を見破る。なんだかどれも地味だった。少年漫画じゃ全部ボツをくらう力だ。
「そんなことしなくても花見川は超能力者じゃないのにね」
「だから普通持っててても不気味がられるから隠すもんなんだよ。花見川むくげは今限りなく黒にちかい灰色なんだぜ、俺たちの中じゃ」
僕は心の中で溜め息をついた。花見川が厄介事を運んできたと糾弾する気にもなれない無力感だ。
「じゃあ質問を変えるよ。どうしたら君は花見川と会おうとしなくなる？」
僕の質問に樒原は顔を明るくさせた。
「やべぇ。ナイト様だ。っぷ。恋だな若人！」
「真面目に答えてくれ」
「くくっ。そうだなぁ。俺はスッポンのように一度くらいついたら取れない男だからな」
雷鳴っても離れないぜ、と下品な笑いを織り交ぜてから彼は続けた。
「ああ、こういうのはどうだ？」
「なに？」
「お前が一度でも俺を負かすことが出来たら諦めてやるよ」
「負かすって何で？」
「喧嘩」

短い二文字が鼓膜を揺らす。歯にそのセリフがまだ残ったままだったらしく樒原はさらに続けた。
「まあもっともひ弱なおめぇが俺に勝てるとは思えないがな」
ギャハハハと不愉快な笑い声を夏の夜に轟かせたが、僕たち二人の世界には人気がない上民家もないので苦情の心配がなかった。
「わからないよ」
からかわれているが分かってはいたが、流石にカチンと来たので反論が勝手に口から出ていた。
「ほう、んじゃ今やってみるか？」
「……」
樒原はわかりやすいファイティングポーズを取った。ニヤニヤしながら絶対に負けるわけないと決めつけた嫌な表情だ。
「僕は著しく気分を害した。帰る」
そう宣言し、回れ右。
これは戦略的撤退である。
後ろから不快な笑い声が響いているが相手にして、血を流すより、悔しさを溜め込んだほうが幾らかマシだ。
そう思って足を動かすのだけど、泥の中みたいに足取りは重かった。
明日の朝、本屋で格闘技の本でも買おう。一朝一夕で身につくものではないとわかっていても樒原の鼻をあかすことをしてみたい。

18安心、展開、お守り

色々なことが起こりすぎて未だに混乱したままである。玄関の扉を閉め泥のついたスニーカーからかかとを解放した時、音で無言の帰宅を察知したらしい花見川が明るい笑顔でひょっこりと出迎えてくれた。

「おかえりぃ。トウちゃん」

優しさ溢れる声音に、無事帰ってこれたと張りつめていた糸がそっと解かれた感じがした。

「ただいま」

「コンビニ行くのに随分と時間かかったねー。もう料理できてるよっ！餃子！」

「餃子か。好物だよ」

「うんっ！桃里ちゃんも好きだって言うからコレにしたんだぁ。それにしてもトウちゃん、汗だくだね」

「ん、ああ。外がすごい蒸したんだ。冷房を入れてくれないか、花見川。今日は寝苦しくなりそうだよ」

僕に汗をかかせた犯人、樒原との会話を彼女に教えるのはまた後でいい。ご飯を食べて、気分をいくらか落ちつけてからだ。

「うん、わかった。あれ？そういえばトウちゃん、」

靴を脱ぎかがめていた腰を戻した僕にリビング前の扉にいる花見川は言った。

「コンビニに行って来たのに、手ぶら？」

「見て回ったけど欲しいのが特になかったんだ」

「ふぅん、そっかー。桃里ちゃんアイス楽しみにしてたから謝っといたほうがいいよ」

「ああ、そうだったね。忘れてたよ」

ピノ買ってきてって頼まれたんだった。まあモモちゃんなら許し

てくれるだろう。
「それじゃ早くいただきますしましょ！トウちゃんの帰りを待ってたんだからね。お腹ペコペコだよ」
「ああゴメンゴメン。今いくよ」
リビングの戸をあけて、芳しい香りただようニンニクの園に足を踏み入れた。

花見川特製餃子を食べ終え、妹のモモちゅんがお風呂に入っているのでリビングには僕と花見川の二人きりになっていた。一番風呂の花見川はソファーに座りバラエティー番組をクスクスと見入っている。
ほどよい満腹感を椦原の不快な顔を思い浮かべることで取り払い、口内に残る餃子の旨み成分を喉の奥にゴクリと追いやってから、僕は花見川の隣に腰をおろした。
「餃子おいしかったよ」
「そう？誉められると嬉しいよ」
ケラケラとテレビを指さす彼女を横目で見ているとそっとしておきたくなったがそうもいかない。
「話がある」
「……なに？」
一転真剣な目つきで彼女は僕と向き合った。
花見川も分かっているのだ。僕がこういう態度の時、必ず椦原という通り魔の名があがるということを。
「花見川、君の超能力の話だけど」
まずは軽い雑談から始めることにした。
「昨日はどんなお告げがでたんだ？」
「ん？えっとー」
特定の質問を心に思い浮かべてから床につくとそれに対するベストな答え、お告げが与えられると彼女の超能力が明かされたのが昨

日の夜のことだ。
だとしたら、殺人鬼に狙われ危機的状況の彼女が1日に一回の奇跡を起こせるチャンスを無駄にするとは考えつらい。
ほぼ間違いなく彼女は昨日も自身の能力を発動させているだろう。
「私とトウちゃんが明日無事に過ごせるか、って」
「それに対する答えは？」
「うん」
彼女は頷いてから続けた。
「概ね無事」
「それだけ？いやに短くないか。それになんて曖昧な表現なんだ」
「私に言われても困るよぉー、そう出たんだもん」
頼りがいがないお告げだ。確かにダメージはないけど心的外傷は確実に与えられた激動の1日をそんな一言で片付けられるとは。
「それにしても『概ね』ってなんだろうね。こんな漠然とした言い方はじめてだよ。トウちゃんが危険な目にあったからかな」
ついさっきもね。といいかけて、ひとまず忠告をしておくことにした。
「今日の夢は花見川がどうなるか、だけでいいよ」
「え？なんで？危ないんじゃない？」
「僕はなんだかんだで大丈夫だし、範囲を二人にすると予知が広く浅くなってしまうかもしれないからね」
「でも」
「その証拠が『概ね』だなんて妙な言い回しだ。やっぱり範囲は一人に絞ったほうがいい。花見川が今までしてきた質問も限定しているほうが答えは明確だっただろう？」
「そう言えば、そうだね」
じゃなきゃ僕の年下趣味がバレた理由が見つからない。
「んじゃ、そういうことだから僕のことは心配しないでくれ」
「う、うんわかった」
花見川はおどおど頷いた。よし。これで変な答えで花見川が妙に

気に病むこともないし、彼女は逃げに専念できる。
後は僕が樒原をどうにかすればいい。アイツの性格上そう簡単には殺そうとはしないだろう…と信じたい。
「トウちゃん」
「ん、なに？」
「震えてるよ」
指摘されてはじめて気が付いた。夕食を挟んで鎮めたはずの恐怖が樒原を思い出すことで再び蘇ってしまったらしい。カタカタと自分でも気づかない震えが、今頃になってどれだけ綱渡りだったかと遅れて倍になってぶり返してきたらしい。
「少しクーラーが効きすぎてるのかな。寒いんだ」
「嘘」
看破された。真面目な嘘が見破られたのは久しぶりである。
「だってトウちゃん、汗かいてるもん」
ほっぺたをそっと触ってみた。冷や汗というやつだろうか。気がつくと、寒気と同時にさらに汗が吹き出すような気がした。
「……あ、ああ。か、風邪でもひいたのかな。少し体調が、」
「トウちゃん、これ」
花見川はソファーの上に投げ出されていた僕の右手をつかむと、自分の両手でそっと包み込んだ。人肌が、冷たくなった僕の手を温め、鼻孔が風呂上がりの彼女の匂いにくすぐられた。
ポカンとしているのも数秒、花見川は子守歌のように静かに語りかけてきた。
「握ってみて」
「あ、え？」
サラリと僕と彼女の手の平の間に布のような物の感触を感じた。
花見川が手を外したので、シャンプーの残り香とともに渡されたそれをマジマジと見てみる。
「お守りなんだ。お母さんから渡された、私の」
赤い地に金色の刺繍が施された、紛うことないお守り袋が僕の手

にあった。『家内安全』とか『安産祈願』とかの文字が書かれていないのでどんな効力を持つのかさっぱりだが。
「亡くなったお母さんの形見、みたいなものなんだ。私の一番古い記憶はそれをお母さんから受け取ってる時のこと」
「大事な物じゃないか」
「うん。だからこそトウちゃんに見せたかったの。私の宝物」
彼女は優しい微笑を浮かべた。。
「そのお守りを持ってるとね、気分がポッとあったかくなるような気がするんだ。きっとトウちゃんも励ましてくれるはずだよ」
「ああ」
そういえば先ほどまでの最悪な気分が多少和らいだ気がする。
「ありがとう、花見川。だいぶ楽になったよ」
「どういたしまして」
茶化したようすの彼女にお守りを返す。効力が実際にあるかはともかくお陰でパニックになりかけた思考が戻ったのは確かだ。
「落ち着いた？」
「うん、すごく助かったよ」
「よかったぁ」
ホッとしたのも束の間、
「そ、それでトウちゃん」
ほころばせた口角を元に戻して、彼女は戸惑いがちに続けた。
「何があったの？」

閑話休題。本筋に戻る。
説明には時間を要しなかった。花見川にはただ僕が樒原と再び会ったとしか伝えなかったからだ。樒原が彼女を仲間に引き入れようとしていることと、彼が自称超能力者なのは黙っておいた。
これ以上悩み事を増やすのは可哀想だし、何より明日樒原はお縄につくのだ。ならばイタズラに彼女の気を刺激する必要はないし、僕も下手にパニックを起こされなくて助かる。超能力なんて、この

世には存在しないんだ（一部例外を除く）。
明日、彼女と一緒に警察に走りこめば国家権力の名のもとに胡散臭い超能力ユニット樒原カンパニー（仮）を捻り潰してくれることだろう。何が超能力集団だ。宇宙旅行中に未知の放射線でも浴びでもしたのだろう、勝手に世界の危機でも救っててくれ。
「それで、樒原さんは私と連絡を取りたがってるの？」
「ああ、どうせ警察には行かないでくれっとか懇願する気だろう」
ただ会ったと伝えるだけでは話が上手く伝わらないので幾らか脚色を加えて花見川に言った。樒原が囀っていたことをそのまま彼女に言ってもよかったのだが、超能力の件を入れてしまい変に花見川が感づいてしまうと困るので、やっぱり伏せたままにしておいた。
「そんなに私に会いたいなら、家にくればいいのにねぇ」
「白江家に疫病神を招き入れないでくれよ」
「わかってるよぉー。戸締まりキチンとして誰も家にいれません」
「だといいんだけどね」
「むぅ～。信用してないなぁ。私こう見えてもクラスじゃ学級委員で通ってるんだからね。信用の塊！」
胸をはる少女に、精一杯訝しんだ視線をプレゼントしてあげた。
「でも本当に不思議。脅しならトウちゃんを通さないで直接私に強請ればいいのになんでそうしないだろう」
「ああ、脅しと言えば、花見川」
それは僕が樒原に君は島根に行っていると適当こいて振り回したからだよ、と思ったが口に出さず代わりに新たに仕入れた情報から統合された質問をしてみた。
「君が見舞われた火事のことだけど」
「ん？火事はねぇ、全焼ってほどじゃないけど住むのは難しそうなんだよ。お父さんが代わりの家を今探してるんだけど、条件にあう物件がなかなかね」
「あ、いや規模の話じゃないんだ。僕が聞きたいのはその、」
少し迷ったが、樒原が嘘をついている様子じゃなかったのを思い

出し続けた。
「それは本当に樒原が君を口止めする為にやったことなのか？」
「口止めって、……殺そうとしたってこと？」
「違くて、えーと単純に警察には行くなっていう脅しで君んちに火をつけたと君は考えているのか、って聞きたいんだ」
「私は、そうだと思ってるんだけど……違うの？」
僕もあの赤髪通り魔犯樒原の話を聞くまでそうだと思っていた。あの状況ならそう考える方が自然である。
「樒原はやってないって言ってたよ」
「……そうなの？」
彼女の反応になんら変わったところはない。まさしくたった今聞きましたと驚いている。向こうが嘘をついている！と言われた方がまだいい。天然でこんな演技が出来るならアカデミー賞並みだ。
「ああ。あの態度からは嘘をついてるとは思えなかった。花見川は他に心あたりはないの？」
「う～ん、わかんない。私だって人間だから嫌われてるかもしれないけど、さすがに火をつけられるくらいには……。あっ、そういえば」
たった今思いだしたのだろう。彼女はそのまま言葉を続けた。
「消防の人が言ってたんだけど、家の内部から火が上がってるから放火の可能性は低いって」
「それを早く言えよ。どうやら通り魔と火事は無関係っぽいね」
花見川の勘違いで、ただ偶然ことが重なっただけなのだろう。たまたま辻斬り樒原を見た日に火事が起こっただけなのだ。
「ち、ちがうよトウちゃん！だって消防の人も放火の確率は低いけど火元の断定が難しいって言ってたもん」
「不審火ってやつか」
「うん。私だってその日火を使う料理はしてないし、電子機器もそんなに利用してなかったもん。誰かが持ち込まなきゃ火災が起きるはずないんだよ」

「……」
どうやら花見川はよくある被害者意識に捕らわれているらしかった。どんなに自分に過失があろうと見えない悪を仕立て上げそれに罪を被せようとする。気持ちはわかるが時にはなにもかも認めて楽になるのも必要だ。
「話を聞いてよトウちゃん！ウチは煙草を吸わない家庭だから前提からして火事にあうはずがないんだってば」
どんなに力説されても言い訳にしか聞こえなかった。
さて、これでとりあえずの懸案事項ははれた。
ずっと引っかかっていた、樒原の危険性。奴が人を殺しているのは確かだが、話をしている限りやたらめったら殺人を犯す奴には思えなかった。火事があいつのせいでないなら、少しは安心して樒原に臨めるというものである。まあもっともこの先あいつと会うことはないのだろうが。

１９相談、凡常、爽快感

「火事の原因究明はいいよ、それは消防士さんに任せよう」
花見川の言い訳の熱弁を遮り、僕は言葉を続けた。
「あと僕たちに残された問題は樒原のことだけだ。というより最初から抱えていたのは通り魔犯のみだし」
そうだ。わけのわからない超能力に頭がこんがらがっていたが、もとより知恵の輪になったそれに手を出すのは時間の無駄。首尾一貫して僕らの目的は安全保障をうけることなのだ。
「もう一度確認するよ」
力強く頷いた彼女を頼もしく感じながら僕は言葉を続けた。
「明日の昼、僕が学校から帰ってきてから一緒に警察に行く。それまで君は家を一歩も出ちゃダメだからね」
気がかりはモモちゃんが自宅に残っていて二人きりで出かけるのを不審に思うかもしれないということだが、そこらへんはいくらでも言い訳がきくだろう。
「うん。それはいいんだけど、」
「だけど？」
「それじゃトウちゃんが危険じゃないかな。だってその樒原って人は昨日学校に現れたんでしょ。トウちゃんも明日は欠席したほうが……」
「ああ、それは僕がお昼を学食で食べたからだよ。帰宅時間が遅れて閑散としていたから奴がコンタクトをはかったんだ。人ごみに紛れて校門を出さえすればあいつだって迂闊に手を出せないだろ」
僕だって出来ることなら休みたいのだが、担任に『夏期講習を休んだりしたらもう一度一年生をやってもらう』と口をすっぱく言われているのでそればかりは出来ないのだ。２学期までの我慢だ。２学期になったら１学期をチャラにして休みまくることができる。

「大丈夫かな……。私よりトウちゃんの方が危ないと思うんだけど」
「平気だって。あいつの目的はあくまで君だから僕はそこまで気にされてないからさ」
「そう、だよね」
口が軽く滑った。花見川は表情を暗くさせている。面と向かってターゲットは君だなんてデリカシーがなかっただろうか。
「えっと、ようはあいつと会う前に警察に行けばいいだけの話だからさ、簡単だよ」
僕が明るい未来について語りだそうとした時だった。
リビングの戸がガチャリと開いて湯上がりの妹が平然と入ってきた。
彼女はこちらを一度だけちらりと見ると冷たい視線で僕を捉え、花見川と並んでいるのが気に入らないのかどことなくトゲのある口調で言った。
「お風呂あきました。早く入って下さい」
「あ、うん。わかった」
「洗濯機を回すのも忘れないように」
端的に告げたモモちゃんは僕から見て向かいの花見川の隣に腰を下ろした。ソファーの上は妹、花見川、僕となるように座られている。わざわざ回りこんで花見川を壁にするように座ったのだから避けられているらしい。僕の左手側の方が余分にスペースあるのに。
「んじゃお風呂にはいってくるよ」
「……」
無言だ。沈黙が重い。
普段おしゃべりの花見川も所在なげに戸惑っているし、視線が僕とモモちゃんとで泳いでいる。気まずい壁となっている状況が負担になっているのだろう。
食事中もこんな感じだった。どうやらモモちゃんは僕が花見川の誤解を招いた発言をしたのが気に食わないらしく、女性の敵と非難しているのだ。

僕だって反省はしているのだからそろそろ許してもらいたいところである。
それとも先ほど彼女の望んだアイスを買ってこなかったことを根にもっているのだろうか。
「花見川」
「うん？」
どちらにせよ根元にある妹の怒りの原点は、自らがコーディネートした花見川のお洒落が無駄になってしまった事に違いない。だったらアレを有益なものにすればいいのだろう。
「明日、さっきの格好でデートしようぜ」
「へ？」
澄ました発言で自ら恥ずかしくなるが、これで花見川と二人きりで警察署に行く大義名分ができるというものだ。
「あ、え、な、なんで急に！？」
涼んできたはずの表情を湯上がりのモモちゃんと同じくらい上気させた花見川はどもりどもり僕に聞き返した。花見川の向こうのモモちゃんは目を見開いて口をキュっと結んでいる。
「単純に君に似合ってたからさ。外に出さないと勿体無いし、今ちょうど観たい映画があるんだ。一緒に見にいこうよ」
「えっ、それはかまわないけど、あっと」
花見川は視線をモモちゃんのほうに静かに流した。口ではいいと言いつつまだ迷っているらしい。察してくれ、花見川。と心の中で彼女に祈りを捧げる。僕と妹の壁にではなく橋になるかは今この時にかかっているのだ。それに明日自由に移動をするための布石も必要だろ。
「兄さんの、」
僕の言葉がどのような波及効果を及ぼしたのかは不明だが、じょじょにビブラートを効かせ、モモちゃんは怒鳴った。
「すけこまし野郎ーっっ！」
僕にどうしろって言うのさっ！？

その場から逃げ出すように自室にパジャマを取りに行こうとする僕の背中に妹の罵声が浴びせられる。
「最っ低！今ごろになってナンパしようとするだなんて猿みたいに軽い男です！エロいのかアホなのかわからなくなってきました！昨日のＤＶＤのオバサンにでも相手してもらえばいいんです！あんな変態野郎は！」
ああお労しや、妹の桃里……、いつから君はそんな汚い言葉を覚えてしまったのだろうか、そして僕の発言のどこが彼女の怒りをかってしまったのだろうか。
とにもかくにも今必死に彼女を宥めている花見川に僕は最後の希望を託すしかない。頑張れ花見川！君が兄妹仲を繋ぐ橋になるんだ！

一晩明けて、翌朝。昨日の夜、あれから妹と口をきくことはなかったけど、１日経てば怒りも薄れることだろう。
制服に着替え軽い朝食を済ませる。一昨日よく眠れなかったからだろうか、昨日はグッスリ熟睡でき今朝の目覚めも抜群だった。朝食作りは普段は母が準備してくれるのだが、いかんせん今は兄妹と居候の三人だけである。そして僕以外の二人は長いお休み真っ只中で、この時間帯はまだ夢の中なのだ。
一人寂しく支度を整えた僕は朝の占いに目を通し、テレビのスイッチを切った。さそり座は６位、中途半端な位置である。占いといえば花見川の夢のお告げはどうなっているのだろう。聞きたくても当の本人がまだ目覚めてないからどうしようもない。
「いってきます」
鞄をもって朝の日差し眩しい玄関から人気がない通学路にでる。声が返ってくることはなく少し気が沈んだがそれを慰めるように爽やかな日差しが僕の肩に降りそそいだ。
僕の通っている学校は家から歩いて１５分のところにある普通の

私立高校だ。
そこを目指して歩みを進めるのだが、どうにも足が重たかった。半年通って見慣れたはずの教室で転校生のような気分を味わなければいけないのだ。どうにもやる気がおきない。そうは言ってもこの講習に参加しなければ、留年になってしまうのだから参加しないわけにはいかないだろう。
悶々とした気持ちを引きずって気がついたら既に校舎にたどり着いていた。
昇降口から自分の教室まではそう距離はない。一年の棟は歩いてすぐなのだ。ちらりと左手の腕時計を見れば、チャイムまでまだ余裕があった。
少し考える。結論は早かった。余分な時間を教室で過ごすより、別の場所で時間を潰したほうがいくらかマシだ。というわけで図書室に行くことにした。
夏休みに入り、図書室も閉まっているもんだと思ったら別にそんなことなく、閑散ながらも普通に扉は開いていた。どうやら夏期休暇中も初めの一週間は普通にオープンしているらしい。
中に入った僕は、ぶらりと室内を一周し、古書の香りを鼻いっぱいに味わった。普段読書家でもないのでこう言った環境はある意味で新鮮である。面白い本でもないかなとザッとタイトルに目を通し、棚から本を取り出し戻すを何回か繰り返しながらゆっくり進んでいく。
気がついたら朝のホームルーム開始の１０分前になっていた。カウンターの先生に挨拶をして慌てて教室に向かった。

２０来訪、喧騒、幾星霜

１―Ａ。

僕のクラスである。席は運の良いことに廊下側の一番後ろで、教師にバレずに読書するのには絶好の位置だ。なにより入口すぐ近くなのが良い。昼休みになればすぐに廊下に飛び出せ、学食の混雑を体感しないですむ。まあ夏期講習中は関係ないことなのだけど。

遅刻してもバレずに席につくには良い位置だなと新たな利点を思いつき、そっとほくそ笑みながらドアに手をかけた。

教室に入った瞬間、驚きで体がこわばった。

女子が僕の座席についているのはまだいい、昨日僕が許可したことだ。問題は彼女がこの学校の制服でないセーラー服の女子と言い争っていることである。

「だから、そこはトウちゃんの席だってばぁ。なんであなたが座ってるの」

「で、でも昨日座ってもいいって、い、言われた」

教室の視線が、その一点に集まっていた。一人場違いな恰好した女子が学校一の美少女に食ってかかっているのだ。さぞ面白い出し物だろう。出来ることなら僕も遠くから見学していたいのだが、そうもいかない。

「何してんの？花見川」

呆れとともに困惑する少女を庇うためセーラー服の花見川に声をかける。

「あっ！トウちゃん、おはよう！」

「おはよう」

悠長に朝の挨拶を交わしてから、今この時間モモちゃんと一緒に家にいるはずの彼女は元気溌剌に続けた。

「そうだトウちゃん！この子に言ってあげてよ！ここは白江藤吾の席だからどいて下さいって」

「なんで君がウチのクラスの席順を知ってるのさ」
「教卓の座席表を見たの」
ああそういえばそんなものあったなぁ。とぼんやりしそうになったがこの可笑しな状況に突っ込まなくてはいけない、逃避したいけど信じられない現実がぶんぶん手をふって少女に襲いかかっている。
「だからここはトウちゃんの席なのになんで座ってるのさぁ」
「き、昨日譲ってもらった」
「彼女の言ってることは本当だよ、これ以上突っかかるのは止めてくれ恥ずかしい」
「っう」
指摘を受けた花見川は、赤くなって俯いてから椅子に座ったままの女子に謝罪を告げた。わかってくれたようで何よりだが、いくつか疑問が残る。とりあえずはまあ教室の視線がなくなったことを喜ぼう。
「花見川、なんで君がここにいるんだ？」
ご丁寧に自分の中学の制服に身を包んで僕の高校に特攻してくるだなんて、度胸はすごいがいい迷惑だ。
「へへーん。これー」
「ん？」
彼女は右手についている緑色の腕章を引っ張って書いてある文字を見えるようにした。
「見学者？」
「そう。実はワタクシこの免罪符を受付でもらい職員室で許可をとった正式な夏期講習の参加者なんです！」
「君が、か？いきなりでよくそんな願い事が叶ったな」
「ふっふふ、そこが花見川マジック」
朝からため息が漏れそうになったが、なんとか抑えて僕はいつも座っている席の一つ前の机に鞄を置いた。昨日と同じく友達である橘の席だ。僕がくじ引きで勝ち取った一番後ろの端っこの席は、他クラスの女子に譲っているので詮無いことは言わないようにしよう。

「あ、私はどこに座ったらいいかな」
「席はいっぱい空いてるし好きなところに座ったら」
「うーん、じゃ隣っ！」
立ちっぱなしだった花見川はガシンと僕の隣の空いた席につき、鞄（普通のバック）から勉強道具を取り出して机の上に広げ始めた。
「ほんとうに夏期講習受けるんだね……」
「そうだよぉ、嘘ついてどうするの。その為に制服着てるんだから」
「あのデッカいキャリーバックの中に入ってたの？泊まりに来るのにわざわざ着替え以外を持ってくるなんてスペースの無駄じゃないか」
「これは私の制服じゃなくて桃里ちゃんのだよ。私のヤツは火事で燃えちゃって代わりに借りたの。トウちゃんの学校に行くって言ったら制服に着替えた方がいいってアドバイスしてくれたんだ」
「あ、ああ。言われて見れば確かにそんなんだったな」
妹の制服姿なんて滅多に見ないからわからなかった。あのお嬢様学校にしては意外とシックなデザインだ。
「あと一つ疑問なんだけど」
「ん～、なに。遠慮なく聞けばいいさぁ」
「なんで君が僕の学校にいるんだ？」
「だからそれは」
腕章を指でつまんだ彼女の言葉を遮って僕は質問を上乗せした。
「違うんだ。僕が言いたいのは君が見学者としてなぜ夏期講習を受けているのかではなく、どうして家にいないんだ、ってこと」
「うっ、あー、」
「昨日あれほどウチから出ないようにしなよ、と釘を打ったのになんでわざわざ僕の高校に足を運んだんだ？」
「……言いたくない」
「はぁ」
小さく蚊がなくような声で呟いた。
「言ったらトウちゃん、怒るもん」

「えー、っと」
理不尽な説教を受けた悪ガキのように唇を尖らせた彼女になんて言葉をかければいいのだろう。怒ろうにもまだ理由を教えてもらっていない。
思案を開始して数秒、口を開きかけたちょうどその瞬間、リンクするかのように黒板側のドアが開かれ、出席を取りに教師がやって来た。始業前のチャイムが鳴っていたのを思い出す。
厳つい体育教師は眠そうな目をこすりながら教壇に上がった。
「あー、では講習前に出席を確認する。名前を呼ばれたら返事をするように」
主席簿を開いて朝にはキツい大きな声をあげている。もちろんクラス名簿ではなく夏期講習の参加者を綴ったリストである。もしあれに欠席マークがつこうものなら家の電話にコールがいくわけだ。たまったもんじゃない。
「まずはA組から。白江藤吾」
「はい」
「今日は休まず来たな」
昨日もその前も出席したじゃないか。一昨日は遅刻ギリギリだがセーフだ。なのになんでそんなチクチクしたこと言われなくてはならないのだ。まったく心外である。
「三角（みすみ）」
「はい」
一番前に座っていた同じクラスの女子Aが手を上げた。その出席確認のおかげで彼女の名前を思いだす。ああそうだ、そういえばそんな名前をしていた。フルネームが三角桂（みすみけい）であだ名が三角形だ。親しみやすいニックネームだけど本人のギスギスした印象から使われることはなかった。本人の前で言ったら睨みつけられるし。
そのまま点呼は滞りなく進み、教師はパタリと出席簿を閉じた。どうやら欠席者はいないらしい。休めば一年生をもう一回だ、いく

ら劣等生の僕らもそこらへんは肝に銘じている。
「おーし、全員出席だな」
そう言って辺りを見渡し、先生は思い出したかのように続けた。
「おっと忘れてた、お前」
指差された花見川はキョトンとしていたが、「ちょっと前に出なさい」の一言でやおら立ち上がり先生の隣に立った。沢山の視線を浴びて上がっているのか少しだけ恥ずかしそうだ。
「えーと、彼女。花見山…」
「花見川です」
「失礼。花見川さんが今日一日“見学者”ということで一緒に授業を受けます。仲良くしてやれよ」
「は、花見川むくげです。よろしくお願いします」
まじモンの転校生みたいに初々しい挨拶をする花見川に、「はい拍手」という先生の言葉に焚き付けられた僕らの手拍子が送られる。それに頬を上気させた彼女はへこへこしながら僕の隣の席に戻ろうとした。
「こら花見川ー」
「あっ、はい？」
未だ教壇に佇んむ教師に呼び止められて教室の中心で彼女は振り返った。
「君は見学者なんだからもっと前の席で受けなさい」
「でももうあそこで準備整えちゃいました」
「いいからここー」
バン、と空いたままだった教卓の前の机を叩いてから、野太い声は続く。
「ここで受けなさい。前の方がスカスカじゃないか」
「えー」
「えー、じゃない。そんな後ろに人が集まってると人口密度高すぎて不快指数も上がるぞ」
大半が講習強制参加のやる気がない生徒たちなのだから必然後ろ

の座席が埋まりやすいのだ。
花見川は渋々勉強道具を鞄に積めなおして、先生に言われた通り教卓の前のアンラッキーな席に移動した。ドンマイ花見川。相手が気さくな体育教師だったことを恨むんだな。
先生は花見川の移動を見届けると「それじゃ勉学に励め、若人ども」と捨て台詞をはき、職員室に戻っていった。
まったくめんどくさい人だ。講師の人が来るまで幾らも残されていない。今、席を立つと変に目立ってしまうからかみんな自分が確保した座席を離れようとはしなかった。
さっきの質問を掘り下げて花見川にぶつけようと思っていたが、これでは無理そうである。
「ん？」
背中がつつかれた。鉛筆か何かでツンツンとされたらしい。後ろを振り返えると、後ろの、本来ならば僕の座席に座る女子が顔を真っ赤にして僕を見ていた。
「なにか？」
「ぁ、ぃ、っと」
「？」
呼びかけといて、緊張しているらしい。何がしたいんだろう、この人。
「は、花見川さん、は友達？」
なんだか消え入りそうな調子でたずねられた。
「そうだね。つい最近知り合った友達」
「あなたは、と、友達いっぱいいる？」
「僕に聞いてるの？」
「うん」
不可思議な質問だ。僕は頭の中で今年来た年賀状を数えながら答えた。
「さあ。人よりは多くはないけど、それなりにはいるんじゃないかな」

「そ、それなり、…」
「？」
なんだろうこの子。顔が良い人には何か計り知れない悩みでもあるのだろうか。
そんな朝のホームルームは、講師の先生が来たことで、授業に切り替わる。一時間英語という異種言語を覚える作業が始まるのだった。
そんなことより花見川を言及しないといけないのに、……めんどくさい。

21逃避、戦闘、会話

夏期講習という拷問に近い三時間は、図書室で借りた本が退屈を紛らわせてくれたお陰で苦に感じることはなかった。

何事もなく放課後を迎えたのはいいのだが、合間の休み時間に花見川が学校に来た理由を問いただすことが出来なかったのは少しだけ心残りでもある。

てて、と帰り支度を整えた花見川が鞄をぶらぶら揺らしながら僕に駆け寄ってきた。

「トウちゃん、帰ろー」

「うん。ところでお昼はどうする？学食で食べてく？」

「……そーだね。と、桃里ちゃんいるし、家で食べようよ。学食はよそう」

「まあ確かにモモちゃん一人だとロクなもの食べないから、何か作ってあげなくちゃ」

鞄の紐を肩にかけて立ち上がる。夏休みの貴重な半日を浪費し得たものがなにもないのは頂けないが学生なんてそんなものだ。文字を追い続け疲れた視力を取り戻そうと、目元をマッサージしていた僕のシャツが後ろに軽く引っ張られた。振り返ると案の定、席に座ったままの他クラスの女子が自身なさそうな上目遣いで見ていた。

「あの、」

「どうしたの？」

「さ、さようなら」

「……さよなら」

キョドキョドとハムスターみたいな少女である。僕の返事を受けて、少しだけはにかむとそのまま花見川の方に視線をやった。

「は、花見川、さんも」

「え？私？あ、えーと、じゃ、じゃあまたね」

「うん。またね」
別れの挨拶を告げた彼女は風のような速さで教室から出ていった。
残された僕たち二人はキョトンとその背中を見送る。
「変わった人だね……」
「そうだな」
「でも良い人そう。お友達になりたいな」
「なればいいじゃないか」
「もう！なんでそう淡白なの！もう少しコメントしてくれたっていいんじゃないの？」
「ごめんごめん。お腹が減って気がたってるんだよ」
疾風のごとく去っていった彼女に続くように僕たち二人も廊下に出た。ひとまず昇降口を目指す。花見川は先行していた僕に追いつくとわざわざ隣だって歩きだした。
「まってよぉ、トウちゃん」
廊下は一時のラッシュで人が溢れている。夏期講習に参加していた人が一斉に帰宅するのだ。二十数名でも人ごみが苦手な僕は避けようと自然早歩きになっていたらしい。歩調を戻す。
「それで花見川、君はなんで夏期講習を受けたんだ？」
ようやく本来の静けさを取り戻した廊下は、夏休みということを思い出させるような寂しさにつつまれていた。
「過ぎたことを言ったって変わらないよ。なーんにも問題なかったのだから、ひとまず安心なのだ」
「よくない。約束が違うじゃないか。君が外に出て危険な目にあっても僕は責任とれないよ。正直にわざわざ僕の学校に来た理由を教えてくれ」
「んぅぅむぅー。わかった。言えばいいんでしょ……」
渋々といった様子で花見川は口を開いた。
「お告げの対象を、トウちゃんにしたの」
足を止めて、彼女を見る。
親に怒られる前の子どもみたいに、もじもじしていた。

「なんて？」
「明日トウちゃんはどうなりますかって」
「……それで予知の結果はどうだったの？」
今更過ぎた事をあーだこーだ言っても変化しないと開き直っていたのに、急に反省しきった表情をされては文句が言えなくなってしまう。大体彼女も僕の事を思ってしてくれたことだ。自分の身だけ守れとは言ったが心配してくれた彼女の気持ちを無碍に扱うことはできない。
「学食で樒原と出会う」
「……またあいつか」
「うん。だから、学食には近寄らないよう家に、いやこのまま警察に行こうよ」
確かに花見川と一緒じゃなければお昼を学食で済ませていただろう。昨日初めて会った時もそこだったというのに迂闊な判断である。つうかバカだ。
花見川が一緒にいることによって助けられたということか。
「そうしようか。モモちゃんには悪いけどインスタントラーメンで我慢してもらおう」
「あっ、そうか。桃里ちゃんがいたんだった。う～ん、このまま警察に行くと桃里ちゃんがかわいそうだし……」
腕組みをして妹の心配をしてくれるのは有り難い。
「でもわざわざ学校にまで来なくても電話でもしてくれればよかったのに」
「電話だと繋がるかどうか不安だったし、一回夏期講習ってものが受けてみたかったからね」
「変わった考えをお持ちで」
「ほんとは朝に言うつもりだったんだけど寝坊しちゃって気がついたらトウちゃん家でてたんだもん。仕方なく追いかけたら追いぬいちゃってたけど」
「図書室に寄ってたんだ」

「まあそんなこんなで紆余曲折あったけど、学食にさえいかなきゃいいんだからこれで問題は解決でしょ。樒原さんとは学食で会うことになってたんだから」
「そのお告げなんだけど、続きとかはないの？例えば……」
階段の踊場に設置された消火器にチラリと目をやってから尋ねた。
「樒原は学校に火を放つ、とか」
「テ、テロリストみたいに大規模だね」
「今のは冗談だよ。僕と樒原が学食で邂逅する、ということ以外には何かなかったの？」
「うん、特には。ほんとにその一文だけ。私のお告げには詳しい時とそうじゃないときのムラが激しいから……」
視線を赤い消火器に落として花見川は呟いた。
「私のうちにもこういうのがあれば少しはマシになったかもしれないのに」
「……行こう。樒原となんか会いたくないからね」
階段に足をかけ、一段さがる。二段目に足をかけた時、彼女が立ち止まったまま動いていないことに気がついた。
「どうしたの？」
「ちょっと教室に忘れものしちゃったみたい」
「何忘れたの？」
「携帯電話。多分机の中にいれっぱなしになってんだと思う」
ポケットをまさぐったり鞄をを確かめたりしているけど、探し物は出てこなかったらしく、花見川は小さくため息をついてから言った。
「ごめんトウちゃん、ちょっと待ってて。取ってくるから」
「僕も行くよ」
「一人で大丈夫だよ」
「まあそう言うなって」
彼女が歩きだすよりも先に教室に引き返すため足を進ませた。花見川はそれを見て、慌てたように僕の後について来た。

戻って来た1―Aの教室は、人が一人もおらず、シンと静まり返っている。どうやら用なんかねぇよ、とみんな残された一日をエンジョイしに教室を飛び出したらしい。電気も消されている為、昼間なのに妙に薄暗い。太陽がちょうど天頂で直射日光が少ないからだろうか。

花見川は自分が先ほどまで座っていた机まで駆け寄ると、腰をかがめて中を見た。

「あれ？無いや」

「無いや、じゃないだろ。他に心当たりはないの？」

「うーん、そうは言ってもなぁ」

キョロキョロと見渡しながら、後頭部をかいている。教卓の前というアンラッキーな場所で授業を受けていた彼女が他に場所を移動していた記憶はない。

しかたがないので僕も手伝おうと教室の中心辺りに立ち床を隅々まで見渡してみたが携帯は落ちていなかった。

すこし焦ってきたらしくオロオロと教卓の裏まで見ている彼女に僕は自分の携帯を取り出してたずねてみた。

「コールしてみようか？あ、もしかして授業中だから電源切ってた？」

「そ、その手があったか！是非お願いするよトウちゃん。たしかメールの着信はマナーにしてたけど電話は何も操作してなかったハズだからさ」

「電話もしときなよ。言っておくけどウチの学校携帯持ち込み禁止だからね」

「私はまだ部外者だからいいけどトウちゃんも持ってきてるじゃん」

「揚げ足とりはよしてくれ」

携帯画面をパチリと開き、昨日なんだかんだ手にいれた彼女の電話番号に決定キーを合わせた時だった。

ふと、思いついた。そうだった。教師に無理やり席移動させられ

る前に彼女は、
「花見川、そこの席じゃなくて僕の――」
「今日は花見川むくげもいるじゃねぇか」
「！」
僕や花見川のではない第三者の声。そして、会いたくもないくそ野郎の気配。
声がしたドア付近を見ることが出来ず花見川のほうに視線を流した。
彼女は、そいつの赤髪で彼の正体を把握したらしく怯えるように息を飲んでいた。
「よーぅ。昨日ぶりだな白江藤吾。そして初めまして、ああ二回目か。だけどこうして面と面を向かいあうのは初めましてだな花見川むくげ」
気さくな挨拶を繰り出してきたけどそれに返事なんて出来るはずなく立ち竦んでいた。花見川は恐怖で目を潤ませている。「おいおい暗いぜ、お二人さん」
「樒原、どうしてお前がここにいるんだ？」
「ノスタルジックな気分になってぶらり高校によってみたら、知り合いにあったんで話かけてみる、ってわけ」
こいつと僕は学食で会う予定だったはずだ。ここにいるということはコイツは教室に寄ってから学食に行く気だったのだろう。以外とマメな性格をしてやがる。運命が変わったとかロマンチックなことは考えたくないのだけど。
まずいことになった。僕一人ならまだしも今は花見川がいる。
逃げる？
戦う？
それとも、奴の話をきく？
僕の脳内にＲＰＧのコマンドのようなものがふつりと浮かんだ。

22音符、発信、愚者の抵抗

蝉時雨は窓に塞がれ、耳には微かな音しか届かない。
教室の空気は彼女の緊迫した息遣いを浮き彫りにするかのように静まり返っていた。
奏でられる一定の呼吸音に、時が歪められているのではないかと錯覚させられる。時計の針はゼリー状の物質に包まれているかのようにゆっくりとしていて、僕が息を飲むその数秒で事態は緩やかに変化していく。
「それで花見川むくげがいるってことはようやく話を聞いてくれる気になった、ってことか？」
「ただの偶然。それ以外に理由はないよ」
血のような赤色に染められた髪を揺らしながら、樒原は僕らの立つ黒板側へ歩みを進ませた。
押し出されるのとは違うが、それに比例するカタチで僕と花見川は数歩後ろにさがる。
距離をとりたかった。彼の気配に蹴落とされたわけではない。
「おいおいおい…、なに勝手にビビってんだって。こっちに害意はないってあれほどアピールしたじゃねぇか。
白江ー、お前花見川むくげに話をちゃんと伝えたか？」
「さあね。君の世迷い言に耳を貸すほどお人よしじゃないのかもよ」
「どっちか知んないが、まあいいさ。会って言えばいいだけの話。そして今、やっとこそ彼女とご対面ってわけだ」
イェーィ、とバカみたいに明るい言葉を語尾につけ加えた。
「あ、あなたは、私をどうしたいの？」
「あん？」
花見川は目の前の男に何を言っていいのかと戸惑いがちに口を開いた。それから僕に助けを求めるように擦りよってきた。肩甲骨が

僕の細腕にぶつかる。痩せすぎなんじゃないかと心配になるほど彼女の肩は小さかった。
「っは。仲良しこよしじゃん。よかったなナイト様。そんなに肩寄せ合ってまるで猿山の押しくら饅頭だ」
「ちゃ、茶化さないで」
「別に馬鹿にしてるわけじゃねぇよ。なんだがどんよりしてるこの微妙な空気を和ませるためのジョークってわけだ」
樒原は余裕たっぷりの笑顔で僕たちをねめつけた。
油断してるのだろうか。たしかに二人がかりでも彼を黙らせることは出来ないだろう。僕は非力な高校生だし、花見川は男性に腕力で劣る女の子だ。
昨日喧嘩で勝ったら花見川のことを諦めるとほざいていたが、戦うという選択肢はいの一番に消去される。勝算はない。
「花見川」
残されたのは、大人しく彼の話をきくか逃げるかだけだが、殺人鬼の妄言を容易く聞きいれるほど、もうろくしていない。それなら逃げるの選択肢が一番利口だ。
僕一人ならあいつの話をたっぷり聞いてやるのだが、隣にいる少女をよくわからないＳＦ社会に送りだすのは、身分を預かっている白江家としても彼女の父親に面子がたたなくなってしまうだろう。
「花見川、大丈夫だ」
樒原に聞かれないよう、ボリュームを落として囁く。彼女は僕をチラリと見てからそっと頷いた。逃亡の意思を伝えるのだ。
「隙を作る。その間に逃げよう」
セリフだけ抜き出すとカッコいいかもしれないが情けないことに声は震えていた。
「む、無理だよ。トウちゃん。だってあの人中心にいるもの」
「なんとかなるよ。あいつだって人間だし、僕たちだって狩られるウサギってわけじゃない」
「逃げられるわけないよ。今は大人しくしとこう」

「どうにかするさ。合図がしたら黒板側のドアから逃げてくれ」
「……トウちゃんは？」
「僕は後ろのドアから廊下に出る。二手に分かれればヤツの注意も分散できるしね」
教室の中心に立つ樒原は確かに厄介だ。前と後ろにあるドアのどちらから出ようとしても対応されてしまう。それでもどうにかするしかない。
僕は武者震いを起こす右手をポケットに突っ込んだ。
「まあよ。お前が俺にビビってるってのも分かる。そりゃあんな状況見たら誰だって鳥肌もんだぜ。だがな、俺にだって理由があんだわ」
樒原はいい感じに演説をしていた。隙だらけと言ったようすだがこれだけでは不十分だ。
「まてよ樒原。いきなりそんなこと言われても混乱するだけだろ。まずは自己紹介からはじめたらどうだ？」
「別に言わなくてもわかるだろ」
「ちなみに僕は白江藤吾。高校一年生でこの学校の生徒でもある。趣味はとくにないし特技もとくにない。お前はどうだ？」
言って数歩前に出る。少しでも距離を縮めたかった。
「はあ？意味わかんねぇな。でもまぁ、必要ちゃあ必要だなぁ」
文句を口にしながらも素直に自己紹介を始める樒原にバレないようポケットの中で携帯電話を操作した。履歴が残っているので、目を落とさなくても簡単に望む番号に発信をかけることが出来る。僕は決定キーを押し、ポケットから右手を解放した。
隣の花見川に小さく「もうすぐだ」と呟く。
「んでー、買ってるウサギの梵天丸が超かわいくてなーあの愛らしいウルウルした瞳がまたたまらなく――」
言葉はそこで遮られた。後ろで物音がしたからだ。彼はビックリしたようにように首を後ろにむけた。
「今だ！」

ドアを目指して走りだす。花見川は樒原が目をやってる場所とは正反対の位置にあるドア、僕は彼の注意を引くよう後ろ側のドアからだ。
花見川の携帯に電話したのだ。それによって流れる着メロで樒原の注意を引きつけている間に脱出しようという作戦。
彼女の携帯は、僕の席の隣の机の中にあったのだ。一番始めに彼女が座っていた場所。先生に席変えを言い渡された時、忘れてしまったのだろう。まさか今になってそれを利用するとは思わなかったが。
「っち」
樒原が流れる『乙女の祈り』に舌打ちを加えた。幸運な事に僕が思った以上に隙は大きくなっていたらしく、容易く彼を追い抜くことに成功した。後はドアから廊下に出るだけだ。樒原の反応速度は明らかに鈍っており、慌てて正面を向いた時にはもう遅い。
僕に目をやっているだろうが、すでに手の届かない位置だ。最後にドアに手をかけてあいつの方を振り返った。追いかけてきているだろうか、一番最初に目がつくのは僕になるはずだから。
「なっ、」
だけど予想は外れていた。樒原は僕ではなく前側から出ようとする花見川に向かっていた。
しまった、あいつの狙いは最後まで彼女だった！
後悔より先に僕は開きかけたドアを放置して、あわてて樒原手を伸ばす。
「邪魔すんじゃねぇ！」
なんとか捉えた彼の手首を思いっきり引き寄せ、よろめかせる。
「トウちゃん！」
妨害されることなくドアを開けた花見川は心配そうにこっちを見ていた。
「早く警察に行け！」
ちんたらしてるんじゃないっ、僕がそうつけ加える前に花見川は

駆け出していた。よかった。ひとまずは無事で。
「放せっ、バカ！」
樒原はなおも抵抗している。だけど僕も必死だ。この手を放すわけにはいかない。全ての小細工が無駄になってしまうから。
「っう」
彼のローキックが僕の向こう脛を捉えた。痛みに悲鳴があがりそうになったなんとか飲み込み僕は叫んだ。
「放すかっ、バーカ！」
バタバタとした足音は廊下にこだまし、1―Aにも転がってきた。花見川は無事に階段にたどり着いたらしい。後は彼女が警察を連れてくるのを待つだけだ。
体を揺さぶって抵抗していた樒原だが、ようやく観念したのか動きを止めて僕を睨みつけてきた。そのメンチに思わず身震いが起こる。至近距離で見る彼の眼光は鋭く僕を射貫いていた。
「やってくれたな」
「……」
「また逃げられたじゃねーか。しかも警察だと？ナマ言ってんじゃねぇよ」
「樒原、きみ」
教室にはひたすら花見川の着信メロディである『乙女の祈り』が流れている。僕も逃げ出したいが、そう上手くはいかないだろう。
「意外と腕の筋肉が発達してるんだね。見かけによらずマッチョだ」
「そりゃどうも！」
誉めてやったお礼か、腹に一発パンチを貰った。その攻撃に思わず右手を放して前屈みになる。樒原は自由になった左手を加えてさらに僕に攻撃を加えた。何をどうされたのかわからない。痛みに耐えるしか僕に出来る事はなかった。
「うまく俺の注意を引きつけたことは誉めてやる」
「……嬉しいよ。成功したんなら」
「だけどせっかく歩み寄ろうとしてるのに逃げ出すなんて非道だと

思わねぇか」
蹴られた。めちゃくちゃな痛みから呼吸がうまくできなくなった。肺が真空になったかのようだ。胃液が喉までせりあがってきて気分が悪くなった。
「思わ、ないね。君はやっぱり危険人物、だ。なにより、花見川が、嫌がってる」
「減らず口が。したてにでりゃいい気になりやがって。人をバカにすんのもいい加減にしやがれ」
言い返したいのだが、頭がポッーとしてきてうまく口が回らない。一方的な暴力は僕から思考する力を奪っていったのだ。鈍痛から意識が飛ぶなんてことはないけど、それが逆にものすごく辛い。口内は胃液かなんかの酸っぱい味に満ちていて、不快感が僕の味覚を支配している。
一番始めの蹴りがきいてきたのか、僕はがっくりと体勢を崩してその場に倒れこんだ。

23暴力、策略、逆転の礎

遊園地のコーヒーカップをふざけて回し過ぎた時に起こるような生暖かい血液が僕の脳みそをたぷたぷと浸していた。鏡の迷路で自己を見失いかけた時のように、僕の気分は最悪だ。簡易版インフルエンザを食らったような心持ち。

流れていた『乙女の祈り』はやみ、再び静寂が支配している状況下で、僕を見下すように樒原は言葉を吐き捨てた。

「一方的ってのもつまらねぇな。ちょっとはやり返してみたらどうだよ」

視界にはくすんだ白い床。教室のタイルにはところどころ上履きでついた黒い擦り跡がついている。そこに頭をつけて寝転んでいるのだと思うとさらに気分が沈みこみそうだ。

「立てよ。こんなんじゃねぇだろ」

一つの綿埃が落ちているのを見つけた。だから学期終わりの大掃除はちゃんとすべきなんだ。汚い世界に反抗心がくすんでいくような気がした。

「無理。ギブアップ。立てない、というか立ちたくない」

「おいおい、いいのか？だったら俺は花見川むくげを追いかけるぜ。今ならまだ間に合うだろうからな」

「それは困るな。ちょっと待ってくれ今足に力を……」

言い切る前に樒原は駆け出す態勢をとっていた。反射で手を伸ばし彼の足首を掴む。ギリギリのところで抑えることができた。

「なんだ、まだ腐ったわけじゃなさそうだな」

「僕にナイト様は無理みたいだけどね」

武闘派ではないただの高校生になにを求める。

カラン、と小気味よい音をたて何かが頭上から降ってきた。チラリと目をやる。ナイフだった。頬の横に、昨日彼と投げ合った思い

出のナイフが存在していた。
　樒原がなぜか知らないが落としたらしい。
「拾えよ」
「……」
「サービスで、貸しといてやる。俺は今からお前に徹底的に暴力を加えるからな。ただやるだけじゃ寝覚めが悪くなる」
　情けで僕に武器を寄越した、とでもいうのか。フィクションの痺れるワンシーンでも演じているつもりなのかもしれないが、それははっきり言って油断だし、余りにも僕をバカにし過ぎている。
「ナイフを持ってる方が、優位に決まっているじゃないか」
「だからだ。武器を持っていても俺には適わないって教えこんでやんだよ。立ちな。いつまで寝っ転がってるつもりだ。蹴り上げるぞ」
「とんだ自意識過剰だ」
　口で言いつつ、彼の足首から手を放し、ナイフを拾ってから足に力を込める。生まれたての子馬よりは早く立てたはずだ。
　僕が立ち上がるその様子をバカにしたように樒原は鼻で笑った。油断しているならそこをつかなきゃ、絶対的弱者には勝ち目がない。
　鞘のようについていた皮のカバーを外し、横に放った。佐々木小次郎はそれで敗れたけど、実際は試合中、刀をおさめる鞘は邪魔になるから仕方ないのだ。
　抜き身になったナイフ。わかっていたことだけど、やはり刃物は刃物だった。窓の向こうの太陽を浴びて淡く白い光を反射させるそれは下手をすれば人の命を奪う危険なものだ。
「これは痛いじゃすまない。わかってて僕にナイフを渡した意図が読めないんだけど……。ああもしかして警察が来た時に被害者と加害者を逆転させるためか？」
「んなセコい事は考えてねーよ。ただ単に俺はお前に教えたいだけだ」
　ムカつく笑顔をしたあと、続けた。
「なにをしても俺には勝てない、ってことをな」

「えらい傲慢なんだな。ナイフは簡単に肉を裂けるぞ。渡さなきゃよかったと後悔するかもしれないよ」
「覚悟を持って人にナイフを向けるのは案外難しい。良心がストッパーになって考えているようには出来ないからだ。お前が人を殺そうするやつには見えない」
確かにただの高校生の僕がそんな覚悟を持てるはずがないし、これから先、人に殺意を向けたという十字架を背負って生きていきたくはない。
「それゆえ、覚悟をもっている俺のほうが、お前に勝るのは道理だろ？人に殺意を抱くのを肯定するわけではないが」
「それでも、君は殺されるもしれないだろ。僕にその気がなくても事故ってしまう恐れさえある」
「素人にヤられるくらいなら、その程度の実力しかなかったってだけの話だ。そんでもってそうされないだけの自信と経験が俺にはある」
「ナイフを装備したくらいの僕に負ける気はしないってことか」
「そういうこと」
勝てる気がしなかった。樒原の言う通り、意識も意思もない僕がいきなり血が飛び交うバイオレンスな世界に行けるはずがないのだ。今だってナイフを持つ手が震えている。僕はいつだって弱いだけの人間だ。弱いから中学生の時女の子を泣かせてしまったし、妹の信頼を勝ち取ることも出来やしない。だけど、ナイフを躊躇なく振るえることが強さだというなら僕はそんな強さなどいらない。
「樒原、君の言う通りだ」
「分かったのなら、そこで黙って突っ立ってろ。警察を相手にするのは面倒なんだ。はやく花見川むくげを追いかけて誤解を解かなきゃなんねぇ」
「確かに僕がナイフを持ったくらいで、連続通り魔犯にはかなわないだろう、だから」
花見川の顔が浮かんだ。これは時間稼ぎではない、僕の覚悟で、

最初の勇気だ。
「ゲームをしよう」
「ゲーム？」
腕を伸ばせば届く距離、それはつまり殴り合うことができるということだ。それでも樒原は僕の言葉に耳を貸す気にはなってくれたらしい。
「そう、ゲームだ。ルールつきのレールの上なら僕の勝算はゼロにはならない」
「おもしれーこというじゃねぇーか」
「ルールは昨日と同じ、ナイフを投げ合って落としたり刃の部分を掴んだら負け」
「はぁ、わかってんのかお前？」
ため息をついてから樒原は続けた。
「言っておくがナイフの扱いには結構長けてるぞ、俺は。昨日の夜だって内緒にしてたが実は得意な遊びを提案したにすぎないんだ」
ああ気がついてさ。現に樒原がナイフを落としたのは不意打ちの一回だけだ。あとは全部僕の負け。
「折角のチャンスを俺の土俵でやるってのかい？まあジャンケンとかまるっきり運まかせにされるよりはマシだがよ」
「だからこそ、君の得意なゲームで勝つからこそ、それが僕の完全勝利になるんじゃないかな」
「なるほどな。喧嘩で勝敗を決めるより確率が高いとふんでるわけか。ふん、愚かな選択肢だ」
「勝てば官軍だろ。勝負はなんであれ勝てればいいんだ」
「いいぜ、のってやる。ちなみに言わせてもらうが、俺が負けるなんてことは絶対にありえないからな」
今のうちに高をくくっておけばいい。見くびれば見くびるほど僕の勝率は上がっていくのだから。
「勝者の権利は、僕が勝った場合、君にはすっぱり花見川を諦めて

もらう、仲間に入れたいなんて考えるな。そして君が勝った場合、花見川が警察に行くのを僕も止めるし、君が彼女と話合いが出来るようにもする。これでいいか？」
「いいぜ。万に一つ俺が膝をおった場合は俺の仲間には、無能力者だったと報告しといてやる。それにしてもここまで躍起になって花見川と会わせないようにするなんてひょっとしたらひょっとするかもしれねぇな、あの女の超能力」
痛いところをつかれたが、聞こえなかったふりで無視した。
「次に、投げ合うナイフだけど絶対に取れない速度で投げるのは禁止。落としたら負け。刃の部分を掴むのも。そして最後に、ナイフは」
小刻みに震えが起きる右手でナイフの柄をギュッとつかんで彼に見えるように示した。
「抜き身でおこなう。カバーはなしだ。当然掴んだら、手が切れる」
「はっ、いいじゃねぇか。手のひらに負けのしるしが刻まれるんだ。乙じゃんか」
「決まりだな」
数歩後ろにさがる。ナイフを投げるのに必要な間合いを取るためだ。等間隔で並ぶ机の道で僕たち二人は互いを無言で見合っている。樒原がどれだけナイフの扱いに長けていようが、絶対に負けるわけにはいかない。どんな卑怯な手を使おうと、勝つしかないのだ。
ナイフに目線をやる。震えは止まっていたが、カバーがかかっていない刃の危険度は昨日の倍はあるだろう。振るわなくてよくなったのは救いだが、樒原が僕に武器を渡した油断に賭けることには変わらない。
「じゃ、いくよ」
僕はナイフが天井スレスレになるよう、高く緩やかに放った。

２４浮遊、運動、ライフライン

役目を果たしていない蛍光灯のぼんやりとした薄暗闇の下をナイフが通過したと同時に、僕は一直線に走りだした。視線は空中を舞うナイフではなく、それを目で追う樒原にロックオンされている。

カバーがついていない裸のナイフをキャッチするとなると昨日のような余裕はなくなり、当然視線は飛んで来るナイフに固定される。

視野がグッと狭くなるこの時、この瞬間だけが唯一力量で劣る僕の勝算だった。

朝読んだ格闘技の本なんて関係ない無遠慮な一撃を助走の勢いと、鳩尾に当たりをつけ樒原の腹部に叩きこむ。

「ふぐっ」

直接攻撃なんて予想だにしていなかったのだろう。ただの素人の飛び蹴りで、彼は柔らかなクッションのように後ろに吹っ飛んだ。

ナイフが横で落ちる気配がしたが、気にせず崩れた机に埋もれる彼に追撃をかける。

「て、めェ」

もとより気絶させられるとは思っていない。あとはただ、僕に与えられた破壊衝動の応酬だ。

蹴る、蹴る、蹴る、

もとより技などではない、さっきのお返しと言わんばかりの下品な攻撃。樒原を体勢が整うその前に、むちゃくちゃに踏みつけて何も出来なくするためだけの暴力。

「こん、卑怯者がぁっ！」

彼の手が僕の足首を掴もうと伸びたが一瞬はやくそれを回避し、変わりにまた蹴りを飛ばす。抵抗を起こさせないよう、息もつかせず、激しい攻撃を繰り返す。

「調子にのってんじゃ、っ」

倒れた机が、水の流れを妨げる流木のように彼の動きを縛り付けていた。最期に一発トドメとばかり強烈なものを食らわせ、息切れ間近の肩を揺らしながら、樒原を睨みつける。

樒原は口を開かず、こっち睨み返してきていた。

窮鼠の反撃を食らった彼の表情は、静かな怒りに満ちていた。まだ芯が折れていない。僕の最終目標は、彼が二度と花見川と関わりあいをもちたくない、と思わせることだ。

そう思わせるために、容赦をしないと転がった椅子をもち悪役レスラーのようにそれを掲げ、樒原に吐き捨てる。

「花見川のことは諦めてくれ。喧嘩で勝てれば僕の言い分を認めてくれるんだろ？」

ナイフと違って、鈍器のような扱いとなる椅子なら躊躇なく振るうことも、加減も出来る。必殺の一撃ではないが大ダメージを与えることが可能だ。

先ほどのような余裕が表情から消え失せた樒原はチラリと僕を見上げると、不気味に片頬をつり上げた。

「甘ちゃんがッ！」

油断してたのは僕の方だ。作戦、と呼ぶにはおこがましいが、空中を舞うナイフに注目している間に蹴りを放つ、というストレートな戦略が決まり、調子に乗っていたのには変わりなかった。絶対的優位の立場になり、良心をストッパーにしてしまったのか。樒原の鼻を折り、いい気になっていたと言ってもいいだろう。

猛烈に足場が崩れた。視界がぐらりと歪み、僕も倒れるように机をガタガタ崩しながら教室に転がった。

樒原から足払いを受けたのだ。両手に掲げていた椅子は遠くに飛んでいき武器も防具も失ってしまう。

「いって…」

そう呟くと同時に樒原が、僕に覆いかぶさった。

俗に言う馬乗りだ。

下手に刺激するより、ナイフ投げでゲームをしてた方が良かった

だろうか、と脳裏を掠めるより早く右頬に鋭い痛みが走った。
顔面を殴られたのだ。
次に左、右、左とだんだん間隔が短くなっていく。リズムを刻むように樒原は僕を殴っていく。痛みで目が開けられないが、今の彼の表情は音ゲーを楽しんでるみたいなのではないだろうか。
実際彼が楽しそうに奏でるリズムが、苦しみをともなって僕を攻めていた。
口の中が切れ、血の味がし始めたあたりで、意識は自分の今の状況を認めたくないのか乖離を始めようとしていたが、悔しさを強調することでなんとかそれを引きとめる。泣きたくないが涙が出てきた。情けない。
抵抗なら何度も試みた。だけど、彼からは逃れらそうもなかった。言っていた事は本当だったのだ。ただの素人が、勝てるはずがない。
「…わかっただろ？」
息切れ一つせず、急に止んだ拳の代わりに言葉を降りかかってくる。痛覚が僕の瞼を重くするがなんとか開いて彼を見上げた。
「テメーがどう足掻こうと俺にはかなわねー。一瞬ヒヤっとしたが、絶対的力の前じゃちゃちな作戦は捻りつぶされるのがオチだ」
「……」
言い返したいが、鉄の味が占領する口を開くのは酷く億劫だった。それに上手い言葉も浮かんでこない。
「それにしても、よくもやってくれたな。こんなやつにあんなに食らうとは思ってもみなかった」
ぼやけた視界の中で、少しだけ痛そうに樒原は眉をよせた。ははは、ざまぁみろ。
「まさか切り札のナイフをああもあっさり捨てるとは恐れいったが、いかんせん、訓練が足りなかったな」
「かっ、」
歯は折れてないのが幸いだ。永久歯がなくなるのは勘弁してほしい。

「空手でも、やってれば、勝てたかも」
「まったくだ」
僕の負け惜しみをあっさりと肯定すると、樒原は僕の顎をひょいと掴んでドスのきいた声音で続けた。
「さて、これで勝敗は決した。わかってんだろ？大人しく花見川むくげを呼びもどせ。これ以上は寒いだけだ」
それは不可能だった。彼女の携帯は今、この教室にあり、コールしたらもう一度乙女の祈りが流れるだけだ。
「断る」
また殴られた。僕の話を聞く気がないのか、ただ殴るためだけの質問のように彼はさらに続けた。
「まだ降参しねーの？その根性は認めてやるよ」
「は、花見川は、通り魔を見かけただけで、君に目をつけられるなんて、理不尽だと思わないのか？」
「思わねーし。運命っつう巡り合わせだっつーの」
「ぐ」
完全にバカに仕切ったデコピンをおでこに食らう。僕の心を折ろうとわざとそんな攻撃手段に出たのだろうか。
「別にあいつが超能力者かどうか調べるだけだ。違かったら解放するしな」
それだから困るのだ。彼の口振りから言って、認定されたら間違いなく花見川は裏社会の人になってしまうだろう。人の尊厳を無視して。
「君は、君たちは、おかしい…」
「ああ？」
残された意識を舌先に集中させる。もう、なにもない。ただ空気に色をつけているだけだ。
「もうすぐ死ぬ人がいたところで、その人を殺してやろうという考えが浮かんでくること事態が狂気の沙汰だ」
「んなこたぁわかってんだよ。善人ぶろうとしてんじゃねぇぞ白江

藤吾。俺だって好きでやってんじゃねぇんだ」
「僕が、もし残された家族なら君を恨むし憎悪さえ抱くだろう。君たちがやっていることは救済ではなく、ただのお節介だ。それを理解した上で、君が手を汚しているのなら、」
息を吸ってそして吐く。口の中は血の味で溢れていた。
「樒原、君は、自らの殺人嗜好に言い訳をつけているだけだ」
「あ？」
一瞬彼の動きが細胞レベルで静止した。隙が出来たのだ。だけど、押しのけるだけの力は残っていなかった。
僕に出来るのは呼吸とともに言葉を撃つだけ。それも限界に近づいている。
「酷い話、だ」
鼻で笑う。鼻血も出ているみたいだ。呼吸をするのでさえ苦しい。
「ただの殺人鬼が、もっともらしい能力にかこつけて、異常な精神を慰めているのだから」
「てめぇごときが」
凄まじい憎しみが湧き上がるのを肌に感じた。洒落にならない怒りの念、くすぶっていた火が朽ち木に燃えひろがるかのように一気に室内に充満する。
「悟ったような口をきくんじゃねぇッ！」
ああ、出過ぎた真似だった。完璧に沸点を通りこした樒原にかける言葉は僕の舌に残されていないし、諦めが脳に蔓延ったのだ。容赦ない彼の拳が、バネが溜め込むように高く上がったのを見たとき、僕は静かに瞳を閉じた。
最期の光景が暴力のワンシーンだなんて、僕の欲するエンディングではない。
瞼の裏のスクリーンは真っ暗だけど、変わりに好きな物を上映することができる。望みは一つ、綺麗なものだ。
今までの十五年で、僕が見た、一番美しいもの。

ああ、これか。
それは、広がる景色でも、初恋の人でもなく、
スクラップの海で笑う少女の顔だった。
「……」
「お前…」
僕の意識が途絶えることは無かった。
樒原が僕に鉄拳を浴びせなかったからだ。その代わりにドアが開いた音が教室に響きわたった。
「なんで、戻って」

教室の入り口に花見川むくげが立っていた。

回想の中ではなく、実在する、少女。
飛散しだした意識が再び戻り、僕の瞼をこじ開けた。

25乱入、噴煙、決着

今までの努力がすべて水の泡となる、とってはいけない行動というものがこの世には存在する。例えば今、花見川が取っている動作がそうだ。安っぽい感情にまかせて、教室に戻ってきたはいいが彼女が来たところで現状は改善どころか、悪化するだけだろう。

「戻れっ、バカ！」

どうして僕が樒原に殴られているか、わからないわけではあるまい。彼女が戻ってしまったら意味がなくなってしまう。切れた舌を震わせ大声をあげる。

僕に馬乗りになっている樒原はニタニタと笑いながら、花見川を歓迎しているようである。彼女は動かず教室の惨状を、両目を見開いて観察していた。机がたくさん崩れ、男二人がもみくちゃになっている様子、といったら語弊があるが、僕が樒原から暴行を受けていることは確かである。

「早く行けっ！」

もう一度叫んだ。なにをしに戻ってきたか知らないが、頼むから自分のことだけを考えて生きていってほしい。

いくら樒原が通り魔だろうと、殺しはしないだろう。少しいたぶられるだけだ。そういう淡い期待を突っ立ったままの花見川に再び吐き出そうとした時だ。

「トウちゃんからぁぁッ」

こっちに向かって彼女は走りだしていた。手に持った物をいじりながら、怒涛の勢いである。あれは、

「嘘、だろ？」

消火器だった。階段のところに備えつけられていたものだ。

呟く樒原に、少女は安全ピンを外し、照準を合わせレバーを握った。

「離れろぉぉぉ！！！」
赤い円筒形を携える少女の姿はすぐに薄いピンクの煙に紛れてわからなくなった。彼女の叫び声と噴射音とがまじり、いきなり戦場に出たのではないかと錯覚させられるほどの硝煙弾雨。
「ぶっ」
消火剤に含まれる成分が僕の視界を覆い隠した。雲に突っ込んだかのようだ。正確には僕ではなく、上に居座る樒原が包まれているのだけど。
「て、めぇ、くそがっ！止めろ！」
彼は叫びながらむせび返っている。あたり前だ。消火器にはキチンと『人に向けてはいけません』と注意書きがされているハズであり、いくら人体に無害だと言っても、その煙自体がスモーク弾のようなものなのだ。
消火剤の粒子はとても細かく、少し吸っただけで咳がおこる。勢いも想像以上に凄まじく、直撃を食らっていない僕も状況が把握出来なくなるほどあたりはピンクの噴煙に満ちていた。
「ど、けぇぇぇ！！！」
花見川が叫んだのとほぼ同時に、僕の身体がふっと軽くなった。どうやら僕の上に乗っていた樒原が堪らずどいたらしい。
ブシューと轟音をあげ吐き出される消火剤に終わりが見えないので直接止めに行こうとしているようだ。
「でめぇ、くそったれがっ！」
「こ、こないで！」
視界が悪い。煙が目に入らないよう閉じているのだろうか、樒原はヨタヨタと移動しながら消火器をむける花見川に近づくが、常に距離を取ろうとする彼女にたどり着きそうもなかった。
上からの圧力がなくなった僕は、軽くなった身体を起こし立ち上がる。殴られた痛みやらなんやらが倦怠感に変わろうとしているが、ここで転がって見ているだけなら将来絶対に後悔するだろう。着々と花見川に近づく樒原の背後に一気に走る。

僕の視界も相変わらず最悪だが、樒原が壁になっているため直撃は免れている。僕は目を極力閉じないように彼の背中にまわった。
「んなっ！？」
首をロックし、身体を宙に浮かせ、足が軸にならないよう床にたたきつける。思ったよりすんなりできた。今朝読んだ格闘技の本に書いてあった取り押さえ方だ。彼を転ばせた後は、ドラマの中の刑事がやるような体勢で、腕を捻りあげ本の通りの間接技で自由を奪った。
「てめぇ、調子こいてんじゃねぇぞタコっ！さっさと放せ！」
「嫌だっ！」
上手く技は決まっているらしい。彼の自由を見事に奪ったのだから、本の知識もなかなかバカにしたもんではない。非力な僕の力で殺人鬼を取り押さえているのだ。これはもう凄まじい奇跡なのである。
「花見川、花見川っ！」
「ふ、ふぇ？その声はトウちゃん？」「樒原は無力化したから、噴射を止めてくれ！」
噴煙は変わらず僕らを包んでいた。
味方である僕にも見境なく煙は襲いかかっている。もう、凄まじくて目も開けていられない。
必死の訴えに、花見川は噴射口の向きをかえ、煙が直接僕らにかからないようにした。
「と、トウちゃん、すごい！」
「君のおかげだよ。っごほ。そ、それより早く消火器を止めてくれ」
「あっ、え、これどうやって止めるの？」
「レバーを握るのをやめれば、とまるはずだろ」
「え、でも止まらない、あれ」
口の中が粉っぽい、僕が抑えつけている樒原も苦しそうに咳こんでいる。タンは消火剤のピンクになっていることだろう。
「嘘だろ。壊れてるなんてことはないはずだから……、あっ、安全

ピンは？アレをもとの位置にさせば…」
「あ、と、とまった…」
ようやく止まった消火器だが、その噴煙自体が火災と間違うのではないかと思うくらいの凄まじい勢いだった。
「……なかの薬剤がなくなったんじゃない？」
「え、そ、そんなことないよ！私がなんとか止めたんだよ！まだ残ってるはずだから」
「それならいいんだけど」
粉だらけの僕らと違い一人小綺麗なセーラー服姿の花見川は一仕事終えたように額の汗を拭った。僕も身体中の粉を振り落としたい。
「一件落着みたいな雰囲気のとこ、わりぃんだが」
僕に抑えつけられたまま床に伏した楹原が声をあげた。
「どいてくんねーか？痛いんだわ」
「誰がどくか。さっきむちゃくちゃ殴られた恨みをはらしたいところだね」
僕の口内は血液と消火剤とが混じって凄まじい不快感を演出しているのである。最悪な気分だ。
ジンジンと痛みが続く頬も、血が止まらない鼻も、蹴られた脛も、すべてひっくるめてコイツのせいだ。
「そりゃ今のでチャラだろ。はやくシャワー浴びたいんだけど」
「奇遇だな。僕もだ」
二人同時に花見川を見つめると、困ったように彼女は頭をかいた。
「あの状況でいいアイデアが浮かばなかったんだもん…」
「まあ助かったよ、ありがとう花見川。君が助けに来てくれなかったら僕はこの殺人鬼の新たな犠牲者になるところだった」
再び赤髪に視線を落とす。彼の頭髪はいまやピンクの粉で悲惨な目にあっていた。
彼だけではない、教室中がチョークの粉をぶちまけたみたいな有り様だ。これの片付けはさぞ骨が折れるだろう。
「あん時は殺そうかとも思ったが今はなんだか興がそがれて、やる

気が萎む風船みてぇにどっかいっちまった」
「一生やる気スイッチをオフ状態にしといてくれ」
「だから、もうなんもしねぇから、どいてくれっつうの。痛いしかったるいしで最悪だわ」
「信じられると思うか？君は犯罪者だぞ。今放したら僕がピンチじゃないか。それに花見川もいる」
「っち、細けぇやろうだな。このままじゃお前も体力なくなって結局勝つのは俺になるとこを見逃してやるって言ってんのによ」
「言ってる意味がわからないよ」
「だから、今から警察をよんで来るまでずっと俺を押さえつけられるとでも思ってんのかよ。どうせジリ貧になるんだから、今の有利なうちに勝利者宣言しとけっつう話だ」
　不利な状況だとわかっているならなぜ彼はこんなに上から目線なのだろうか。そう疑問に思ったが、彼の言っていることに一利あった。確かにこの状況では埒があかなく、最悪終いまでは僕のスタミナがもたないだろう。
「今の発言、勝ち鬨をあげろってことはつまり、僕の勝ちってことでいいんだな？」
「お前たち、の勝ちだ。もうどうでもいい、早く帰りてぇ」
　昨日の夜、僕と樒原が交わした約束の一つ、花見川と会うのをあきらめてもらうためには喧嘩に勝つというもの。もうすでに出会ってしまっているので必然その前に提示した方の条件を飲んでくれたのだろう。花見川自体を諦める、という条件。
　そんな事情を知らない花見川は、僕らがなんの話をしているのかわからないといった表情でキョトンとしていた。
「本当に本当だろうな？解放した瞬間、やっぱ嘘、っていって牙をむくのはなしだぞ」
「そんなケチなことしねーよ、てめぇじゃあるまいし」
「よし、それじゃ勝ちということで、もう僕らと関わりあいになるのは止めてくれよ」

「あー、はいはいわかりましたよ。下手に藪をつついて粉まみれにされるんじゃかなわねーしな」
彼と決着がついたようなので、つかんでいた腕を放すことにした。
「あ、そのまえに樒原もう一つ条件を飲んでくれ」
「ああん？なんだよ」
大切なことを寸前で思いだした。
「教室元通りにしといてくれない？」
完全に彼を解放する前に、軽くあたりを見渡し惨状に頭が痛くなった。机は倒れ、教室は粉まみれ、中途半端に使われた消火器は、その存在自体を秘匿するのが難しいだろう……下手したら停学ものである。出来ることなら先生にバレないようにしときたいところだ。
「はぁぁ？なんで俺が！？やだよ、だるい！」
「君が教室に来なきゃこんなことにはならなかったんだ。頼むよ」
「知らねーよ！てめぇらの教室だろ！むちゃくちゃにしたのは俺じゃねぇしよ」
「このままじゃ学校に君が不法侵入してたことがバレるし、そうなると君の会社の人たちにも迷惑がかかるんじゃないかな。僕如きじゃこの惨状を改善できそうにないし」
「脅す気かよ……、はぁ、まぁ一理あるし、しょうがねぇな。仲間に手伝ってもらうか…」
「仲間？」
「掃除がめっちゃ上手い能力を持つやつ」
なんでもかんでも能力ってつければ認められると勘違いしてないだろうか、この殺人鬼。
花見川は相変わらず首をひねったままなので気づいてないみたいだけど、下手したら君もその怪しい樒原カンパニー（仮）という微妙な会社に入社させられるところだったんだぞ！と声を荒げたかった。
「全部君に任せるよ」
言って僕は立ち上がる。約束通り解放された樒原は僕らには何も

せず服についた消火剤を払いおとしている。
「にしてもこれを元に戻せってか、はぁぁ、鬱だぁ…」
「それじゃ僕たちは帰るから」
肩を落とす彼を無視して花見川と一緒に教室を出ようとあるきだす。
「マジか。少しは手伝ってけよ」
「断る。自分でまいた種だろ。自分でどうにかしなよ。箒やちりとりはそこのロッカーに入ってるから」
「なーんか納得できねぇな」

ぶつぶつ不満を口にしている彼の方をドアに手をかけ振り向いた。最後のお別れの言葉を爽やかに言ってやろう。
「それじゃあな、樒原。もう二度と僕らの前に現れるなよ。付き合ってらんないからさ」
「そりゃこっちのセリフだ」
「あ、そこのナイフ忘れるなよ。床にキズがついて無きゃいいんだけど」
「んーあー」
樒原は肺に溜まった空気を吐き出すように低い唸り声をあげながら、体からピンクの粉を振りまいて腰を屈めて床に転がる囮にしたナイフを拾う。
「床にゃ、キズはついてないみてぇだなぁ」
僕の心配に返事をしてから、近くに落ちていた革製のカバーでナイフの刃を覆うと、それをひょいと投げてきた。
「え、なんだよ？」
うろたえつつもなんとかそれをキャッチする。柄の部分だった。
「餞別」
「いや、いらないんだけど」
「うるせぇな。てめぇは軟弱なんだから武器くらい持ってろ」
「いらないものを押し付けてないか？」

「今俺機嫌わりぃから、ピーチク騒いでるとそのナイフで舌を刻むぞ」
「それはご免だ」
触らぬ樒原に祟りなし、だ。大人しく受け取ったソレをしまう。
「てめぇのせいで収穫ゼロであとで大目玉くらう俺の身にでもなってみやがれ」
「慰謝料と医療費をチャラにしてやった僕の度量の深さに感謝しなよ」
心配そうな花見川の背中をとんと押してやり、廊下に出た。忘れる前にさっき回収した彼女の携帯電話を渡しほっと息をつく。
やっと安心できる日々が帰ってきた。あのクサレ殺人鬼と二度と会うこともないだろう。
花見川と出会って始まった奇妙な3日間、密度が濃い72時間だったけど、過ぎてみれば、いい思い出に、…なる、のかなぁ、これ。
びっこを引く僕の足を花見川は心配そうに見ていた。

26風韻、電炉、自転車で行く

夏休み最後の日、というとノスタルジックな気分にさせる素敵ワードの一つなのだが、現実は手をつけていない宿題や日記が新学期にむけ牙をとぐ恐ろしい日でもある。

僕は全ての宿題を7月中に終わらせたので関係ないが、迫り来るタイムリミットには不真面目な学生でなくても戦々恐々だろう。

今日、8月1日は果てしなく長く感じた長期休暇にだんだんと終わりが見えてきた物寂しい1日なのである。

そんな夏休みのごくありふれた日常に、ある種特別なイベントが待ち受けているとは、終業式の時には思いもしなかった。出会いが急なら別れも急である。

高一の一度しかない夏に貴重な時を過ごせたのだから、一応は感謝をすべきなのだろうか。

「トウちゃん、色々ありがとね」

「んー」

夏はまだ終わらない。熱気を吹き飛ばすような爽やかな風が前から後ろへと流れていく。

「トウちゃんがいなかったら、どうなってたか」

「それは考えすぎじゃないか」

「そんなことないよ！なにもかもトウちゃんのお陰なんだから」

宿題と言えば、僕が『花見川むくげ』から与えられたサマーワークは今日で無事に終わりを迎える。非常に難題ではあったが、どうにかこうにか切り抜けることができた。通り魔犯を撃退できたのは僕だけの力じゃなく消火器を持って乱入してきた花見川によるところが多いだろうが救世主としては及第点を頂きたい。

花見川の白江家居候は今日で終わってしまうし、大目にみてほし

いのだ。
「ねえ、トウちゃん」
「んー、なに？」
「最後だしさ、私の事、下の名前で呼んでよ」
僕達は今、地元の駅へと車輪を転がしていた。自転車二人乗りは条例で禁止されているけど歩くのより数倍は楽だし、８月くらい子供に自由を認めてもらいたいところである。
「えーなにー聞こえないー、風が強くてさー」
僕の肩に手を乗せ、後輪のわずかなスペースに立つ花見川は小さく「いじわる」と楽しそうに呟いたけど、それも風のせいにすることにした。
抜けるような青空と蝉時雨の下、心地よい風に包まれて僕はペダルを回転させる。チェーンが悲鳴をあげているが、重量オーバーには目をつむっていただきたいところだ。

「兄さん、もう少しスピード出しましょう。電車が来ちゃいますよ」
花見川の荷物を載せて隣を併走するモモちゃんがちらりと二人乗りする僕らを見た。風と共に彼女の長髪も後ろにさらりと流されている。
「そうは言うけどね、モモちゃん。二人乗りでスピードだすと結構危険なんだよ。バランスも取らなきゃいけないし」
「ほんとうにそれだけでしょうか」
「なんだって？」
「ふっ、なんでもありません」
彼女は意味深な笑みを残して、僕の自転車のゆったりとしたペースに合わせてくれた。
これが花見川と過ごす最後の日だ。
少しだけ、ペダルの漕ぎが甘くなるのは、なにかが絡みついているからだろうか。

花見川むくげ。その幼い容姿からは想像が出来ないほどのガッツと、不思議を秘めた少女。
超能力があるとか言い出した時、一体なにを言っているんだと思ったが、確信させる出来事があまりに多く認めるしかないだろう。正直まだ疑ってはいるけど。
「もうバイバイだね」
「そうだね」
「……ねぇ、トウちゃん。寂しい？」
「少し」
「そっか。わたしも」
後ろを向くことは出来ないけど、彼女が笑ったのがわかった。
「でも住む場所みつかってよかったじゃん」
「うーん、１０日も暮らした場所から離れるのは、逆にホームシックになりそうだよ」
「住み心地に満足いただけたようでよかった。白江家としてはね」
花見川の居候は今日で終わる。火事に見舞われた家の変わりを見初めるまで。はじめからそういう約束だった。
彼女は彼女のいたところに、僕は僕の生活がまたスタートする。余程の事がない限り、再会するのは難しいだろう。
「まあでも一生会えなくなるってわけじゃないし、また遊ぼう」
「うん。電車ならすぐだもんね……」
彼女は静かに呟いた。

駅についたのは、お昼も中頃をむかえた時だった。駅前は人気がなく閑散としている。普段電車は利用しないが昨日パソコンで調べた花見川の乗る電車はもうすぐ出発だった。
「それじゃ…」
「ああ」
「またいつでもいらして下さい」
改札口をはさんで、僕たちは最後の別れを交わした。手を小さく

振った花見川は静かに笑って後ろを向き、ホームに続く階段をトボトボと上りはじめた。僕らの家に泊まりに来た時と同じバックを肩から背負い、まるでハイカーのようである。僕はそれをぼんやりと見送った。

「…それじゃ帰ろうか。母さんが昼ごはん作って待ってる」

花見川の姿が見えなくなったので、向き直してモモちゃんを見る。

「兄さん、これ」

「…定期券がどうかしたの？もう死んでるみたいだけど」

モモちゃんは僕に、黒いケースに入った定期入れを差し出してきた。そこには電子端末の固いカードが入っている。彼女は電車通学なのだ。しかし当然だが期限はとうに過ぎていて、継続手続きをしなければただの厚いカードでしかない。僕と違い夏休みに夏期講習がなかったから、定期を買い替える必要がなかったのだろう。もっとも徒歩通学の僕には関係ない話だが。

「電子マネーが幾らか入っているので改札をくぐれます」

「ふぅん。それで」

「あなたに預けます」

「は？」

無理やり渡された定期と彼女とで視線を何回か往復させるがが、モモちゃんの表情に変化はなかった。涼しい顔で僕を見つめ返している。

「これをくぐれるようになったのならやることは一つでしょ？」

「ん、あ、あぁ」

半ば強制的に僕は花見川の後を追って、改札機を通り、ホームを目指していた。

階段を二段飛ばしで駆け上がった僕の耳に次の電車の接近を知らせるベルの音が届いた。もう幾ばくもない。

「花見川！」

幸いなことに、彼女は階段を上りきった先で電車を待っていた。
「え、トウちゃん？」
予想外の出来事に驚いたように目を丸くしている。
「どうしてホームにいるの？」
確か駅員さんに頼めば見送り用の切符を貰えるような気がしたが、事実は妹の定期を利用しての入場だし、そんなまどろっこしい説明するのは億劫だ。
「細かいことはどうでもいいよ」
短距離走で荒くなった呼吸を整えながら、僕は続けた。
「見送りに来たんだ」
「え、あ、ありがと。わざわざ」
「君には助けられたからね」
「私が助けられたんだよ」
互いに樒原との事を同時に思い出して一緒に吹き出した。真っ白けになった樒原。あの後ちゃんと片付けをしてくれたのだから律儀ではある。次の日にはいつも通りの教室に戻っていた。
「また、今度ね」
「ああ、そうだなぁ、」　電車が到着し、ホームに轟音と風が巻きおこる。僕の声がそれにかき消されないように一呼吸おいてから続けた。
「また私服で街をブラブラしようか」
「デートだねっ！私は制服でもいいよ！」
「広義ではデートってことになるのか。僕にはそんな気ないけど」
「もぉう、照れなくっていいよー」
「まあなんでもいいさ」
アナウンスが流れ、ドアが開く。
「んじゃ、行くね」
「ああ」
降りる人はまばらで、乗客自体余りいなかった。花見川は電車と

ホームとの間に生じた溝をひょいとまたぎ、電車に乗ると、僕の方を向いて、また小さく手をふった。
「さよなら、トウちゃん」
「それじゃあな、」
ドアを閉まる、その寸前に僕は言葉を紡ぐ。
「むくげ」

がしゃん、ドアが閉まるとほどなくして車体は前方へと進行を開始する。微笑みの中に驚愕を浮かべた彼女が横にスーとスライドして離れていく。
ドラマかなんかの電車での別れのシーンでは、追いかけるのが鉄板なのだが、さすがに人の目があるしそんなことできない、その代わりといってはなんだが、僕も小さく手をふった。

「ちゃんとお別れは言えましたか？」
「うーん、まあ、たぶん」
「本当にてきとーな人です」
花見川がいなくなった道を妹と二人でサイクリング。夏の日差しはどこに行こうと着いてまわる。
「まあすぐに会えますよ」
「そうだねー」
そう言って自転車を前に転がす。
「ところでモモちゃん、改札出る時、駅員さんに止められたんだけど」
「そうですか」
「……」
夏の盛りのもの寂しさを含ませた蝉時雨と、軋んだ車輪の音と合わさって不思議と耳に残るその合唱団は、厳暑の記憶として僕の耳殻に幻想的な音の葉の芽生えを植え付けた。

２６風韻、電炉、自転車で行く（後書き）

あ、あと一話です。

27終点、始点、エピローグ

1ヶ月後。9月1日新学期。
夏休みはまたたくまに過ぎ去りあとに残ったのは連休明けの倦怠感と休日への未練だけである。クラスメートたちとの久しぶりの会話を交わし、僕はまだ眠気が残る目をこすりながら席についた。
橘が茶化すように「夏期講習ごくろうさん」と後ろを向いて言ってきたので「とても為になったよ」と生返事をしかえす。橘は結局予定していた韓国旅行は中止になった等々、愚痴愚痴と説明してくれたが、ハナから聞く気がない僕の耳には届かない。代わりにどっかの不細工なキーホルダーをくれたが、彼が僕に与えた様々なトラウマ（エロＤＶＤ）を考えればこの程度のものでは埋め合わせできないだろう。
教室に溢れるクラスメートたちは朝のＨＲまでもう時間は残されていないので一通り席についているが、まだ話足りないらしい一部の生徒は相変わらず立ち話に花を咲かせている。久しぶりの再会を喜ぶ気持ちは分かるが、もう何分もないから早く席についてくれないだろうか。

「ねぇ知ってる？」
隣の席に座る五十崎が僕にそう話かけてきた。
「なにが」
「転校生が来るんだって」
「へぇ。どこに？」
「そんなのウチのクラスに決まってるじゃない。じゃなきゃ話題に出さないわよ」
「言われてみればそうだなぁ」
ぷくぅ、とわざとらしく彼女は頬を膨らませた。

「でもさ、普通そういうのって夏休み前に言うもんじゃない？担任がサボったのかな」
「違うわ。なんか家庭の都合で急な転校になったんだって。夏休みの最初らへんに編入手続きを開始したらしいよ」
「家の都合以外に転校なんてあるのかよ」
「さあ。あ、でも高みを目指してレベルが上のとこにいくとか」
「ああ。なるほどね」
　それにしても女子というのは不思議なネットワークでそういった噂を拾ってくるから凄い。五十崎柚（いがざきゆず）も例外ではないようだ。
「あれ、反応薄いわね。もしかしてもうこの話知ってた？」
「いや別に。それよりさ、その転校生って男子、女子？」
「んー、確か女子だったと思う。あ、もしかして白江もそういうのに興味あるの？」
「何いってんのさ。男子なら友達になれるかもしれないだろ」
「その言い分じゃ女子とは友達になれないって言ってるみたいね。悲しいわ。私と白江に友情は存在しないだなんて」
「君が存在してると思うなら、あるんだろ」
「うわぁい、じゃ私と白江は友達同士ね。きひひ」
　変な笑い声だったのでつられて僕も吹き出してしまった。
　後ろをチラリと見た橘が「意味わかんねー会話してんなぁ」と皮肉を言ってきたが、その通りなので言い返すことが出来なかった。

「いつまで立ってるんだ。早く席につけ」
　教室のドアを開け、担任がそう注意を促した。その声でようやく全員が席につく。
　教壇に上がり先生は空席がないのを確かめてから大きな声で夏休み明けの挨拶を続けた。具体的に言えば、日焼けしたものがどうたらとか事故の報告がなく安心した、とか一時間もしたら脳から綺麗さっぱりなくなるようなどうでもいい話だ。
「さて、」

そんな短めの前置きを終わらせ、ありふれた接続詞を先生は用い、「もう知ってる者もいると思うが、このクラスに新しい仲間が加わる」

小学生相手のような幼稚な言い回しで必要事項だけを端的に告げた。それに一部のおちゃらけた男子が「よっ！」と意味不明な合いの手を加える。

「夏期講習参加者の白江と三角（みすみ）は会ったと思うが、他の者は初対面だな」

「……」

隣の五十崎が「そうなの？」と目で尋ねてきたが、僕だって初耳である。

根拠不明な確信は、あった。

おかしいとは思っていたんだ。

完全に部外者な彼女がそう簡単に夏期講習に参加できるだなんて。

「じゃ、入って来てくれ。花見川むくげ　さんだ」

教室の扉が再び開き、すっと小柄な少女が敷居をまたぐ。

今度はセーラー服でなく僕たちの高校の制服に身をつつんだ、丁度1ヶ月前に別れたばかりの女の子。

花見川……

驚きで言葉がでない。

いや、まさか、そんなバカな。いくら前住んでたところが火事に合ったからって転校を選択するなんて突拍子のないやつだ。

というか、

……同い年だったのか。小柄で童顔だし、年下の中学生だと思っていた。

先生の横に立った花見川は緊張した面もちで、自己紹介を述べた。

僕と不法投棄場であった時のような一方的なものでなく普通のあたりさわりのない内容のものだ。それが終わると花見川は横で黒板

に彼女の名前を綴っていた先生をみた。
「ん、ああ。そうだな。んーと、じゃ、なにか花見川さんに質問がある人はいるか？」
「はい！」
先ほど合いの手をいれた男子がいの一番に手をあげ、許可をもらう前に喋りだしていた。
「彼氏はいますかっ？」
「あ、えーと」
いきなりのプライベートな質問とその答えが気になる生徒たちの視線の矢が彼女に襲いかかる。瞬きを数回してから、微笑んで続けた。
「いません。募集中です」
そのアルカイクスマイルに何人かの男子はきっと虜になっただろう。質問をした生徒は「イエス！」と叫んで小さくガッツポーズをとった。
「あー、うむ、他にまともな質問がある者はいないかー？」
一部を強調させた先生の呼びかけに答えるものはなく質問は打ち切りを迎えたらしい。先生は彼女の背中をトンと叩いて「それじゃ最後に一言」と彼女に命令した。
「はい、えっと、これからお世話になります。仲良くしてください、」
小さく息を吸ってから彼女は続けた。
「私の事はみなさん気さくに、花見川とでも」
そう言ってまた微笑む。
自意識過剰かもしれないけど、その笑みは僕だけに向けられていた、気がした。
「よかったじゃない、白江。可愛い女の子よ」
「うん。そうだね」
僕が漏らした息が隣の五十崎の耳に届いたらしい。

「それにしても変わった名字、花見川、だって。うふふ、なにか民族学的云われがありそうね」
「そんなん考えながら生きてるのって虚しくなんねーか？」
前の席の橘が振り返ることなく、ニタニタ笑いの五十崎に言った。
「全っ然！楽しいじゃない！！世の中は不思議な現象に満ちてるのよっ！それをつかみ取る一つのキーワードとして名前があるんじゃない」
「考えすぎだろ。名前が奇妙だと超能力や霊能力を会得する、ってのか？」
あながち間違っていないのが怖い。
「そうは言っていないわ。ただ、そうね、例えば座敷童に出会う確率はきっとゼロではないといいたいわけ。名前が珍しければ、そう言った不思議な現象を引き寄せるような気がしない？」
「わ、笑えない冗談はよせ。そ、そんなわけあるか。橘のようによくある名字でも、災難にあう時はあうんだぞ」
「なにをそんなに、ビビってるのよ？」
その後二人はわーわーと無駄な討論を軽く行っていたが、僕の耳がそれを捉えることなく、脳内は、転校してきた花見川の名前の意味とがミックスして細胞を埋め尽くしていた。
彼女の名前の意味する由来を、僕は知らない。
ただ、槿（むくげ）の花言葉は、尊敬、柔和、デリケートな美、そして『信念』。どうでもいいことだが、なんとなく見た辞典にはそう書いてあった。

そんなことより手をつけてもいない夏休みの日記（高校生らしくニュース記事についての考察を含めたレポート）をどうするか、考えるべきだろう。
そうだ、まだ時間は残っている。最終提出日は最初の授業だし、夏はまだ終わっていないのだから。

27終点、始点、エピローグ（後書き）

と、いうわけで「サマースクール」全話投稿終了です。
春先に完成していたものを、ゆっく〜り投稿して、タイトル通り「夏」に掲載完了したわけですが、……いかがでした？
こういうテイストでやるのは初めてだったので色々と支離滅裂なとこがあったとは思いますが、読み手の心を響かせることができたのなら、私としても「成功」した、と言えると思います。
「サマースクール」はこれで完結ですが、まだ書ききれてない部分があるので、機会があれば続き的なものをお届けできたらなぁ、と思っています。
……でも多分モチベーションが保てないので、あまり期待しないでください。
とにもかくにもここまで読んでくださってありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1576l/

サマースクール

2010年10月8日13時23分発行